
学園戦機ゲートキーパー

黒木猫人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園戦機ゲートキーパー

【Nコード】

N8727T

【作者名】

黒木猫人

【あらすじ】

昔、幼馴染みの女の子がイジメられているのを目の前にして、見捨てて逃げ出したトラウマを持つ、小林走太。彼は、高校二年生になったある日、突然巻き込まれた灰色の空が広がる世界で、巨大ロボットと異形生物が戦っている世紀末な光景を目撃してしまう。何とかその場から生き延びることに成功する走太だったが、翌日、見捨てて逃げ出してから以来、十一年間会話すらしていなかった赤毛の幼馴染み・紅坂麗央奈に、声を掛けられる。「走太……昨日、巨大ロボットと怪物が戦っているのを見なかった？」実は、彼女はその巨

大ロボットの操縦者であり――。十一年間の凍てついた時を経て、幼馴染み二人の関係が今、動き出す。学園ロボットアクション&ラブロメデー！。2011/7/15に、エピソードを更新。完結しました。

プロローグ

小林走太は、自分は多分、平凡に生きて、平凡に死んで行くのだらうと思っていた。

特に高望みはしない。最も手に入れたかった幸せは、とつくの昔、幼い時に自分の意思で手放してしまっている。

だから、せめて平凡に過ごせれば、それが自分の人生の最上なのだらうと思っていた。

しかし、今現在目の前にある状況は、明らかに平凡から外れてしまっている。

なにせ、見たことも無い巨大人型ロボットが、見たことも無い巨大異形生物と、謎の壮大なバトルを繰り広げているからである。

「えっ……何コレ？ 夢？ 夢だよね？」

走太は目を瞬かせ、辺りを見回す。

確か、自分は学校から自宅への帰路を歩いていた最中だったはずである。帰路はちょうど学生達の帰宅ラッシュ時間で混み合っており、走太が立っている大通りの交差点は本来、人で溢れていて良いはずなのだが……。

「あり得ないだろ……！ だってさっきまで……」

走太の周りには人っ子一人居やしない。

交差点の信号が無意味に、赤と青の光を交互に灯しているだけである。

交差点の四方を見回す。が、大通りの彼方まで、何も無い。車も人も、何も見えない。

あるのは、ゴーストタウンのごとく静まり返った街並みだけ。

高校に入学して、今年の四月現在で一年が経過し、この街も大分見慣れたものだが、こんな街の光景は見たことが無い。

地平の様子を粗方確認したところで、空を見上げる。雲一つ無く、澄んでいるのだが、明らかに色がおかしい。青っぱさは欠片も無く、

どんよりとした灰色だった。

そして、そんな灰色の空を縦横無人に飛び回り、ビーム兵器を撒き散らし、流れ弾で時折街を破壊しながら世界の終末チックなバトルを繰り広げる、ロボットと、異形生物。

何なんだこれは。一体、何がどうなっている？

「——って、おわあああ!？」

状況に戸惑っていたのも束の間、巨大異形生物が巨大人型ロボットに吹っ飛ばされて、こちらに突っ込んで来た。

走太は全力疾走し、ハリウッドのB級アクション映画の主演男優さながら、大きく跳躍、大通りのコンクリート上を綺麗に前転し、見事な直立復帰を果たす。

うわあ、すげえ、人間って、必死になれば意外と凄まじい動きが出来るもんだ! とやたら冷静に頭の中で考えてしまう。

それはともかくとして、走太は恐る恐る背後を見やる。

「ひいひい!？」

覚悟はしていたが、それでも悲鳴を上げてしまった。

走太はヘタレだ。そのことは自分が一番良く知っている。ハリウッドの主演男優なら、ここで気の利いたジョークの一つでも言うのだろうが、走太には絶対に無理である。

走太の眼前に、巨大異形生物がうつ伏せで転がっていた。

しかも運の悪いことに、巨大異形生物と目が合ってしまった。紫色の流線型の頭部に付いている、大きく赤い一つ眼と。

「ゲゲゲギガゴゴ!」

赤い一つ目が点滅して、何か宇宙人語を喋った。

その直後、上空から巨大人型ロボットが勢い良く降下して来て、巨大異形生物の背中を踏み潰す。

ロボットアニメに出て来そうな、ヒロイックな全身赤色のボディ。全身に分厚いアーマーを装着し、一撃で何もかも消し炭に出来そうな、長大なキャノン砲を両肩に背負ったそれは、まさに重火力型といった出で立ちだった。

『この一撃で決める！ 覚悟！』

ロボットの黄色い、二つのアイカメラが点滅し、外部音声が辺りに響く。女の子の声だった。

あれ？ この声、気のせいかな、聞いたことがあるような……？

カシャコツ、と真つ赤なロボットの腹部装甲の一部が開き、銃口らしきものが覗く。そこが深紅に輝き出し、走太が肌に感じるくらい熱量が収束してゆく。

（ん？ ちょっと待て。俺のこの位置ってまずくね？）

完全にロボットアニメの必殺技シーンを眺めている気になっていたが、もしもこのままロボットが必殺技を放ったなら、自分のようなひ弱な人間は、目の前の異形生物よりも先に蒸発してしまうことだろう。

『くらえ！ クリムゾン・ノ——』

「ちよつ、待って！ そのロボット、必殺技ストオオオップツッッ！」

『えっ！？』

銃口の熱量収束が止まり、深紅の輝きが霧散する。

「と、止まった……！」

『嘘でしょ……！？ なんで……！』

驚いたように、後退する赤いロボット。

異形生物は、その隙を見逃さなかった。大きな尻尾を振り、赤いロボットを弾き飛ばす。

『ぐっ！？』

ロボットは大通り沿いのビルの壁面に叩きつけられる。

異形生物がゆっくりとその巨体を起き上がらせる。爬虫類を思わせる、スマートな下半身と、それぞれ三本の太く鋭利な爪を持った左右の豪腕を支える、マッシブな上半身。恐竜（下半身）とゴリラ（上半身）を合体させたような一つ眼の怪獣が今、二本足で立ち、走太の視界を覆い尽くす。

「ゲガギグゴゴゴゴ！」

異形生物は、赤いロボットを見向きもしない。その赤い一つ眼に走太の姿を映す。

「う……あ……」

走太は当然、逃げようと思った。だが、足が震えて動かない。腰から力が抜け、その場に尻餅をついてしまう。

怪獣が三本の爪の先を一点に合わせ、右腕を大きく振り上げる。どうやら、自分に狙いを定めたらしい。

『駄目！ 逃げてえ——つつつ！』

赤いロボットの中にいる女の子が、声を張り上げて叫んだ。

だが、謎の宇宙人語を喋る怪獣に、それが通じるはずもない。

怪獣は走太に向けて、鋭い爪を真っ直ぐに放つ。

（あつ、絶対に死んだわコレ）

走太はふと思う。

（さよなら、俺の平凡な人生。こんなことなら、勇気を振り絞って、あの娘に謝っておけば良かった）

——ドグワシャッツッ！

そうして、走太の視界は真っ暗な闇に包まれた。

第一章 幼馴染みを見捨てた男

小林走太は昔、一人の少女を見捨てた。

どのくらい昔かというと、走太がまだ六歳、小学一年生だった頃。当時、走太には仲の良い幼馴染みの女の子がいた。

名前を紅坂麗央奈という。家が隣同士で、通う幼稚園も一緒。気付けば、自然と仲良くなっていた。

麗央奈は人見知りが激しく、気弱な女の子だった。加えて、特徴的な外見のせいか、幼稚園でもあまり友達が出来ず、走太とばかり遊んでいた。

「あの……あのね」

「ん？ どうしたんだ、レオナ」

「ワタシね……大きくなったら、ソウちゃんとケツコンしたい！」

「な、なんだってえええ——っ!？」

たまたま身近な異性だったからなのか、そんなベタな展開を持ち出すくらい、麗央奈は走太に懐いていた。

「……ダメ？」

「お、おちつけレオナ！ おれたちまだ6さいだぞ!？」

「す、スキってキモチがあればトシはかんけいないって、ドラマで言ってた!」

「レオナ、ソレちがう！ トシのはなれた男に言うセリフだからソレ!」

「と、とにかく、ワタシはソウちゃんのことが好きなの！ ソウちゃんはワタシのこと……キライ？」

上目遣いで、瞳をうるうるさせながら、走太の顔色を伺う麗央奈。

「う……お、オレはだな……その……お前のこと……す……」

「す?」

「す、すす……す……すっごくヒキョウだお前はあああつつつ!」
「うわああああああ——んつつつ!」

「ええ——っ!？」

走太は泣きながら、その場から逃げ出したのだった。

走太が逃げ出したのは、単純ながらも難しい男心故だった。

素直な気持ちを言えない歳頃だったのである。

しかし、男として、逃げてはいけない場面もあった。

ある日、走太が学校から帰ろうとした時のことだ。

いつもは「ソウちゃん、いっしょにかえろっ」と言ってくるはずの麗央奈の姿が、教室に無い。

走太は何となく、学校の敷地内を探し回った。

校舎の中にはいない。靴を履いて、外に出て、体育館の裏に向かったところで、麗央奈を見つけた。

だが、そこにいたのは彼女一人だけではなかった。

(あいつらは……!)

同じクラスのイジメっ子共。そいつらが、麗央奈を体育館裏の壁際まで追いやっていた。

気弱な麗央奈は小さな身体を更に縮ませて、涙目になっている。

「おい、赤ガミ女! だまってないで、なんか言えよ!」

「お前さ、きもちわるいんだよ、いつもいつも! カミ赤いし、ぜんぜんしゃべらないし! このガイコク人! ムカツクんだよ!」

「っ! か、だっせー! ナミダ目になってやんの!」

「ははは! しょせん女だからな!」

走太は何故かそれを冷静に見ていた。本当なら怒ってもいいはずなのに、戸惑っている自分がいる。

助けに行かなくては。そう思うのに、足が動かない。

「っ! か、あいつ、小林だっけ? お前が一人だけしゃべるやつ。

あいつもへんなやつだよな、こんなきもちわるい女なんかとなかよくおしゃべりしちゃってさ」

「あいつ、ビビリだからな。オレらともぜんぜん目を合わそうとしないし」

「そうそう。オレ、しってる。ああいうやつのことを『ヘタレ』っていうんだ。マジだっせーよな！」

「ははは！　こんどはそいつをイジめるか！」

「そうだな、あいつもムカツクしな……ッ！？」

麗央奈が、ぱんっ！　といじめっ子のリーダー格である奴の顔を平手打ちにした。彼女は震える声で言う。

「ソウちゃんの……わるぐちを言わないで……！」

「てめえ！　よくもやったな！」

「あぐっ！？」

激昂したいじめっ子が、興奮気味に麗央奈を殴り付ける。その場で尻餅をつく麗央奈。

走太は腹の底が今度こそ熱くなった。すぐにでも助けに行くべきだ。

だが、どうしても足が動かない。走太はその理由を知っていた。

（くそっ、くそくそくそ……！）

怖いのだ。どうしようもなく、いじめっ子達の存在が怖かった。行ってどうするのか。相手の数は多い。麗央奈は助けられるかもしれない。だけど、その後、自分はどうなるのか。目の前の麗央奈みたいに殴られるのではないか。果たして一発で済むのか。絶対に済まない。何発も殴られる。

そう思ったら、一歩も前に進めなかった。麗央奈が自分の為に、勇気を振り絞って平手打ちまで放ったというのに、自分は「やめろ！」と叫ぶことすらも出来ない。

それどころか、助けるべき麗央奈に、怒りすら湧いて来る。

（そもそも、ひとみしりなレオナがわるいんじゃないか。いじめっ子をたたくユウキがあるなら、そのユウキをつかって、ガイケンなんかきにしないで、トモダチのひとりやふたり、つくればよかったんだ。オレはべつになにもわるくない！　なんでオレが……！　な

んでオレなんだよ……！）

足が一步、後ろに退いた。

（そうだよ、オレはなにもわるくない……！ レオナがわるいんだ、
ぜんぶ……！）

もう一步、走太は下がる。

「ムカツクんだよ、お前！ きもちわるいカミのイロしやがって！」
「っ！」

麗央奈の髪を引っ張るいじめっ子。

その時、麗央奈が走太の存在に気付いた。

「ソウちゃん……！ たすけて……！」

麗央奈が瞳に涙を浮かべ、走太に助けを求め、必死に手を伸ばす。
けれど、走太は目を背け、その場から逃げ出した。走太は恐怖に
勝てなかった。

涙で視界を滲ませながら、走太は逃げ続けた。学校の校門を潜つ
て、全力で逃げ帰った。

（さいていだ、オレは……！）

大切な友達を、大切な幼馴染みを、大切な女の子を、自分は見捨
てた。「助けて」と彼女は言ったのに。

恐怖に勝てなかったのは嘘だ。恐怖で勝手に身体が動いたわけじ
やない。

走太は他でもない自分の意思で、目の前の女の子を見捨てて、逃
げ出したのだ。

何故なら、彼女が「助けて」と言った時、このままでは走太はい
じめっ子達に気付かれると思ってしまったから。少しも彼女を助け
る気が起きなかった。

湧いて来たのは、ただただ『逃げたい』という気持ちだけだった。
「ごめん……！ レオナ……ごめん……！」

走太は泣きながら逃げ続けた。

そして、この時多分、小林走太の人生は分岐した。

翌日、走太が一人で学校に行こうと家を出ると、頬っぺたに大きな湿布を貼った麗央奈が待っていた。

余りにもその湿布が痛々しくて、走太は胸が苦しくなって、目を背けた。

麗央奈が「ソウちゃん」と口を開く。頬が貼れて、上手く喋れないのか、口に物を詰めたかのような声だった。

それだけで、走太は胸を抉られるかのような気分になる。

「あのね……そのね……きのうのことなんだけど——」

「レオナ」

何で助けってくれなかったの、と言われでもしたら、もう堪えられない。

走太は自分の心を守る為に、大声で言葉を遮った。

「ソウ……ちゃん？」

「もうオレにかかわるな」

「え？」

「オレにかかわらないでくれ……！」

「な、なんで……！？ ソウちゃん！」

「オレは——」

両手の拳をぐっと握り締めて、言った。

「お前をみすてたんだ！」

走太は麗央奈の顔を見ずに、彼女の脇を抜けて、走り出した。

後ろで麗央奈の泣く声が聞こえた。走太は後ろを見ずに走った。胸には後悔だけが残った。もう二度と合わせる顔など無かった。それ以来、麗央奈とは一度として口を利いていない。

あつ、走馬灯って本当にあるんだ、と走太は思った。

怪獣の三本の爪が自分を動かぬ肉塊に変えんと襲い来る中、走太は確かに昔のことを思い出していた。

（やっぱり、こういう時には、麗央奈のことを思い出すんだな）それは間違いなく、彼女を見捨てたことを、深く後悔しているからだろう。

いや、どんなに平気を装っても、あれから十一年、自分はいつだって後悔し続けている。いわゆるトラウマってやつだ。

だからこそ、こうして死ぬ間際になって思うのだ。

こんなことならせめて、勇気を振り絞って、彼女に一言謝って置けば良かったと。

——ドグワシャッツ！

歪な音がして、走太の視界が真っ暗闇に包まれる。

自分は間違いなく死んだ。あの巨大な爪に掛ければ、自分など即死だろう。だから、こうして痛みも感じない。

しかし、走太は気付く。その暗闇が、美しい漆黒の色であることに。

走馬灯の名残なのか、スローモーションに時が流れる世界の中で、走太は顔を上げる。

世界の一部が割れていた。そう言う以外に、走太には表現が思い浮かばない。

三次元の世界の中で、二次元的に世界を叩き割り、割れた二次元の窓ガラスから三次元の世界に、漆黒のソレは足を踏み入れて来た。赤いロボットや、怪獣に負けないくらい巨大な、漆黒の人型ロボット。赤いロボットとは正反対で、流線型でスマートなボディ。長く細い足に、五本の指が付いた鋭いナイフを思わせる腕。異質で特徴的なのは、脊髄の出っ張りを思わせる背中の装甲がすらっと伸びた、黒く長い尻尾。それを空中に生き活きと振るわせながら——漆黒のロボットは、怪獣の顔面に力強く握り締めた拳を叩き込ん

でいたのだ。

すなわち、「ドグワシャ」という歪な音は、走太が怪獣の爪に潰された音では無い。走太は漆黒のロボットの介入により、命を救われたのである。

怪獣が奇声を上げながら、横っ飛びに巨体を宙に舞わせ、すぐ近くのビルに突っ込む。

漆黒のロボットが、生きているかのように肩を下ろし、尻尾をふりふりと揺らす。その背後で、漆黒のロボットが現れる際に出現した世界の割れ目が、映像を逆再生するかのように修復され、やがて罅一つ見えなくなつて、消える。

漆黒のロボットが、走太を見下ろして来た。銀色のマスクの上に、黄色いアイカメラが二つ輝いている。

走太はごくりと唾を飲み込む。そして、思った。

目の前の巨大人型ロボットは自分を助けてくれた。ボディーを彩る漆黒のカラーは素直に美しいと思う。

だが――

「敵っぽい……！」

何と言つか、雰囲気だ。ロボットアニメで、主人公のライバルが乗ってそう。

とはいえ、走太はその場を動けない。腰が抜けて、立てないのだ。だらだらと額から冷や汗が流れる。

（人型ロボットに死んだフリって通じるのだろうか）

余裕があるのか無いのか、本気でそんなことを考えている自分がいる。

その時だった。

メキメキッという音がして、なんと先程怪獣が突っ込んだビルが傾き始めたではないか。

「げっ！？」

しかも傾いているのは、走太がいる方向。このままでは潰されてしまう。

「やばいやばいやばい！ 力入れ俺の腰！ 尻餅なんかついてる場合じゃないよ！？」

が、そう簡単には行かないのが、世の中の常。腰には力が入らず、ビルはどんどんとその傾きを増して行く。

「うおおおお、今度こそ俺オワタ——ッ！？」

ついには上半分がポッキリと折れるビル。巨大な瓦礫が走太を押し潰さんと落ちて来る。

が、同時に漆黒のロボットが動いた。

走太を跨ぐ様に立ち、両手を広げて、上に掲げる。そうして、降って来た何十トンあるのか知れないその瓦礫を、背中も使って、受け止めた。

「なっ……！！」

漆黒のロボットが踏み締めた大通りのコンクリートが、瓦礫の重量も加わって、砕け、辺りに亀裂を走らせる。

ロボットは腰を捻ると、瓦礫を思いっきり遠くへ放り投げた。瓦礫が別のビルに当たって、双方共に砕け、粉塵を空高く巻き上げながら崩れ落ちる。

走太はその光景を眺めた後で、恐る恐る漆黒のロボットを見上げた。

「俺を……助けてくれたのか？」

すると、漆黒のロボットに言葉が伝わったのか、走太に顔を向け、黄色いアイカメラをキラーンと輝かせると、黒い尻尾を振りながら、ぐつとサムズアップをして見せた。

赤いロボットと同じく、誰かが中に乗っているのかもしれない。

「ゲゲガゴギゴギ！」

背筋に寒気を走らせる宇宙人語が聞こえ、走太は残り下半分だけとなったビルの方を向く。

瓦礫を押し退け、恐竜＋ゴリラの巨体が再び姿を見せる。

「もう勘弁してくれ……」

こちらら依然腰が抜けたままである。我ながら、どんだけヘタレ

なのか。いい加減死ぬんじゃないだろうか。

頭上の漆黒のロボットがボクサーのごとく構える。どうやら本当に俺を守ってくれるつもりらしい。

しかし、俺を守ってくれたのは、もう一体のロボットの方だった。

『これ以上、好きにさせるかあ——つつつ！』

背中と脚部からブーストの炎を生やし、スピード全開で怪獣に突っ込む赤色の重火力型ロボット。

タツクルをかまし、怪獣を更に横のビルへ突っ込ませる。ブーストの勢いはそのまま、幾つものビルを貫通し、怪獣を遠くへ跳ね飛ばす。

赤いロボットはそこから上昇し、空中で、腹部装甲を開放する。出現した銃口に熱量が収束、真っ赤に燃える巨大なエネルギー球体を形成する。

『今度こそ決める！ クリムゾンノヴァアアアッ！』

声色の高い咆哮が街中に響き、圧縮されていたエネルギー球体が開放され、深紅の柱となって、地上で体勢を立て直そうとしている怪獣に向けて突き刺さる。

余りに太い深紅の柱は、怪獣の身体を覆い尽くし、焼き尽くす。

「グガアアアアア——ツツツ！」

怪獣は嬌声を上げ、爆発。黒煙を上げ、その身を灰と化して散らした。

走太は何気なく、頭上にそびえる存在に視線を向ける。

漆黒のロボットと目が合った。

ソレは黄色いアイカメラを静かに輝かせ、尻尾を優雅に振っていた。

「あれ？」

ただそれは、一瞬の出来事で、走太が気付くと、漆黒のロボット姿は視界から消え失せていた。

それだけではない。顔を下ろし、辺りを見回すと、街の喧騒が戻って来ている。

先程破壊されたはずのビルが、何事も無かったかのように元通りになっている。道路のコンクリートに走っていた亀裂が無い。

人っ子一人いなかったはずの交差点には、学生や車が溢れ、皆こちらに視線を向けていた。

再び頭上を見上げると、雲がまばらに浮かんた、いつもの青い空。走太は試しに、自分の頬を思いつきり引つ張ってみた。

「ひゅめひゃなひ（夢じゃない）」

ならば、つい先程までの出来事は夢だったのか。そういえば、あちらでは頬を引つ張ってみるのを忘れていた。

「まさか白昼夢ってやつ……？」

首を傾げていると、すぐ近くで、耳をつんざくような車のクラクションが鳴った。

「おい、その学生！ なに大通りのど真ん中で座り込んでんだ！？ 通行の邪魔だろ！ つーか、いつからそこに居た！？」

車の窓から顔を出し、驚きと怒りが入り混じった顔をする見知らぬ中年男性。

状況を簡単に説明すると、走太は白昼夢の中で座り込んでいた場所にそのまま居るわけで。

つまり、交差点近く、大通りのど真ん中で、通行中の車を塞ぐ形になってしまっていた。

そりゃあ、通行人の方々もこちらに視線を向けるわけである。

「えつとですね……これには色々と事情がありまして……」

「そうだろうさ！ 事情が無けりゃあ、そんなところに座ったりしないだろうしね！？ 分かったよ！ おじさん、もう怒ったりしないから、とりあえずそこを退いてくれない？」

「ええ、俺も退きたいのは山々なんですが……」

「なんだよ！？」

「起き上がるの、手伝って貰えませんか？」

走太は白昼夢内同様、腰が抜けていた。

昨日はその後も酷い目に合った。

腰が抜けていて行動不能、加えて学生服でこの学校かバレてしまったことから、警察にパクられ、事情聴取を受けた。

とはいえ、白昼夢の話をするわけにも行かない。そんなことをすれば即刻、病院の精神科送りである。

だから、走太は「好きだった女の子に振られて、死にたい気分だったんです。でも、今は冷静になって、生きてて良かったと思っています」という言い訳で通した。担当の若い男性警察官に、過去の恋愛失敗談を語られ、「一度や二度の失敗で挫けてはいけない」という説教を受けた。走太は終始、真面目っぽく「はい!」「なるほど!」と頷きながらその話を聞いていたが、内心は白昼夢のことで凄く疲れていた。とにかく、早く家に帰って眠りたかった。

男性警察官による、金八先生張りの熱弁を聞き終えたところで、走太の母親が身柄を引き取りに来た。母が口にした第一声は、「いつか何かをやらかすと思っていた」だった。実に酷い母親である。自宅に着くと、母は「生きる、このクソガキ!」とだけ言って、久方ぶりの強烈な拳骨をお見舞いしてくれた。それが原因で死ぬんじゃないかと思うくらいに、痛かった。

で、晩飯を食ってから、泥のように眠り、本日に至る。

「しかし、馬鹿だ馬鹿だとは常々思ってたけど、大通りのど真ん中で座り込む程馬鹿だとは思ってなかったよ、俺も」

と言うのは、一年生の時から同じクラスの、崎原宮治。ツンツンと尖った短髪に、黒縁の丸眼鏡を掛けた、妙にルックスの良い男。走太的には、微塵も気が合うとは思っていないのだが、高校に入学してから誰と話した回数が一番多いかと問われると、わざわざ集計するまでも無く、コイツがトップに君臨するだろう。

宮治曰く、「俺の変人レーダーがお前を感知した」のだそうだ。誰が変人だ、誰が。

「うつせー、馬鹿は馬鹿なりに悩むことがあんの」

走太が教室の机で頬杖を置きながら言うと、昼休みになって空いた前の席に腰掛けている宮治は、手をひらひらとさせる。

「悩んでも馬鹿な結論しか出て来ないぞ、馬鹿なんだから」

「うん。昨日、熱血警察官に人生というものをご教授頂いて、嫌という程学んだ」

もう二度と警察にはパクられまい。

「つーか、お前が悩むことって何？ やっぱりあれか？ 麗央奈ちゃん？」

声を潜めながら言う宮治。視線を走太達がいる廊下側の席から、窓際の席に移す。

そこには、燃えるような赤毛を頭の後ろで束ねたポニーテールの、一人の少女が座っている。クラスメイトの女子達と楽しそうに談笑する彼女は、紛れも無く、走太のトラウマとなっている幼馴染みと同一人物。

だが、その内面は、小学生の頃に比べて同一人物とは思えない程に様変わりしていた。

高校生になった紅坂麗央奈は、男らしいと言ってもいいくらい、明るく、元気な女の子に成長した。友達の数が多いし、学業優秀、スポーツ万能。特に運動面においては、決まった部活には所属していないものの、その高い身体能力を見込んでの助っ人依頼が絶えない。

スポーツをしている時の麗央奈は、それはもう凜として美しく、格好良いのだとかで、いつか聞いた噂によると、ファンクラブのよなものがあって、麗央奈が助っ人として何かのスポーツ大会に呼ばれる度に、総動員で応援に現れるらしい。

しかし、人気の秘訣はやはり、その外見にあるのだろう。イギリス人だった祖母から受け継ぎ、ハーフの母親以上に色濃く出た、鮮やかな赤毛。日本人らしくも中性的な、整った顔立ち。百七十センチに届こうかという高い身長に、すらりと伸びた長い手足。

いずれにしても、紅坂麗央奈はもはや走太とは住む世界が違う、高嶺の花的存在となったわけである。

走太はモデル体型の幼馴染みを、横目で眺めつつ、溜め息を吐く。「まあ、あいつのことは悩んで今更どうなるわけでもないし。今回は別件だよ」

宮治は「やれやれ」と首を横に振る。

「走太がヘタレなのは最初からだから、俺もどうこうしろとは言わないよ」

「つーか宮治。俺は一度として、お前にアイツとの事情を語ったことはないのに、全部知ってるような素振りなのが、凄くムカツクンだけ」

「素振りじゃなくて、全部知ってるんだよ、俺は。何せこう見えてこの学園一の情報屋だからな！」

えっへんと胸を張る宮治。

本当か嘘かは知らないし、興味も無いが、この崎原宮治という男は、この学園内の事情に関してはエキスパートであるらしい。一年も顔を合わせている限りでは、確かに色々なことを知っている。

「走太くん。何なら、君の心に抱える事情ってやつをこの場で話して進ぜようか？」

「やめい。人のトラウマをわざわざ呼び起こすじゃない」

「そうか、残念だ。俺が学園一の情報屋であることを走太に知らしめる良いチャンスだと思ったのに」

「知らなくて結構」

「しかしあれだ。そこまで酷いトラウマなのに、麗央奈ちゃんと同じ高校に進学するお前も凄いよな」

「好きで同じ高校に入ったわけじゃねえ。……つーか、この話、前にもしなかったっけ？」

走太は一年とちょっと前、中学三年生の時、麗央奈と同じ高校に入るのを避けるべく意識した上で、受験をした。

麗央奈は地元にある、レベルの高い県立の進学校を第一志望で受

験すると聞いていたから、走太はそこそなレベルの進学校で、地元の隣街にある、この『私立御門学園』を受験したのだ。

が、結果はどうか。麗央奈はまさかの同じ高校に進学した。理由も事情も全く分らない。知れるものなら、走太も知りたい。

しかし、小学校の一件以来、家が隣であるにも関わらず、まともな会話など一度として交わしたことが無いのに、「やあ麗央奈！なんで御門学園に進学したんだい？」などと訊けるはずが無い。

おまけに、同じ高校どころか、二年連続で同じクラス。小学校から数えて、通算十一年同じクラスという快挙である。腐れ縁というものとは間違いなく存在していると思う。

「そんなこと言っちゃって。走太だって心の底では嬉しいんじゃないの？」

「嬉しい？」

「麗央奈ちゃんがさ、同じ高校に進学したこと」

「……」

そういう気持ちが無いと言ったら嘘になる。

「俺はどうこうしろとは言わないけどさ。ただ、一つだけ忠告しておく、麗央奈ちゃんを狙っている男子は腐る程いる。事実、これまで数え切れぬ戦士達が麗央奈姫に交際を申し出て、無残に敗北を繰り返して来た。だが、それもいつまで続くかどうか」

「何が言いたい」

「別に？　ただ、いつか後悔しても知らないぞって話」

「あのな……」

後ろ頭を掻く走太。

「——俺が今更、どの面下げてアイツにそんなことを言えってんだ」
謝るところか、一言の言葉を交わす勇氣さえも無いというのに。
と、そこで宮治との会話が途切れる。

「宮治？」

見れば、彼は何やら驚いた表情を浮かべている。普段ポーカーフエイスを浮かべていることが多い宮治にしては、珍しい表情だ。

すぐに走太は、彼の視線が自分の背後に向けられていることに気付く。

走太がその視線の先を追う前に、背後から声を掛けられた。

「走太」

「え？」

振り返って、

——どくん。

走太はその鼓動を最後にして、自分の心臓が止まってしまうかと思っただ。

赤毛の幼馴染み、紅坂麗央奈がそこに立っていた。

彼女と目が合う。

（え？ 何？ 麗央奈に名前呼ばれた俺？）

思わず耳を疑ってしまう。何かの間違いではないかと疑う。

だって、麗央奈が自分に話し掛けて来たことは、小学校以来一度だっただけだし、ないのだから。

けれど、彼女の瞳には今、確かに自分の姿が映っている。

走太の思考が混乱を極めて行く中、麗央奈は言った。

「付き合っただ」

走太は目を瞬かせる。

数秒の間、顎に手を添えて色々考えて、やがて首を傾げた。

「何これ？ 白昼夢？」

「え？」

それが、小学校以来久方ぶりに走太と麗央奈が交わした、言葉のやり取りであった。

走太は激しく動揺していた。

場所は私立御門学園校舎の屋上。昼休みとあって、どこから生徒達の談笑の声が聞こえて来ているが、屋上に人影はない。

居るのは、走太と、紅坂麗央奈の二人だけである。

背中を向けた麗央奈の赤い髪が、五月の風に揺れる。空の青とのコントラストが綺麗である。それはそれとして。

（なんでこんなことに？　なんで麗央奈が俺に話し掛けて来たんだ？　俺何かしたっけ？）

走太の頭の中では、ぐるぐると思考が回転し続けている。

少なくとも、ここ最近に麗央奈との接点は無いはず。分かん。

何だ？

「走太」

「は、はいい！」

名前を呼ばれて、電気が走ったかのように背筋が伸びた。

麗央奈が走太の方に向き直る。

真正面から見られて、走太はドキツとしてしまう。中学、高校と、麗央奈をここまで間近で見た機会は無かった。なんとまあ、整った顔立ちだろう。男子から人気があるのも頷ける。つか、頭小さっ！　腰の位置高っ！

走太は麗央奈に、じーっと顔を見つめられる。

やがて、彼女は口を開いた。

「走太、昨日、巨大ロボットと怪物を見なかった？」

「え！？　何でそれを……！」

「やっぱり」

彼女は左手を顔の高さくらいまで上げて、指パッチンのポーズを取る。

「麗央奈？」

「走太に会って、そのことについて話をしたいっていう人がいるの」「ちよつと待て！　なんで麗央奈がロボットと怪獣のことを知って――」

走太が言い切る前に、麗央奈は、パチンツと軽快に指を弾く。

その瞬間、走太は今度こそはつきりと目視した。
空の色が、一瞬で青から灰色に変化するのを。

「なっ……!!」

先程まで聞こえていた生徒達の談笑はすっぱりと消え、頭上で輝きを放っていた太陽も消え、雲一つ無く澄んでいるのに、どんよりとした灰色の空が広がっている世界。

それは昨日、赤い重火力型ロボットと異形生物が、世界の終末チツクなバトルを繰り広げていたあの世界に他ならない。

「ま……まさかのデイドリームアゲイン……!!」

白昼夢の再来である。

「その『デイドリーム』って表現は面白いね」

麗央奈の声では無かった。見知らぬ男性の声。

赤毛の幼馴染みは俺の斜め前に立ち、声の主の方へ視線を向けている。

灰色の空をバックにして、屋上の手摺りに一人の男が持たれかかっていた。青色の空が広がる現実世界では、誰も居なかったはずのその位置に。

やたら目の細い男は、何とも爽やかな微笑みを浮かべて言った。

「やあ、こんにちは。小林走太くん、でいいんだよね？」

「え？ あ、ああ、はい」

走太はこくこくと頷く。

細目の男は御門学園の制服を着ていた。ということとは、この学園の生徒なのだろうか。明るく長めの髪を白いヘアバンドで束ねて、右肩に流しており、身長は百八十五センチくらいある。走太の身長が百七十センチジャストであるから、相当に高い。その細い目を見開くと、実は相当なビジュアル系系ではなからうか、と走太は思った。

「うん、いきなりだと戸惑っちゃうよね。僕から自己紹介させて頂くよ。僕の名前は、神谷源平。この御門学園の三年生で、ロボット部という部活の部長をやってます。どうぞよろしくね、小林くん」

どうやら先輩であつたらしい。源平は走太の前まで来ると、にこっと細い目を更に細くしながら、握手を求めて来る。

特に断る理由も無いので、流されるまま、走太は源平と握手を交わす。

「ど、どうも。それで、あの……」

「うん。小林くんは今、僕や紅坂に聞きたいことが山程あるはずだよね。例えば、この灰色の空が広がる世界のこととか。そうだねえ、まずは何から話したものか……」

顎を擦りながら、首を捻る源平。

しばらくしてから、源平は右手の人差し指を立てて、言った。

「うん、決めた！ あれだ。君が昨日目撃した、巨大な怪物についてから話そう」

「は？ はあ」

「あれはね、僕達は『次元獣』と呼んでいる」

「じ、じげんじゅー？」

「二次元とか、三次元とかの次元に、ケモノって書いて『次元獣』。小林くんはひよつとしたら、昨日のことは自分の頭がおかしくなつて見た、幻覚か何かと思っているかもしれないけれど、あの怪物も、それと戦っていたロボットも、全て現実だつてことをまず、認識して欲しい。その上で『次元獣』のことを話すけど、あれは――」

そこで源平の細い目が開かれる。

「僕達人類の敵だ」

この人、目を開いたらやっぱりイケメンである。

それはともかくとして。

「えっ、敵って？ 冗談とかじゃ……なくて？」

「至つて大真面目だよ。『次元獣』っていうのは、別次元の世界からやって来る、高位情報生命体。その行動目的は、自分の存在より低い位置にある情報を、自分の身体の一部として取り入れることにある……っていうのが、今まで世界を守つて来た先輩達の談。つまりは、世界を喰う化け物つてことさ。君も目の前で見たかもしれないな

いけど、あれを放って置けば、大変なことになる」

言っている意味は全然理解出来ないが、大変なことになるというのはよく分かった。

なにせ、走太は昨日、目の前であの怪物を見た。街が破壊される光景も。

思い返して、走太は背筋が寒くなる。

「えっと……神谷先輩」

「なんだい、小林くん」

「だ、だったら、この灰色の空が広がっている世界は、何なんですか？ 俺が普段居る世界とは……違うんですか？」

「そうだね。同じコインの表と裏って感じかな。これも僕達が勝手に付けた名称だけど、『中間世界』って呼んでる。姿形はまるつきり現実世界と一緒に。だけど、この世界には、僕達以外に生命体は存在していない。……ほら、さっき、次元獣は別次元の世界からやって来るって話をしただろう？」

「は、はい」

「この世界は、僕達の住む現実世界と、次元獣がやって来る別次元の世界を繋ぐ、狭間の世界なのさ。だから、僕達は『中間世界』っていう名前を付けた」

「中間世界……」

「次元獣は、僕達が住む現実世界に向かう際に、必ずこの世界を通過しなければならぬ。言い換えれば、この世界で次元獣の侵攻を阻止することが出来れば、現実世界に影響は出ない。じゃあ、君が昨日見た二体のロボットは果たして何だったのか」

「その口ぶりからすると、まさか、次元獣と戦う為の兵器……ってことですか？」

「正解。ここまで話せば、少しは概要が掴めて来たんじゃないかな」
「つまり、昨日俺が遭遇した非現実的な出来事は、実際にあったことで、次元と次元の狭間に存在する『中間世界』で、現実世界に侵攻しようとする次元獣と、それを阻止すべく動いていたロボットと

の戦いに巻き込まれた……ってことですか？ 冗談でしょ？ 冗談ですよね？」

走太は顔の筋肉をひくつかせながら問うが、源平は再び目を細めて、爽やかな笑顔を浮かべる。

「丁寧な説明をありがとう。でも残念ながら、全部本当のことなんだよ、小林くん」

「だってだって、あり得ないでしょ！ どこのロボットアニメの設定ですか！？ 巨大人型兵器とか、実際にあったらロボットオタクが泣いて喜びますよ！」

「否定したいのは分かるよ。普通の人の反応だろうしね、それが。でも、小林くんは実際に今、その『中間世界』を目の前にしているだろう？」

「うぐっ……！」

そんなことは分かっている。太陽もないのに一定の光量を保ち、雲一つ無く、どんよりとした灰色の空が広がっている世界に、走太は立っている。否定したいのに出来ない状況が、今日の前にある。

「僕達としては、小林くんには是非信じて貰いたいところだね。その為にこうして、紅坂に頼んで、連れて来て貰ったわけだし。せつかどうか、もう一つの証拠も見せようか」

「ま、まさか……」

「うん。そのロボットオタクが泣いて喜ぶ実物を」

源平は麗央奈に「頼めるかな、紅坂」と合図を送る。

麗央奈は頷き、走太は一瞥した後、左手を天に掲げ、叫ぶ。

「レッドラスツ！」

直後、学園の校庭側にある空間が唸りを上げ、ガラスを砕くように大きく割れた。

昨日、黒いロボットが現れた時に見た、三次元の世界が平面的に割れる、アレだ。

空間の割れ目から出て来たのは巨大な二本の腕。空間の割れ目の両端を掴み、更に砕きながら、腕から肩、続いて足と、その全貌を

露にしてゆく。

やがて、走太達の前に現れたのは、全身に分厚いアーマーを装備し、両肩にキャノン砲を背負った、全身レッドカラーの重火力型ロボット。全長およそ二十メートル。

間違いない。走太が昨日見た、赤い巨大人型ロボットである。

走太はそこでふと思い出す。昨日、赤いロボットから聞こえた声を。

「麗央奈……お前……」

幼馴染みの少女は、走太と目を合わせる。

黒く、綺麗な瞳。表情はどことなく真剣で、どことなく走太の反応を窺っているようにも見える。

とはいえ、走太は何と答えたらいいか分からない。

「紹介するよ」

源平は手の平で、麗央奈と赤いロボットの存在を示しながら、

「次元獣と戦う、巨大人型兵器『ゲートキーパー』の『レッドラス』と、そのパイロット、『キーパーマスター』の『紅坂麗央奈』。昨日、君が見ている中で、次元獣と戦っていたのは、彼女だよ」

「麗央奈が……巨大ロボットのパイロット……!？」

走太が視線をやると、麗央奈はこくりと頷く。

一方の源平は、更に説明を続ける。

「ゲートキーパーは、その名の通り、『門番』という意味。中間世界から現実世界へと続く、『次元の門』を守っている。しかし、ゲートキーパーがその力を発揮するには、選ばれた人間『キーパーマスター』が、パイロットとして中に乗り込まなければならない。そして――」

源平が走太を見た。見開いた、その双眸で。

「――キーパーマスターだけが、この中間世界の中に入ることが出来る」

「……へ？」

走太はあんぐりと口を開けた。

源平は、にこつと笑顔を作る。

「違う言い方をしようか。僕も紅坂と同じ、キーパーマスターなんだ。もちろん、ゲートキーパーをこの場に呼び寄せることも出来る」
「な、なるほど！」

走太はポンと手を叩き、

「もう一体の黒いロボットは、神谷先輩が操っていたわけですね！
？ いやー、あの時は命を救って頂き、どうもありがとうございます！
した！ 今度どこかで飯でも奢らせて下さい！ そうだ先輩、そろそろお昼休みも終わる頃でしょうし、俺は現実世界に戻ってもいいですかね！？」

「うん、いいよ。その代わり、一つだけ些細なお願いを聞いてくれないかな？」

「何ですか！？」

「この場で一言、大声で叫んで欲しいんだ。『シラシオン』って」
「謹んで遠慮させて頂きますつつつ！」

走太は首がもげそうなくらい、ぶんぶんと激しく横に振った。

「えー、なんでー？」

「実は俺、今日、喉を痛めてるんです！ 大声でなんて叫べません！」

「いいじゃない、そこをなんとか頼むよ小林くん。たった五文字じゃないか、シラシオンって」

「先輩、改めて聞くと、結構良い声してますね！ アニメの声優とかいけるんじゃないですか！？ 絶対人気出ますよ、ロボットアニメの主人公役とかで！」

「え？ マジで？ そう思う？」

「思います思います！ 絶対行けますって！ 先輩が叫んだ方が、俺なんかよりも数百倍格好良いですよ！」

「マジでかー。小林くんに言われると、何だか本当に声優になれそうな気がして来たよ。あつ、ちなみに僕のゲートキーパーは、『ブラックティラー』って名前なんだけど。格好良いと思わない？」

響きが良いよね、ブラックティラー」

「はい！ 良いっすねブラックティラー！　じゃあもう、空に向かって腹の底から叫んじゃって下さいよ！　ブラックティラー——ッ！　って！」

「うん、とっても素敵な大声をありがとう、小林くん」

何故かそこで、とても爽やかな笑顔を浮かべる源平。

「へ？」

走太の背後で、ガラスの破砕音が響き、振り返る。

校庭とは正反対、校舎裏の方向。その空間が割れ、中から巨大な顔が飛び出ていた。黒いヘルメットに、銀色のマスク、黄色く輝く二つのアイカメラ。あれ、おかしいな。どこかで見たことあるぞコレ。

ズバキヤアッ！　と甲高い音と共に、一気に割れ目を広げ、ソレは全身を外に出す。

流れるような漆黒のボディー。特徴的な長い尻尾。忘れるはずがない。

「……ああ、ブラック（黒）とテイル（尻尾）で、『ブラックティラー』なのね」

果たして、昨日走太の命を救った漆黒のゲートキーパーは、彼を見ながら、嬉しそうにぶんぶん尻尾を振っていたのだった。

源平はにこにこ笑顔を浮かべつつ、魂が抜けたようにその場に立ち尽くす走太の肩に手を置いて、言った。

「そんなわけで、ようこそ新たなキーパーマスターくん」

「……うそーん」

「ちなみに、『シラシオン』は僕のゲートキーパーの名前なんだ（笑）」

「鬼や！　この人、鬼や！」

細目だけに、この神谷源平という男は、とんでもない狐であるらしかった。

その後、走太は中間世界から解放されて、午後の授業を無事に受けることが出来たのだが、授業の内容なんて、さっぱり頭に入って来なかった。

崎原宮治が、HR前に「で？ どうだったのよ、昼休みは。麗央奈ちゃんとか進展はあったのかい？ うひひ」とさも楽しげに聞いて来やがったので、「違う方面で進展があった。今すぐ大通りのど真ん中に行つて、座り込みたい気分だよ」と答えた。

俺が余程思い詰めているように見えたのか、宮治は目を丸くして、「せ、先生えええ！ 小林くんがヤバイです！ 今すぐ医者を！ ここに医者をおおお！」

と騒ぎ立てた。

その結果、病院の精神科送りは逃れたものの、HR後に職員室に呼ばれ、数時間に及ぶ説教を受けた。

「どうしてだ小林！ なんでまた、大通りのど真ん中で座り込む気になったんだお前は！？」

「はあ……その……ちよつと、色恋沙汰で悩んでまして……」

次元獣やら中間世界やらゲートキーパーやらの話をすれば、即刻病院送りなので、走太はまたしても恋愛関係の悩みにすり替えて誤魔化すしか方法が思い浮かばない。

「分かる！ 分かるぞ小林！ 先生も昔はだな——」

説教というより、先生が過去に経験した恋愛の話がほとんどだった。まさかのデジャヴである。

（それはもう、ええつちゅうねん！）

内心ではうんざりしていたが、相手が先生なので、走太は真面目っぽい面持ちで話を聞き続けるしかなかった。

職員室の時計の針が午後の五時を指し示したところで、先生は席を立ち、「おっと、もうこんな時間か。いいか、小林。恋愛とは、まさに失恋する為にあると言っても過言ではないんだ。お前は生き

て、もつと多くの恋愛を経験しろ。そうすればいつか、先生みたいに素敵な奥さんと巡り会うことが出来る！ うはは！ それじゃあな小林！ 可愛いマイハニーと外で食事する約束をしているので、失礼するよ！」と言って、手早く荷物をまとめ、去って行った。

「慰めたいのか自慢したいのか、どっちなんだ先生……」

走太的には無駄に心が傷付いた気がする。……くそっ、いいなあ、奥さんとラブラブで。

「ああもう！ 帰るぞ、俺も！ 帰って今日も、さっさと寝ちまおう！」

一睡すれば、精神も少しは回復するだろう。

スクールバッグを手に持ち、職員室の出入り口に向かい、「失礼しましたー」と言いながら、扉を開ける。

廊下に出て、昇降口の方へ向かおうとしたところで、走太はぎよつとした。

職員室の出入り口のすぐ横に、予想外の人物が立っていたからだ。それは――

「れ……麗央奈」

外から差し込む夕日に、その赤毛を一層赤く煌かせながら、廊下の壁に背中を預けている幼馴染み。

走太に並ぼうかという高身長少女は、壁から背を離すと、彼の前に立った。

眉根に皺を寄せ、強張った表情は、何だか怒っているように見えた。

走太はごくりと喉を鳴らし、退け腰で尋ねる。

「ど、どうしてここに？」

すると、麗央奈は何やら口元をもごもごさせる。

「そ……」

「……そ？」

走太が恐る恐る訊き返すと、彼女は一度深呼吸。それでもなお言い辛そうにしながら、おぼつかない口調で、小さく呟いた。

「走太を……待ってた」

麗央奈はあれから、何も喋らない。

ただ、走太の前を歩き、帰路を辿って行くだけである。

御門学園のある御門市から地元に向かう電車の中でも、隣の吊り革に掴まっている幼馴染みは、眉根に皺を寄せたまま何も言わなかった。走太はヘタレなので、話題の一つも振ることが出来ない。気まずいっただけでありやしない。

走太は今日まで、もしも彼女とブッキングしたら、こういう雰囲気になることが予測出来ていた為、意図的に帰宅時間をずらして来た。麗央奈は学校に用事がある場合が多く、帰宅時間が遅い傾向にあったので、走太は特に寄り道もせず、真っ直ぐに帰宅することが多かった。走太がどの部活動にも所属していない理由の一つが、これである。

また、朝の登校時はどうしているのかというと、走太はやや早起きをして、麗央奈よりも一本早い電車に乗っていた。それでも過去に一度、ブッキングし掛けたことがあったが、別車両に乗って、上手く回避した。

それがまさか、隣の吊り革に掴まるまでに接近する日が来ようとは。

どうしようもない気まずさを抱えたまま、電車を降り、走太達が生まれてから十七年間暮らしている地元に着く。

麗央奈は振り返ることなく、前を歩いて行く。

走太と麗央奈の家は、駅から歩いて十分くらいのところにあるのだが、麗央奈は特に寄り道をする様子も無く、最短ルートを突き進んで行く。

（それにしても、麗央奈はなんで俺を待ってたんだ？）

次元獣やらゲートキーパーの関係で、何か話があるのではないの

か。しかし、学校からここまで、それらしき素振りは一切無い。

（なんか怒ってるっぽい雰囲気だし。嫌だなあ……話し掛けるの）

我ながら情けないと思う走太だが、冷静に考えて、今日のお昼休みまで、麗央奈とは十年以上まともに会話すらしていなかったのである。いきなりこんな状況に置かれても、何をどう喋ったらいいのか、全くもって分からない。

（でも、待てよ……）

至って真面目に、次元獣やゲートキーパーについての質問をぶつけてみたらどうだろうか。

自分は、それらについては正真正銘の初心者なのだから、疑問を持つのは至って普通のことである。自分がキーパーマスターという存在であることを認めたわけではないし、認めたくもないが、麗央奈との差し障りのない話題としては打って付けである。

（よ、よし……質問しよう。質問するぞ！ 質問しろよ俺えええ！）

走太は心臓をばっくんばっくん言わせながら、何度か喉から出し掛けて飲み込み、両手でバシバシと頬が痛くなるくらい叩いてから、口にする。

「れ、麗央奈！」

彼女の肩が大きく揺れる。険しい表情が、走太の方を向いた。

「……な、なに？」

「俺！ どうしても麗央奈に訊きたいことがあるんだけど！ 訊いてもいいか！？」

「き、訊きたいこと？」

眉根の皺の本数が一気に増える。

走太は両手の拳をぐっと握り、言った。

「ゲートキーパーの必殺技発動の時に叫んでたけど、あれって音声認識なのかつ！？」

「え」

鈍い反応を返す麗央奈に、走太は全身から、ぶわっと冷や汗が噴き出した。

（あれ？ あれえええ！？ 俺、よりによってなんでこんなマニアックな質問をおおお！？ もっと普通の疑問をぶつけるはずだったのにいいい！）

緊張し過ぎて、走太が心に押し込めていたはずのオタク根性が顔を出してしまったのか。

（終わった……！ これは終わった……！）

麗央奈はこれで更に機嫌を悪くすることだろう。まさに逆効果。救いようが無い。

走太はがっくりと項垂れる。

「……あー、麗央奈。今のはあれだ。若さ故の過ちというか、どうか、記憶から削除して頂けると――」

「うん、音声認識だよ」

「そうか、音声認識なのか……って、マジでえええ！？」

思わず顔を上げて、叫んでしまった。

「ひゃっ！？」

驚き、目を丸くする麗央奈。

興奮冷めやらぬ走太は、麗央奈の肩を掴み、更に問う。

「音声認識って、声でロボットに指示を出すってことだぞ！？ 間違いないのか！？」

「ま、間違いないと思う。ゲートキーパーは乗り込んだキーパーマスターの意思を読み取って細かい動作をするから、必殺技の時は技名を叫んで、頭の中を必殺技のイメージで一杯にしないと、上手く動作してくれないっていうか」

「マジでか！ かけえ！ ということは、俺もあのブラックティラーってロボットに乗ったら、必殺技を叫ばなくちゃいけないんだな！？ うおおおお、いかん、無性にテンション上がって来た！」

「う、うん、そうだね……」

キーパーマスターにはなりたくないが、ゲートキーパーには乗ってみたくなった。なにせ、音声認識である。完全にロボットアニメの世界だ。

そういえば、ゲートキーパーのコクピットはどんな感じなのだろう。音声認識が必要なコクピットは、操縦桿を握れば、後はパイロットの意思で動く、スタイリッシュなタイプなのかもしれない。どこかの汎用人型決戦兵器みたいな感じで。

「つて、あ……」

そこで、はつと我に返る走太。

自分がとんでもない失態をやらかしていることに気付く。己の腕を見れば、麗央奈の肩をがっしりと掴んでおり、己の発言を振り返れば、完全に趣味の領域に突入している。

（あれれ？　なんかもう、色々と取り返しが付かなくなってる気がするよ？）

だらだらと全身から冷や汗が流れる。

麗央奈は怒っているのか、俯いて肩を震わせている。

走太は慌てて、両手を離れた。

「す、すまん！　テンションが上がってつい！　こんな話されてもつまらないし、全然面白くないよな！　本当、なんつーか、ゴメン！」

頭を下げる以外に今の状況を取り繕う方法が見つからなかったのだ、とにかく頭を下げる。

ふと、走太は重大な一つの事実気付く。

（ちよつと待て。俺、今、麗央奈に謝れた……？）

ごく自然に。十一年もの間、会話の一つも出来やしなかったのに。

（俺……謝れるのか……？）

「ち、違うの！」

「え？」

麗央奈の大声に頭を上げる。

彼女は俯いたまま、喉から絞り出すように言葉を発する。

「走太の話が、つまらないとか、そういうんじゃない、ただ、その……走太と、こんなに話すのが、久しぶり過ぎて……何をどう言ったらいいのか、どんな話をしたらいいのか、どんな顔したら

いいのか、全く分からなくて……私……」

「え？ ええ？」

そつと、麗央奈が顔を上げる。

麗央奈の顔は、夕日の朱色の中でも分かる程に、真っ赤に染まっていた。

眉根に皺を寄せ、涙を目尻に浮かべながら、強張った表情で、肩を震わせながら。

（そうか……麗央奈、怒ってたわけじゃないんだ……）

本当は違ったのだ。

走太が勝手に、怒っていると思い込んでいただけで。

「……お、俺も」

「え？」

「俺もなんだ、実は……」

どうにも緊張してしまって、走太は麗央奈の目を見れないながらも、言葉を続ける。

「ほら、今日までずっと、会話とか一度もして来なかっただろ。だから、俺も、麗央奈に全然話題が振れなくて。麗央奈、ずっと眉根に皺を寄せてるから、凄く不機嫌そうに見えて、さ」

「ふ、不機嫌になんて、なるわけない！」

声を張り上げる赤毛の幼馴染みに、走太は驚く。

「れ、麗央奈？」

「あ……ごめん、走太。でも、あのね、私は……走太と一緒に並んで、こうやって帰れて、嬉しいと思うことはあっても、不機嫌になることなんて、絶対ない……！ だって、私はずっと――」

麗央奈は潤んだ瞳で、真っ直ぐに走太の目を見て、言った。

「走太とこうして、一緒に帰りたいって思ってたから……！」

「くぁwせdrftgyふじこーぷー？」

瞬間、走太の心臓を鋼鉄の弾丸で打ち抜かれたような衝撃が駆け

抜け、発音の難しい奇声を上げながら、仰向けに地面へと倒れた。

「ちよつ、走太！？ いきなりどうしたの、大丈夫！？」

「き、気にするな、麗央奈……男という生き物は皆、いつだって胸に一発の弾丸を抱えているものさ」

「なんというか……本当に大丈夫！？」

その後、走太は麗央奈に手伝って貰い、なんとか起き上がる。

変な間が空いてしまったせいか、麗央奈は再び黙り込んでしまい、時折ちらちらと走太の様子を窺いながら、その柔らかそうなポニテールの先っぽを掴んで、いじいじと人差し指に巻き付けたりしている。

埒があかないので、走太の方から麗央奈に話し掛けてみる。

「あの、麗央奈」

「な、なになに！？」

「このまま突っ立ってるのも何だし、歩きながら話すか」

「う、うんうん！ そうしよう！ そうしたい！」

ぶんぶんと麗央奈は激しく頷き、二人で並んで、帰路をまた歩き出す。

「麗央奈はさ」

「う、うん」

「いつからあの赤いロボット……えーっと、なんて名前だっけ」

「レッドラス？」

「そう、そのゲートキーパーに乗って、戦うようになったんだ？」

「今年の初め、一年の三学期が始まって、すぐくらいかな。走太と同じように、中間世界に引き込まれたところで、レッドラスが現れて。そのまま乗り込んで、神谷先輩と一緒に次元獣を倒したのが始まりで」

「そっか……格好良いよな、あのレッドラスってゲートキーパー。

歩く武器庫って感じでさ」

「走太は……ロボットアニメとか、好きなの？」

「今更隠しても遅いから話すと、中学時代に、友達に薦められた口

ボットアニメが滅茶苦茶面白くてさ。それから、古いのも新しいのも全部チェックするようになって。クラスの連中には恥ずかしくて言えないけど、部屋には結構、ロボットのフィギュアとかもあったりして……はは」

「ふ、ふうん。走太の部屋って今、そんな感じなんだ……」

「お恥ずかしい限りで……」

「こ、ここ、今度」

「うん？」

麗央奈の声が変なので、横を歩いている彼女を見やる。
なにやら緊張した面持ちで、口をぱくぱくさせている。

「その……久しぶりに……そ、走太の部屋に、遊びに行っちゃ……だ、駄目かな？」

「な、なんだってえええ——つつつ！？」

ピシャアアアアンツツツ！ と走太は、自身の心の中で雷の落ちる音を聞いた。

麗央奈は赤い頬で、手を激しく横に振る。

「あ、いや、その、深い意味はあるというか！ キーパーマスター同士の会議がしたいとか、そういうわけじゃなくて、ただ単に、走太の部屋に入りたいってだけで……！」

「ちよっ……麗央奈さん！？ 隠せてないよ！ 本音が駄々漏れになってるよ！」

「え？ ええっ！？」

彼女は黒い瞳をぱちくりさせ、やがて、自らの発言を振り返って状況を理解したのか、みるみる顔を赤く染め、

「ぎゃ——っ！」

恥ずかしさのあまりか、彼女は両手で顔を隠し、凄まじい速さで走り出した。

「麗央奈さん速っ！ さすが運動部が助っ人を頼みに来るだけはあるよ！ でもちよっと待ってストオオオッ！ 麗央奈さん、前！ 前！」

ドゴスッ！

「はうあつ！？」

壮絶な音を立てて、麗央奈さんは目の前の電柱に激突。反作用で後方に吹っ飛ばされて、仰向けに転倒する。

「麗央奈さあああ——んッ！？」

慌てて彼女の元へ駆け寄る走太。

おでこを赤くしながらも、麗央奈は未だ顔を隠したままだった。今にも死にそうな声で、彼女は言う。

「えうつ……ぐすつ……本音がバレてしまったので、走太の部屋に行くのは諦めます……」

「いや、来ていいから別に！　そこまで思い詰めるくらいなら、俺の部屋なんか幾らでも遊びに来ていいから！」

「……本当に？」

「もちろん！」

「……毎日でも？」

「え？　いや、毎日はちょっと……」

「えうつ……ぐすつ……」

「ええーっ！？　そこで泣く！？」

兎にも角にも、走太が「あーもう、望むところだ！　毎日上等！　ばっち来いやあ！」と言ったら、麗央奈は泣き止んだ。……さすがに本当に毎日来られたら困るけども。

（しかし、麗央奈って以外と、昔と変わってない……？）

泣き止みはしたものの、電柱の横で膝を抱えて、「恥ずかしくて立てません。というか、もう生きて行けません……」といじける麗央奈は、普段学校で見ているイメージとはまるで別人だった。弱々しくて、昔の麗央奈っぽい。

（男っぽくなったと思ってたけど、女の子なんだな、やっぱり）

と、背中でもぞもぞと麗央奈が動く。

走太は先程の電柱の所から、麗央奈を負ぶさって、帰路を歩いていた。そうでもしないと、麗央奈はいつまで経っても、あの場を動こうとしなかったからである。

「……ごめんね、走太」

不意に、背中 of 麗央奈がそう口にした。

「え？ ああ、いや……謝らなくてもいいよ、別に」

「その……つい取り乱しちゃって……ごめん」

「俺だって、その前にテンション上がって、変なところ見せたる。

だから、別に……驚きはしたけど、気にしなくてもいいよ」

「うん……」

「しかし……あれだな」

「うん？」

「なんつーか、一度話し始めると、意外と喋れるもんだな。十一年経っても」

「……そうだね」

「あのさ、麗央奈。俺……」

走太はなんとなく、今なら言える気がした。

昔、彼女を見捨てて逃げたことを、謝れそうな気がした。

「その……」

背中に、暖かさと重みを感じながら。自分の心臓が高鳴るのを覚えながら。

「昨日は……ありがとな」

「え？」

「次元獣から、助けてくれただろ。そういえばまだ、お礼を言っ
てなかったな、って思ってた」

——でも、走太は言えなかった。胸の奥にあるつかえ棒が邪魔
をして、謝ることが出来なかった。

まだ、走太は怖い。謝罪を言葉にした時にするであろう、麗央奈
の反応が、表情が、とても怖い。

だから、走太は、差し障りの無い「ありがとう」に、言葉をすり替えた。今はこれが限界だった。

走太の首筋に、なにか温かなものが落ちる。

「麗央奈？」

走太が横目で彼女の様子を窺う。彼女は走太の背中に顔を埋め、表情を知ることはい出来ない。

だが、彼女の息遣いで分かった。

紅坂麗央奈は、泣いていた。

ぎゅっと、走太の制服が掴まれる。

走太は、前を向いて、黙って歩き続けることにした。

麗央奈が本気で泣いているのが分かったからだった。

家に着くまでに泣き止みそうにないので、その日は少しだけ遠回りをして帰った。

やがて、麗央奈の家の前に着く。

走太はゆつくりと彼女を背中から下ろした。

「家まで負ぶってくれて、その……ありがとう、走太」

「それよりも、もう大丈夫なのか？ 一人で歩けるか？」

「うん、大丈夫。もう泣かない」

そう言って、麗央奈は頷いてみせる。

スクールバッグを持ち、彼女は家の外門に手を掛ける。

「じゃあ、私、入るね」

「おう。じゃあな」

走太は軽く手を振って、隣の自宅に向かう。

「あ、待って、走太」

「ん？」

足を止めて振り返る。

麗央奈はなにやら顔を赤くし、ポニーテールの先端を指で弄びな

がら、

「その……あ、朝も……！」

「朝？」

「明日の朝も……走太と一緒に学校に……い、行っているんですか！？」

上目遣いでそんなことを言う。

果たして、これを断れる男がこの世にいるだろうか。少なくとも、凡人を自称する走太には、不可能である。

「わ、分かった」

こくこくと頷く走太。

麗央奈は、ぱあっと花咲くように微笑んだ。

「うん！」

彼女はそこでようやく、学校で見る元気な姿を見せ、「じゃあ、また明日ね、走太！」と手を振って、家の中へと入って行く。

走太はそれを見届けてから、自宅の中に入り、玄関の扉を閉め、寄り掛かって、火照った顔を両手で必死に仰いだ。

「あの笑顔は……反則だろ……」

一方、私立御門学園の生徒会室。

すっかり日も暮れて、暗くなった室内で、一人の女子生徒が腕を組み、パソコンの画面と睨めっこしていた。

腰まで伸びた黒いロングヘアーに、金フレームの眼鏡。前髪は、これまた金色のカチューシャで留めて、おでこを露出させている。もともと綺麗な顔立ちも相俟って、やたら目を引く外見をした少女だった。

ただし、それも暗い部屋の中では全く意味を成さないが。
「うーむ」

眉根に皺を寄せ、女子生徒が唸っていると、唐突に、ぱっと部屋

の明かりが点いた。

「うおおっ、眩しっ！」

両手を前で交差させ、顔を隠す女子生徒。

生徒会室の出入り口で、電気パネルに触れている細目の男子生徒

——神谷源平は、にこつと微笑んだ。

「君のおでこも負けじと眩しいよ、金剛生徒会長」

女子生徒——金剛雅は、先程までとは違う意味で、眉根に皺を寄せる。

「なんだ、お前か、神谷」

「金剛、前から言ってるけど、その電気を点け忘れる癖はどうにかした方がいいよ。そんなんだから目が悪くなっただんじゃないの？」

雅は「ふん」と鼻を鳴らす。

「忠告はありがたく受け取っておこう。それで？ 何しに来たんだ、お前は。わざわざ私の視力を心配して、はるばる生徒会室まで足を運んで来てくれたのか？」

「まあ、それも理由の一つと言えば一つだけど、今回はあれだよ。ブラックテイラーのパイロットが見つかったんで、その報告にね」

「小林走太……だったか、二年生の。で、首尾はどんな感じだ」

「紅坂に小林くんを呼んで貰って、中間世界で少し話をした。返事を聞いたわけじゃないけど、多分パイロットとして戦ってくれるんじゃないかなーって、僕は思ってる」

「ほう」

「嫌そうな顔してたけど、結構ノリが良い男子だね。それから、今日知ったんだけど、どうやら紅坂の幼馴染みらしいんだな、これが」
「なるほど。幼馴染みの女の子が戦っているのに、それを見て見ぬフリする男はいないか」

「んー……」

「なんだ、煮え切らない顔だな」

「いや、ちよつとそういうタイプとは違うんだよね、小林くんは。」

……それはともかくとして、金剛はこんな時間までパソコンと睨め

っこして、何をやってたの？」

源平は、会長席の前まで歩いて行く。

雅は「ん」と一枚のプリントを彼に差し出す。

「過去の次元獣出現時刻を記したデータだ。お前はこれを見て、どう思う？」

源平はプリントを一通り眺めた後、わずかに眼を見開いて、

「ふーむ……一ヶ月に出現する次元獣の数の平均は、およそ二体。多い月でも四体。でも今月は、昨日の奴で四体目か」

「にも関わらず、今日はまだ五月の十二日。まだ半月も経ってないのに、四体目だ。過去のデータに、こんな頻度で次元獣が出現した月は無い」

「つまり、金剛的には、少しばかり不安なこと？」

「警戒しとくに越したことは無いってことだ」

椅子を回転させ、背後の窓から夜の闇が下りた御門市を眺める雅。源平は再びプリントに視線を落とし、顎を擦る。

「でも、ひよっとすると、次元獣の出現頻度が増えたことと、ブラックテイラーが小林くんをパイロットに選んだことは、関係があるのかな？ そこら辺どうなんだろう——」

彼は生徒会室入り口の方を振り返りながら、言った。

「自称・学園一の情報屋くん」

扉を開けて、入って来たのは、ツンツンと尖った短髪に、黒縁の丸眼鏡を掛けた、妙にルックスの良い男。

「お呼びですか、神谷先輩？」

「先輩って……実質的な年齢で言ったら、君の方が上じゃないか」

「でも、学年は俺の方が下ですからね。で、何でしたっけ？ ブラックテイラーがパイロットを選んだことと、次元獣の出現頻度が増えたことの、因果関係についてでしたっけ？」

「うん、何か知ってるのかなって思ってたさ」

「いや、無いですよ。何も無いです。俺は学園の情報屋として、誰よりも次元獣に詳しいと自負してますが、次元獣の出現頻度の高さ

については、正直分かりかねます」

「へ？ そうなの？ じゃあ、なんでブラックティラーは小林くんを……」

「そんなもん、決まってるじゃないですか——」

生徒会室にあるソファアのところまで歩いて腰掛け、崎原宮治はさも楽しげに言った。

「気紛れですよ。ただの気紛れ」

「それにしても、また明日……か」

こんなにも明日という日が楽しみな夜が、今までに一度でもあつただろうか。

走太は風呂のお湯をプラスチックの桶で掬い、頭から被る。これをもう一度繰り返す。

「ぷはあー、さて次は、身体を洗いますかね、と」

頭の泡を洗い流したところで、スポンジを手に取り、石鹸で泡立てて、上半身の方から洗って行く。

「ふふん、ふふふん、ふふふんふーん♪」

上機嫌のまま、鼻歌を奏でていると、脱衣場の方から『うわっ……！』という聞き慣れた声がする。

『畳んだ予備のタオルを持って来てみれば、このクソガキ、鼻歌なんか歌ってやがるよ、気持ち悪っ！』

「うるせーよ、母ちゃん。いいだろ別に」

『昨日は自殺を図りやがった癖に、今日は上機嫌って俺の息子に一体何が……！？』

「俺の心は、荒っぽい母ちゃんと違って、とても繊細なんだよ。なにせ俺は父さん似だからね」

『てめえと走一さんを比べるなんて千年早いわクソガキ。ああ、なんで走一さんみたいな格好良いイケメンじゃなくて、こんな汚えな

い顔のヘタレが産まれて来たのか』

「母ちゃんのDNAが混じったからじゃね？」

『ああん？ 俺のDNAが何だつて、このクソ——』

走太の母が言い掛けたところで、脱衣場に別の足音が近付いて来る。

『私の名前が呼ばれた気がしたんだけど、どうかしたのかい？』

『ああん、走一さん！ なんでもないの！ ただ、走太と仲良くお話してただけ』

『はは、相変わらず、拳こぶしと走太は仲が良いね。私も見習いたいな』

『そりゃあ、親子ですもの。うふふ』

やがて、猫撫で声と、おとばけなイケメン声が、脱衣場から遠ざかって行く。

走太はため息を吐いた。

息子と父で、なんとという対応の差だろう。一方がクソガキで、一方がさん付けって……。

「まあ、別にいいけど」

スポンジで下半身も洗い、お湯を被って、泡を流す。

湯船に浸かろうと風呂椅子から立ち上がったところで、走太は違和感に気付いた。

「ん？」

鏡に映った自分の姿への、一瞬の違和感。

改めて正面から鏡を覗き込むが、どこにも異変は無い。

「んん？」

顎を擦ってしばらく考えてから、試しに背中を向けてみる。

「んんん！？」

そうして、違和感の正体が判明する。

「なんだこりゃ……」

走太の尻——更に詳しく言うなら、ちょうど尾てい骨の部分に、黒々とした、紋章のようなものが刻まれていた。

第二章 ヘタレ、出撃す

小林走太は今、灰色の空が広がる世界に来ている。

場所は私立御門学園の校舎屋上。走太の斜め前には、屋上を囲う柵の上に仁王立ちし、腕を組みながら、市街地方面を眺めている少女が一人。

この灰色の世界にも、風というものは吹いているらしく、走太の視界の中で少女の赤いポニーテールが揺れている。

ついでに制服のスカートも揺れていたりするので、普通に屋上に立っている走太としては、目のやり場に結構困るのだが、赤毛の幼馴染みは、そんなことは気にしないといった様子で、真剣な表情を保ち続けている。

「あー、麗央奈？」

「うん？ どうしたの、走太」

それでも走太は気になったので、尋ねてみた。

「なんでわざわざ、柵の上に立つ必要があるんだ？」

「え？ それは——」

紅坂麗央奈が答えを言い掛けたところで、轟音が辺りに響いた。

「来たよ、走太！」

麗央奈が市街地の方を指差す。

その先で炎と黒煙が上がり、巨大な影が揺らめいている。

走太は息を呑む。

「じ、次元獣……！」

すると、麗央奈が頭に付けているインカムのマイクに向けて言う。

「こちら紅坂及び小林。次元獣を目視で確認しました。これより迎撃に移ります。生徒会長に出撃の許可を」

すると、走太の付けているインカムにも、女の子の声で返事が来る。

『了解。生徒会長に許可を取ります。なお、敵は四足歩行型。デー

タベースと照合した結果、四年程前に出現した次元獣と同種である可能性が高いです。よって、敵は以後、「ジャガー」と呼称します。繰り返します。敵の呼称は以後、「ジャガー」です」

細目の先輩、神谷源平によれば、中間世界に入れるのはキーパーマスターだけとのことだったが、後日聞いた話によると、

「ごめん、あれ嘘。いやー、あの場では、そう言った方が、小林くんを仲間に入れるのに都合が良いと思っただけだからさ。正確には、キーパーマスター以外にも数人、中間世界に入ることの出来る人間がいるんだよね」

とのこと、それが今、走太達がインカムで通信をしている、私立御門学園の生徒会役員達であった。

役職名称は『キーパーアシスト』。前線でゲートキーパーを駆り、戦闘で行うキーパーマスターの支援を行うことが、主な役目であるらしい。まだ見せて貰った事はないが、司令室というところから指示を出しているのだそう、そこには無数のモニターがあり、御門市内に無数に配置されたカメラから、戦闘の状況を確認しているのだとか。

と、麗央名がインカムに問う。

「ジャガーの特徴は？」

『どうやら、かなり身軽で、足が速いようです。四年前の戦闘においては、五体のゲートキーパーによる連携で、中間世界の北東隅に追い詰め、撃破しています。武器は前足二本の爪と、口から放たれるエネルギー弾です。いずれの攻撃も、威力は飛び抜けて高くはないようですが、連続で受ければ、当然ながら危険です。そこは気を付けて下さい』

「しかし、神谷先輩のシラシオンは損傷していて出撃出来ない状態です。こちらのゲートキーパーは二体しかいません。四年前と同じ戦法は……」

『はい。仰る通り、四年前と同じ戦法は取れません。なので現在、生徒会と神谷先輩でそれに代わる対応策を考案中です』

『紅坂、小林くん、聞こえるかい？』

インカムから、生徒会の女の子と入れ替わりで、神谷先輩の声。
麗央奈は頷く。

「はい、聞こえてます」

『四年前の戦闘だけど、当時の五体つてのは、二代前の先輩達が乗
つてて、シラシオン、レッドラス、ヴァルセイン、ゴウケンキ、ア
グリーネの五体だ。六体のゲートキーパー中最速を誇るヴァルセイ
ンが作戦のメインとなって、囲うように御門市の北東隅へと追い詰
めた』

「ですが今、ヴァルセインはいません。加えて、重火力型のレッド
ラスでは、高速戦闘は不利です」

『そうだね。そこがネックとも言える。今回のジャガーは、レッド
ラスでは相性が悪い。けれど、決して勝算が無いわけじゃない』

「それは？」

『当時はまだパイロットが見つかっていなかった、ブラックテイラ
ーだよ』

走太は思わず、声を上げる。

「え、俺！？」

『そう、小林くん。君とブラックテイラーが、今回の戦闘の鍵だ。
頑張つてね』

「ち、ちよつと待って下さいよ、神谷先輩！ 俺は今日、次元獣と
の戦闘を見学する為にここに来たんですよ？ 麗央奈の戦闘を脇
から見てればよかったんじゃないんですか？ 研修中みたいなもん
だから気楽に、って言っていましたよね！？」

『いやー、ごめんね、小林くん。この前みたいなパワータイプだつ
たら紅坂のレッドラスで何とかなるんだけどさ。ほら、戦場つて常
に何が起こるか分からないって言うし』

「俺、初戦闘ですよ！？ まだ技の一つも知らないんですけど！」

『大丈夫。ブラックテイラーつてそもそも、格闘以外に武装持つて
ないから』

「ええええ！？ 嘘お！？」

『あれ、おかしいな……通信が、上手くいか、な……ブツッ！』

「ちよつと！ 神谷先輩！？ おい神谷！ 最後のブツッって自分で言っただよね！？ おいいい！」

インカムに向かって叫ぶ走太だが、返答は無い。

ならばとオペレーターである生徒会役員の女の子を呼ぶ。

「菜美子ちゃん！ 菜美子ちゃん！」

『はい、代わりました。菜美子です』

「ちよつとさ、隣で意地悪そうに目を細めてる先輩と代わってくれないかな。電波の調子が悪かったみたいでさ、通信が途切れちゃったんだよね」

『……了解です。通信を代われたそうですが、どうします？ ……』

ああ、はい、了解です』

「菜美子ちゃん？」

『あ、はい。神谷先輩からの伝言です』

「伝言？」

『うだうだ言っでないで、さっさと行け、このヘタレ！ だそうです』

「おiiiiiii！ 神谷あ！ 聞こえてんだろ、出て来いやああ！」

『うだうだ言っでないで、さっさと行けよ、このヘタレ』

「あれ？ 菜美子ちゃん、なんで今二回言っただの？」

『ん、おかしいですね……こちらも、電波が、良くな……ブツッ！』

「ちよつ、菜美子ちゃん！？ 最後のブツッって、やっぱり自分の口で言っただよね！？ 菜美子ちゃん！？」

その通信を最後にして、走太のインカムは無言になる。

「ああもう、なんなんだチクショウ！」

インカムを頭から外し、地面に叩き付ける走太に、麗央奈が言う。

「走太！ 菜美子ちゃんからの通信で、生徒会長からの許可が下りたよ！ 出撃しよう！」

「思いつきり電波良好じゃねえか、菜美子ちゃん！？」

ふと、屋上の柵の上で、ぐつと膝を曲げる麗央奈。

その姿勢は、走太には柵から降りる為のものでは無く、力を溜める為のように見えた。

「ちよっ……麗央奈！？一体、何を……！」

驚いて手を伸ばす走太に、麗央奈は不敵な笑みを浮かべる。

「走太、さっきなんでわざわざ、柵の上なんか立つ必要があるのかって訊いたよね？ それは――」

赤毛の幼馴染みは次の瞬間、走太の手をすり抜け、勢い良く空へと跳躍した。

「こういうこと！」

「え？ ええええッ！？ 麗央奈！」

走太は柵へと身を乗り出す。

麗央奈は校舎の屋上から、校庭の地面へと落ちて行く。

彼女は高らかに叫んだ。

「行くよ！ レッドラスッ！」

麗央奈の声に、世界が共鳴するように震える。その細い身体を中心として、空間に亀裂が走り、甲高い音を立てて砕け散る。同時に放たれる、眩い煌き。

やがて、その光が消えた後には。

真っ赤なアーマーを纏った、巨大ロボットの姿が校庭にあった。

「さ、さすが過ぎるぜ、麗央奈さん……！」

運動神経抜群にして、怖いもの無しの彼女だからこそ、出来る芸当といったところだろうか。

眉をひくつかせる走太の方へ、レッドラスが黄色いアイカメラを向ける。

『走太も同じようにやると楽だよ！』

「無理無理無理無理無理！ 絶対に無理！」

『そう？ 残念……』

しょぼーんと肩アーマーを落とすレッドラス。

走太は涙目になりながら、灰色の空に向かって顔を上げる。

「くっそ……神谷先輩め！俺は見てるだけ！ぜええつたいに麗央奈の横で見てるだけなんだからね！」

そして、大きく息を吸い、鬱憤をぶつけるように叫んだ。

「ブラックテイラアア——ツツツ！」

走太の声が、中間世界の中で反響する。空間の壁を叩き割り、漆黒の機体が姿を現す。

鋭利なナイフを思わせる流線型ボディ。有機的に、意思を持って生き生きと動く黒い尻尾。

走太を選びし機体『ブラックテイラー』。黄色いアイカメラがギリリと輝く。

大地を揺らし、校庭に着地したゲートキーパーは、屋上の走太に向けて、大きな手の平を差し出した。

ブラックテイラーの胸部ハッチが大きく口を開け、コクピットが露になる。

走太はブラックテイラーの手の平から、コクピットに飛び乗り、中央にある席に腰掛ける。

左右の手元にある操縦桿を握ると、胸部ハッチがそれを感知して閉じ、コクピットモニターが外の景観を映し出す。

コクピットは球形で、その内側の壁は全てモニターになっている。全天周モニターというやつだ。

ブラックテイラーのコクピットには、操縦桿以外にボタン等は存在せず、麗央奈が以前言っていた通り、パイロットが頭の中で、ゲートキーパーの行動をイメージすることで動かすことが出来る。

「ええと、モニターが点いたら次は……パイロットスーツ、装着！」
これまでの練習通りに、その言葉を口にすると、ゲートキーパー

が認識して、走太の制服を光で包み、漆黒のパイロットスーツに変化させる。

更に走太は次の動作をイメージ。席の肩の辺りからベルト状の物が伸び、パイロットスーツと席を繋ぎ、固定する。

「よし、これでOKなはず」

『走太!』

モニターの一部に四角い窓が出現し、そこに麗央奈の顔が映し出される。

『準備は出来た?』

「練習通りにやったから、多分大丈夫だと思う」

『じゃあ、これから次元獣を倒しに行くよ。レッドラスは火力が高い代わりに機動力が低めだから、走太に結構頼ることになると思う』

「ああ、俺、やっぱり戦わなくちゃなんのね……」

自分を奮起させようとは努力しているものの、先程から足の震えが止まらない。

(くそつ、なんでこんなことに……)

最初は、キーパーマスターになる気など、さらさら無かった。

けれど走太は、麗央奈がこうして次元獣が現れる度に、一人で戦場に出ていることを知ってしまった。自らの命を危険に晒しながら、彼女が世界の為に戦っていることを知ってしまった。

もしも、それを見て見ぬフリをしてしまったなら、走太は十一年前と全く同じになってしまふ。また、幼馴染みの少女を目の前で見捨てることになってしまふ。

だから、走太はこうして中間世界に出入りしている。気が進まなくても、ブラックテイラーの動かし方を麗央奈と神谷先輩から教わった。

そして今、走太は嫌々ながらも、初の実戦へと足を踏み出そうとしている。

『走太……ごめんね』

ふと、麗央奈が言った。

「え？」

『私、今、思いつきり無茶なこと言ったよね。走太は実戦、初めてなのにな。……うん、私の言ったことは気にしないで。なるべく、走太に負担が掛からないように、私、頑張るから』

「麗央奈……」

『よし、行こう！ 走太は私の後ろに付いて来て』

レッドラスが全身のブースターを起動。その巨体を宙に浮かせ、市街地の方に向かって、発進する。

走太の操縦桿を握る手に力が入る。

（麗央奈の奴、やっぱり、昔に比べて、ずっと強くなったよな。俺なんかより…… よっぽど男らしい）

自分は、本当に情けない男だと思う。足の震えは全然止まる気配が無い。

（だけど……）

走太は前を見る。モニターの先、黒煙と赤炎が上がる、その場所を。

「走るイメージ……行け！」

ブラックテイラーが動き出す。

ゆつくりとした歩みは、次第に早まり、走太が頭の中で思い描いた通りの疾走を開始する。

（また話せるようになったんだ。麗央奈と、ごく普通に。俺はまだ麗央奈と話していたい。だから……！）

ブラックテイラーは市街地に向かって、幅の広い道路を選び、走り続ける。

ブラックテイラーには、空を飛ぶ為のブースターも、翼も、一切装備されていない。故に、戦闘地域へ向かう為には、こつやって走り続けるしかない。

だからこそ、他のゲートキーパーに比べれば、身軽な動きが出来るのかもしれないが……。

（それにしたって、今時飛べないロボットってのはどうなのよ？）
ましてや、現実的な兵器では無く、どちらかというとファンタジックな感じのロボットなのだから、翼の一つや二つ、付いていても良いと思うのだが。

（おまけに神谷先輩曰く、ブラックティラーは格闘以外に一切の武器を持ち合わせていないらしいし）

麗央奈のレッドラスとは、雲泥の差である。

走太が今走っている辺りは、初めて中間世界に巻き込まれた時に、戦闘の流れ弾で被害を被った地点なのだが、見回しても何事も無かったかのように修復されている。

中間世界は、その外観を現実世界と同一にしようとする力が働いているのだとかで、どんなに破壊されていても、ある程度時間が経つと、現実世界と同じ姿に作り直されるらしい。

やがて、所々破壊され、黒煙を上げている市街地に突入する。

「うわっ！」

走太は前方モニターに四速歩行の次元獣の姿を認めて、ブラックティラーの走りを止めさせる。

距離はおよそ一キロ。銀色の金属ボディで、先の尖ったトゲを無数に生やしているものの、地球上に実在する生物『ジャガー』を思わせるその姿。悪魔のように細く、先端が矢印型になっている尻尾を上下に動かしながら、こちらにゆっくりと歩を進めて来る。

「グルルルルル……！」

無数の牙が生えた、猫科の造形をした頭部。ゴーグル型の目が、不気味な紫色の光を放っている。

「う……！」

次元獣の存在感に気圧されて、一步後退する走太とブラックティラー。

と、ジャガーが素早く横に飛ぶ。直後、寸前までジャガーがいた

場所に降り注ぐ光弾の雨。

走太が上空を見上げると、そこには両手の五指から蒸気を上げるレッドラスの姿があった。

『走太、ジャガーから目を離さないで！ どこから来るか分からないよ！』

麗央奈はそう言つて、再びレッドラスの十指を地上に向け、ビームバルカンを放つ。

爆音が次々と上がり、街が一瞬で火の海に包まれる。

「れ、麗央奈、幾らなんでもやり過ぎじゃ……」

走太は壮絶な光景に、思わず身震い。

『私もそう思う。だけど、全力で立ち向かわないと――』

火の海の中か青い光弾が飛び出し、一直線にレッドラスへ向かう。直撃し、爆発する光弾。

「麗央奈！」

『大丈夫』

爆炎の中から、レッドラスが腕を出す。その右腕の甲には、光の盾――ビームシールドが展開されていた。

「シールド展開つて……あの攻撃に、咄嗟に反応出来たのか……？」

『走太、これで分かったと思うけど、周りがどんなに酷い有様になるうとも、全力で立ち向かわないと、やられるのは私達だよ』

ごくりと唾を飲み込む走太。ここは本当の戦場なのだと、改めて思い知らされる。

一つ間違えば、自分の命は無い。そういう場所なのだ、ここは。

（俺みたいな奴が、なんでこんなところに来てんだ……？）

技術も、度胸も無いのに、戦場のど真ん中に出て。無事に生きて帰れるとでも？

（つーか、なんで俺なんかを選んだんだ、ブラックテイラー）

自分よりもパイロット適正に優れた奴なんて、御門学園には一杯いるだろうに。

『走太、横！』

狭い路地の間を抜けて、ジャガーが勢い良く飛び掛って来る。

「ぎゃーっ!？」

寸でのところでかわし、難を逃れる走太。ジャガーは道路上をスライディングしながら着地し、ゲートキーパーに比べてやや小柄の身体を、ブラックテイラーの方へ向き直らせる。

「くっそお……思いつきり俺狙いじゃねえかよお……!」

その紫色のゴーグルアイに睨まれるだけで、今にも泣きそうである。

ガパツ! と牙だらけの口が大きく開かれる。中央に銃口があり、それが光ったと思った途端、ブラックテイラー目掛けて、青白いエネルギー弾が発射される。

「ちよっ、撃つな! 俺に撃つなあああ!」

砲撃がブラックテイラーの肩を掠め、走太は悲鳴のような声を上げて、その場から逃走を開始する。

「グルルルア——ツツツ!」

「ひいいいっつっ!」

しかも、ジャガーはレッドラスに見向きもせず、ブラックテイラーを追い駆けて来る。

全力疾走するブラックテイラーだが、ジャガーの方がスピードは上で、両者の距離はあっという間に縮まって行く。

そして、ついにブラックテイラーの真後ろまで追いついたジャガーは、ガパツと口を開ける。ギリリと奥にある銃口が輝く。

「ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバいいい! ちよっと待って、ジャガーさん! 落ち着いてえええ!」

走太は間違いなく、無防備な背中に向けて、エネルギー弾を撃たれると思った。

だが、そこでジャガーが取った行動は。

ガブツツ!

「ホワアアイツ！？」

眼前で揺れている、ブラックテイラーの尻尾に噛み付くことだった。

走太は全く意味が分からない。何故光弾を撃たなかったのか。ブラックテイラーの揺れる尻尾が、ジャガーの本能を突き動かしたのか。

いずれにしても、走太は激しくパニックに陥った。一応、攻撃を受けていた。光弾を撃たれるよりも、むしろ行動の意図が全く読めないだけに、一層怖かった。

だから、泣き叫んだ。

「ギヤアアア！ 噛まれたあああ！ 次元獣に噛まれたあああ！死ぬううう、死んじゃうううう——ツツツ！」

「走太！ 落ち着いて！」

通信で麗央奈が言った。

「無理！ 無理無理無理い！ 麗央奈、取って！ 早くジャガーさん取ってえええ！」

「分かった！ 取るから、ひとまず止まって！ それ以上そっちに走ったら！」

「ぐおおおお！ 離れて！ お願いだからジャガーさん離れてえええツツツ！」

ジャガーに尻尾を噛まれてもなお、走太は全力疾走を続けていた。ブラックテイラーの尻尾を振り乱しながら、北にある御門学園の方へ逃げ続けていた。

やがて、走太は学園の正門から、校庭に回り込もうとする。だが。

ドゴスツツツ！

「ごはあっ！？」

ブラックテイラーは、全力疾走の勢いそのままに、学園の正門に

ある見えない壁に激突した。

ずるずると不可視の壁を滑り落ち、正門前的大通りにうつ伏せに倒れるブラックテイラーとジャガー。

「す、すっかり忘れてた……」

校庭から出撃することは出来ても、戻することは出来ないのだった。中間世界における御門市と他の街の境界線、それから御門学園の周囲には、見えない壁が存在している。

それは、中間世界の広さの限界を示すもので、中間世界はつまり、御門市の広さしかないということでもあった。

すなわち、中間世界は御門市という区切られた空間の中にのみ存在しているのである。

では、御門学園の周囲にある壁は一体何なのか。

神谷源平によれば、

「御門学園の周りにある壁こそが、僕達が死守すべき『次元の門』。次元の門の内側は、中間世界の中で、最も現実世界に近いポイントだ。だから、もしもこの壁が破られた場合、次元獣は現実世界へと侵攻を開始する」

走太はその言葉を思い出して、ぞつとした。

「や、やばい！ 次元の門が……！」

ブラックテイラーを起き上がらせて、背後のジャガーに視線を走らせる。

と、走太の視界に飛び込んで来たのは、振り下ろされる三本の爪。
「おわっ!？」

反射的に地面を転がって、左肩を掠めながらも、それをかわす。鋭い爪は道路に突き刺さり、嫌な音を立ててクレーターを作り出す。よろけながらも、必死にブラックテイラーの体勢を立て直す。

左手の爪を道路に突き立てたジャガーは、御門学園の方など見向きもせず、ゴーグルアイを走太に定めていた。

「次元の門より俺を取るんですかジャガーさん!？」
はつきり言って、全然嬉しくない。

「グルルルルアア——ツツツ！」

答えるように咆哮するジャガー。大気が激しく振動し、近くの建物の窓ガラスが砕け散る。

予備動作は、全く見えなかった。

「え？」

モニターから、ジャガーの姿が消えた。

何が起こったのか、走太が思考し始めたところで、前方からの強烈な物理的衝撃を受ける。

「かはっ！？」

吹き飛ばされ、道路上を転がる走太。

くらくらとする頭で、モニター正面に映っているジャガーを見やる。

「攻撃が速過ぎて、全く見え——」

再び、ジャガーがモニターから姿を消す。

「くっ！？」

腕を前面で交差させ、ガードしようとする走太だが、いつまで経っても衝撃は襲って来ない。

何故、と思った瞬間、アラート音が鳴り響き、モニターに『後方に注意！』という表示が出る。

振り向けば、高速で迫り来る四足の怪物の姿。

「がっ！？」

三本の爪による攻撃を受け、よろけるブラックテイラー。

ジャガーは弾丸のごとく低空を駆け、近くの建物を足場にして反転、再びブラックテイラーに攻撃を加える。

繰り返し、ブラックテイラーを切り裂くジャガー。走太はただただ弾かれ、悲鳴を上げるだけ。

『走太あ！』

麗央奈のレッドラスが走太に追いつく。

『待ってて！ 今助けるから！』

レッドラスがブラックテイラーの横に着地。左腕のビームシール

ドを展開し、ピンボールのごとく縦横無尽に辺りを跳ね回るジャガーへ、右手の五指を構える。

だが、ジャガーの方はレッドラスに構おうとはしない。

ブラックテイラーだけを狙い、鋭い爪で切り裂いて行く。

「ごはっ！　へぶばっ！？　あべしっ！」

『走太！　なんでこの次元獣、走太ばかり……！　こつち向けえ！』

麗央奈は辺りにバルカンを撒き散らす。しかし、それがジャガーに当たるはずも無く。

ブラックテイラーだけが、敵による攻撃でダメージを蓄積させて行く。

麗央奈が切羽詰った声で言う。

『どうして！？　どうしてこつちに攻撃して来ないの！？』

走太は何となく、その理由に気付いていた。

「分かってるんだ……多分……」

『え？』

「俺が、弱いつてこと……」

だから、走太しか狙って来ない。麗央奈を攻撃しないのは、レッドラスが自分のスピードに付いて来れないことを理解しているから。次元の門を突破しようとしなのは、ブラックテイラーさえ倒してしまえば、レッドラスも倒せる自信があるから。走太達を始末すれば、誰にも邪魔されず次元の門を突破出来る。

つまり、このままでは次元の門が突破され、現実世界が危険に晒される前に、走太は殺されるということだ。

「冗談じゃねえぞ……」

こちらら、初の実戦だというのに。そもそも、源平が麗央奈の戦う姿を見学して、勉強しろと言うから、走太はここに来たのだ。

「冗談じゃねえ……」

なのに、殺される。ロボットアニメの冴えない脇役のごとく、見せ場の一つも無く、無残に命を散らして行く。

情けないったらありやしない。

いや、情けないよりも何よりも、悔しい。

足の震えが止まらない自分。ワケも分からず涙が出て来る自分。反撃の一つも出来やしない自分。麗央奈に格好良いところの一つも見せられない自分。喚くことしか出来ない自分。次元獣に弱いと思われる自分。

そして、何より。

死にそうになってまた、麗央奈に謝れなかったことを後悔している自分が。

モニター正面に、剛速球のごとく突っ込んで来るジャガーが映る。

「冗談じゃ……ねえぞおおおおおッッッ！」

ごちゃごちゃになった気持ちを言葉にぶつけ、吐き出した。走太にとっては断末魔と言ってもいい。

それに応えるかのように、ブラックティラーが動いた。

黒い右手を握って拳を作り、振り抜き、飛び込んで来たジャガーの顔面に、思いつきり拳をめり込ませた。

高速回転しながら、宙を舞うジャガー。ブラックティラーによる一撃で働いたベクトルは凄まじく、銀色の身体を、近くの建物の壁面に突き刺した。

「あ……それ……？」

走太はブラックティラーの拳を見て、目を瞬かせる。

麗央奈が驚きの声を上げる。

『凄い、走太！ ジャガーに攻撃が当たった！』

「いや、俺は……」

確かに、ジャガーを殴りたいとは思った。それくらいには腹が立っていた。

だが、走太はあくまで怒りの感情を爆発させ、言葉にしただけだ。後はブラックティラーが勝手に動いて、ジャガーを殴り飛ばした。（俺はジャガーの動きに反応出来てなかった。反応したのは、俺じゃなくてブラックティラーだ）

走太の目はジャガーの動きについていけない。イメージしたところで、ジャガーに拳を当てることなんて出来るはずがない。

今のは、走太の『殴る』というイメージをブラックテイラーが読み取った上で、ブラックテイラー自身がジャガーの動きを見て、拳が当たるようにタイミングを見て攻撃したのだ。

走太は、ビルの壁面から身体を引き抜き、地面に着地する次元獣から視線を離さず、麗央奈に問う。

「……麗央奈。訊きたいことがあるんだけど」

「なに、走太」

「ゲートキーパーっていうのは、例えば、キーパーマスターが次元獣を殴りたいってイメージした時に、自動で相手を殴りに行くものなのか？」

「え？ どういうこと？」

「いや、ゲートキーパーって、どこまで自分の意思を持つてるんだろって思ってたさ」

「分からないけど……私のレッドラスは、少なくとも、勝手に動いたことはないよ。私がイメージした通りにしか動かない。自分自身の手足を動かすようなイメージでしか、動いたりしない」

「だとしたら……」

走太はモニター後方を見やる。

そこには、生き生きと動く、ブラックテイラーの黒い尻尾がある。まるで、自分の意思を持っているかのように。

走太は次いで、モニター正面に視線を戻す。

ジャガーが体勢を立て直し、今にもまた攻撃に出そうな雰囲気醸し出している。

再び、モニター上から敵影が消失したところで、走太は叫んだ。

「頼む、ブラックテイラー！ あいつの動きを止めてくれ！」

「走太、何を！？」

直後、ブラックテイラーが動いた。開いた右手を天に掲げると、コンクリートの道路に向け、勢い良く振り下ろす。

轟音を立て、地面に大きなクレーターが出来上がる。

走太は果たして、賭けに勝った。ブラックテイラーが振り下ろした右手は、ジャガーの頭部を鷲掴みにして、道路に押し付けていた。
「なっ……！？」

「うおらあああ！」

走太は、今度は自分でイメージをして、ジャガーを横の建物に放り投げ、叩き付ける。

「走太……今のって」

「ブラックテイラーにこう動いて欲しいっていうのを頼んでみたんだ。そしたら、応えてくれた」

「そんなことが……！？」

「これなら、あいつに勝てるかもしれない」

横の建物から、勢い良く飛び出す影。

走太は、ただ名前を叫ぶ。

「ブラックテイラー！」

瞬時に振り被った黒い機体は、向かって来るジャガーを的確に捉え、拳を振るう。

顔面に直撃。地面にバウンドさせて、銀色の身体を再び付近の建物に突き刺す。

「うおおおお！」

走太は駆け出す。ジャガーに接近し、追撃を加えるべく、拳を振り下ろす。

だが、次元獣は反応し、飛び退いてそれを回避する。

体勢を立て直し、攻撃を仕掛けて来るかと思いきや……ジャガーは背中を向け、突然走り出した。

「ちよっ……逃げた！？」

一気に離れたところで反転。口を開き、青いエネルギー弾を放つて来る。

「おわっ、止めっ……何事！？」

レッドラスがブラックテイラーの前に降り立ち、シールドを構え

て、エネルギー弾を防ぐ。麗央奈は言った。

『戦法を変えて来たんだよ、多分！ 走太を手強い敵として判断したんだ』

「くそっ……もう少しで倒せそうだったのに！」

『ブラックティラーは、攻撃に反応することは出来ても、根本的な速さじゃジャガーに勝てない。だから、遠距離戦に切り替えたんだよ』

「ブラックティラーは飛び道具を持ってない！ 距離を取られたらどうしようも……ひいつ！？」

すぐ横の地面にエネルギー弾が命中し、爆発する。

と、モニターに新しく四角い枠——ウィンドウが現れ、見慣れた顔が映し出される。

『やあ、小林くん。ちょっとピンチっぽい感じかい？』

「神谷先輩！ 今まで何してたんです！？」

『生徒会メンバーと、ジャガーを倒す作戦会議だよ。それはそうと、さっきの盛り返しはなかなか格好良かったよ。ブラックティラーの特殊性に気付いたっぽいね』

「そんなの今はどうでもいいです！ ジャガーが遠距離戦を仕掛けて来て、今凄くピンチなんです！ 敵を倒す作戦を早く教えて下さい！」

『あー、それなんだけどさあ……』

「はい、何です！？」

『無いんだよね』

「……はい？」

『無いの、作戦。とてもじゃないけど、二体じゃ無理。だから、各々で頑張つてとしか言い様が無い。あははー、ごめんちゃい』

「ごめんちゃいじゃなあああ——い！ 何か、何かあるでしょ！？ あると言つて！」

『強いて言うなら、出撃前にも説明したけど、ブラックティラーが鍵だ。ブラックティラーの持つ可能性が、この不利な戦いを勝利に

導いてくれるかもしれない』

「可能性……？」

『そう、可能性。ブラックティラーは、他のゲートキーパーと違って、決まった武装、決まった形態を持たない機体なんだ』

「それってどういう……」

『パイロットのイメージに合わせて、その場で最適な形態に変化するってことさ』

「なっ……そんな便利な能力があるなら、最初から教えといて下さいよ！」

『けれど、その能力を使うってことはすなわち、小林くんが必然的に前に出て戦うってことだよ？ それでも良かったのかい？』

「うぐ……」

それを言われると、走太には反論することが出来ない。

モニター上の源平は、あくまで目を細く、笑顔を浮かべたまま言う。

『さて、どうする小林くん？ この状況を打開するには、ブラックティラーの能力が必要だ。君は今、前に出て戦う勇気があるのかな？』

「ありません！」

走太はきっぱりと答えた。

命を賭けて戦う度胸が自分にあるなら、とつくに麗央奈に昔のこととを謝っている。

源平は細目を見開いて、呆気に取られたような顔をしたが、すぐに細目に戻り、肩をすくめる。

『なるほど、小林くんらしいね。ここは普通、覚悟を決めて「やってみます」と言うところじゃないの？』

「無理です！ 無理無理、絶対に無理！ 俺、初実戦なんですよ！？」

『でも、小林くん。多分、そんな君だからこそ、ブラックティラーは君を選んだんじゃないかな』

「え？」

『ブラックテイラーはね、他のゲートキーパーと違って、とても気紛れな機体なんだ。例えば、四年前は、気に入った人物がいなかったみたいで、誰もパイロットに選ばなかった。だけど、二年前には、僕の先輩である女の人が入ったみたいで、パイロットにした。その先輩は、本当に変わった人だった。ブラックテイラーは癖のある人間が好きなんだよ、おそらくね』

「えーっと、それって要するに、俺が変人ってことですか」

『まあ、そうとも言えるかな』

微笑む源平。彼は言葉を続ける。

『小林くん、いずれにしても、君はブラックテイラーに選ばれた。それはすなわち、ブラックテイラーが君に可能性を見出したってことだ。だから君は、もう少し自分に自信を持ってい』

「自信……？」

『君は自分のことをもっと、信じてみてもいいんじゃないかな』

「自分を……信じる……」

走太はふと、今まで一度でも、自分を信じたことがあっただろうか、と思いつく。

（多分……無いな）

走太は、幼馴染みの少女を見捨てたあの日から、自分のことが嫌いだった。

ヘタレであることを自覚し、それを嫌悪しているのにも関わらず、何もして来なかった自分のことをずっと嫌っていた。

それを今更、どう信じるというのか。

少しも分らない。けれど、信じれば、何かが変わるのだろうか。（俺でも……俺みたいなヘタレでも……あいつを倒すことが出来るのか？）

強く信じれば、ひよっとすると。

そう思った途端、コクピットが軽く揺れた。

「え？」

ブラックテイラーが、ゆつくりと動き出していた。

「ブ、ブラックテイラーさん、なんで動いてるの？ 俺、まだ心の準備出来てないよ？ いや、イメージしたけどさ、ちよつとだけ！ ちよつとだけ、行けるかなって思ったけどさ！ それはあくまでイメージしただけで……」

走太は馬の手綱を扱うように、操縦桿を引くが、ブラックテイラーの動きは止まらない。

「ちよつと待つて！ 俺、本当に無理！ マジで無理だから！ ジェットコースターとか、そういうの駄目なんだって俺！ やる前から怖いのが分かってて、行くのはちよつと……って、おわああああああああつ！？」

「走太！？」

シールドでエネルギー弾を防御し続けているレッドラスの脇を抜け、ブラックテイラーは、ジャガーに向けて、一直線に走り出した。「ひいひい！ 止まって！ お願いだから！ 止まって下さいブラックテイラーさんつつっ！」

向かう先にいるジャガーが反応し、エネルギー弾を連射。

しかし、ブラックテイラーは止まらず、ある攻撃は身体を捻って上手くかわし、ある攻撃は拳で殴り飛ばし、ある攻撃は尻尾で弾き飛ばしながら、突撃して行く。

勿論、走太は一切イメージ等していない。走り出してしまったジェットコースター状態である。

猛然と突き進み、ジャガーに肉薄するブラックテイラー。走太は激しい動揺の中で、次の行動をイメージする。

「何なの、どういうことなの！？ こうしろってこと？ やるよ！ やればいいんでしょ！？ おらあああ！」

勢い良く拳を振り下ろす。ジャガーは回避。行き場を失った拳は、ベクトルそのままに地面を破砕する。

再び距離を開けるべく、駆け出すジャガー。

走太の脳内は、次の行動を瞬時に選択していた。

「もう弾幕に突っ込むのは嫌だあああつつつ！」

走太の取った選択肢は『追走』。理由は簡単で、このまま距離を取られたら、再びエネルギー弾の連続攻撃に晒されるから。追走することで、少なくともジャガーは逃げることに専念せざるを得なくなる。

つまり、走太はジャガーを倒したいとかそういう意図で追うのは無く、攻撃が怖いからこそ追い駆けるのであった。

ただ、当然ながら、ジャガーの方が足は速い。

追走するものの、あつという間に距離は開いて行く。

「くっそ、無理！ 分かってたよ、決まってんじゃない！ 絶対に追いつけない！」

『諦めるのはまだ早いよ、小林くん』

様子を見守っていたらしく、モニターの源平が言う。

「神谷先輩、でも、見ての通り、スピードのスペック差が圧倒的過ぎて！」

『そんなことは無い。言っただよ、ブラックティラーはその場で最適な姿に変化することが出来る』

「どうやって!?」

『イメージするんだ。あいつに追いつく為には、ブラックティラーの身体をどう変化させたらいいか。君ならどう考える?』

「ジャガーに追いつく……」

これがロボットアニメだったら、どうだろう。

速い敵に追いつく為の追加武装は――

「ブースター、でかいブースター！」

そうイメージした瞬間、コクピット内に変化が起きた。『創造開始』という文字がモニターに表示され、光の線のような物が、モニター前方から後方に走る。

走太がモニター後方を見やると、そこにはブラックティラーの尻尾があり、光の線はモニターの外へ脱し、尻尾上のモールドを駆け巡る。

尻尾の装甲が変形した。パズルを組み替えるように装甲の中から新たな装甲が展開、明らかに質量を無視して、装甲は肥大化、長方形を模って行く。やがて、尻尾の先端、長方形の一面から噴射口らしき物が迫り出す。

そうして、ロボットアニメ好きな走太が見て分かる程に、分かり易い、ミサイルのようなブースターが完成する。

「でも、何故に尻尾!？」

そんな位置にブースターを付けてしまったら、この後点火した時に――

ボツツツ!

「……って、言ってる傍からブラックティラーさん点火したあ!？」
噴射口から炎が溢れ出し、尻尾が炎の勢いに耐え切れず、激しく荒らぶる。上下左右に荒らぶりまくる。

「ちよっ、中止! 中止してブラックティラーさん! そのブースターじゃキツイ! 決まった一方向に進むの無理! ……って、炎の勢いが……のおおおおおおっ!？」

ブースターの炎が勢いを増し、とんでもないことが起こった。
走っていたブラックティラーの身体が、宙に浮いた。走っていた方向に、ブラックティラーはまさかの低空飛行を始めたのだ。

「嘘っ!?! 飛べんの!?! なんで!?! 奇跡!?!」

尻尾の先端で、ねずみ花火みたいに荒らぶるブースター。

モニター前方で米粒みたいになっていったジャガーとの距離が急速に縮まって行く。ぐんぐん縮まって行く。

「マジでか……!」

走太はふと、不思議な高揚感に包まれ始めた。

「追い付ける……!?!」

先程までとはまるで逆。あれ程速かったジャガーの走りに、自分が付いて行けている。

いや、距離が縮まっているということは、スピードで今、上回ったということ。

そう思ったら、ドキドキが止まらない。

ジャガーが顔だけ振り向かせて、ブラックティラーを撃ち落とそうとエネルギー弾を放って来る。

だが、当たらない。いや、当たったとしても、今のブラックティラーなら。

走太は操縦桿を強く握った。イメージはただ一つ。

ブラックティラーが右拳を握り締め、大きく振り被る。

距離が近づく。もう二十メートルも無い。

勿論、怖かった。凄く怖い。

だけど、その怖さを超越して、走太は今。

目の前にいる次元獣を、

「うおおおおおおおおおおおおおッッッ！」

ブラックティラーが思いっきり右腕を振るう。

ブースターの勢いも加わり、一発のミサイルと化した拳が、ジャガーの腹部に炸裂する。

めり込み、亀裂を走らせ、それだけに留まらず、腹部左から右にかけて、漆黒の腕が深々と突き刺さり、貫通する。

ジャガーが断末魔を上げ、ブラックティラーはブースターの噴射を解除。

バランスを崩し、貫いたジャガーと揉みくちやになって地面を激しくバウンド、ブースターが残した慣性で、数キロに渡って、幾つもの建物を薙ぎ倒しながら転がる。

最後に、ジャガーの身体がスパークし、爆散。

御門市の南方に、大きなキノコ雲が上がった。

「これで、今月五体目だな」

御門学園の薄暗い地下司令室で足を組んでいる金剛雅は、大画面のモニターに映ったキノコ雲を見ながら、言葉を零す。

「歴代最高記録更新だね。いや、最低記録と言った方がいいのかな」
雅の横に立ち、同じくモニターの様子を見守っている神谷源平が言った。

彼らの周りでは、通信オペレーターである蓬菜菜美子や、その他の生徒会役員達がパソコンのキーボードを高速で操りながら、情報収集に当たっている。

「ジャガーの反応、消失！」

「小林先輩のブラックティラーは！？ 無事なんですか！？」
声を張り上げる菜美子。

生徒会役員の一人である男子生徒が、パソコンに多数のウィンドウを開いて、確認を急ぐ。

「待って！ ブラックティラーの反応は……あつた！ 爆発地点から千八百メートル東！ 高層ビルの中段に上半身から突き刺さっている！ 多分、爆発で吹き飛ばされたんだ！」

「紅坂先輩、聞こえますか！？ 菜美子です。爆発があつた地点から千八百メートル東のビルに、ブラックティラーの反応を確認！ 急いで救出に向かつて下さい！」

慌しい室内の様子を横目に、雅は携帯電話を開き、液晶画面の日付を見る。

「今日は五月十九日か」

「あれから丁度、一週間だね。出現するのに少しばかり間は空いたけど、それでもまだ十九日だ。金剛——」

源平は険しい顔付きで、細眼を見開く。

「僕も少しばかり、嫌な予感がして来たよ」

「神谷、シラシオンの修復が終わるには、後どれくらい掛かりそう

なんだ？」

「残念ながら、まだ半月以上は掛かるね。けど、いざとなったら、すぐに出撃するよ。たとえ、完全じゃなくてもね」

「そうか。ならば、私も——」

金縁眼鏡の位置を直し、雅は源平を見て、言った。

「キーパーアシストの代表として、出来る限りのことをするとしよう。何かが起きる前にな」

金色の紋章を額に浮かべ、仄かに輝かせて。

「……はっ！」

走太が目覚めると、見慣れない天井が視界に入った。

左右を見回し、薬品棚や、白いカーテン、窓の外に広がる景観で、自分が寝かされている場所が、御門学園の保健室にあるベッド上であるらしいと理解する。

「……俺、生きてる？」

ぱちぱちと瞬きする走太。自信の手を見て、開いたり閉じたりする。

四足歩行の次元獣『ジャガー』と戦い、ブラックテイラーの尻尾をブースターに変形させ、追いついた末、その顔面に向けて、拳を叩き込んだところまでは覚えている。

ただ、その後、どうやってブレーキを掛けるかまでは全く考えて無く、ジャガー諸共地面を転がって……そこで記憶が途切れている。

（でも、こうして生きてるってことは、ジャガーを倒せたのか？）と、下腹がやけに涼しいことに気付く。何というか、スースーする。

「つか、掛け布団が無……」

顎を引いて、下腹の方を向いたところで、走太はそこにいた人物

と目が合った。

燃えるような赤毛を、後頭部で結わえた少女。ここ一週間で、再び会話を交わすようになった幼馴染み。紅坂麗央奈。

彼女の右手には、捲った白い掛け布団が握られており、もう左手には走太のワイシャツの裾が摘まれている。

つまり、分かりやすく言うと、麗央奈は走太のワイシャツを捲つて下腹を露出させた状態で、走太と視線を合わせ、綺麗な瞳を大きく見開き、石像にでもなったかのように固まっていた。

「えーつと……麗央奈さん？」

走太は状況が理解出来ず、目をぱちくり。

麗央奈はふるふる両手を震わせ、次第に顔を赤くして行く。

走太は訊いてみた。

「……俺のお腹に、何か……？」

途端に、ぼつと顔を深紅に染める。肌と髪の色が見事に一致。

彼女は両手の平を前に突き出し、ぶんぶんと激しく上下させた。

「ち、ちち、違うんだよ走太！これには色々理由があつて……！」

「！」

「あつ、そうなんだ」

まあ、聡明な麗央奈なことだ。理由も無くこんなことはしないだろう。

走太は彼女に尋ねてみる。

「それで、理由って？」

「え」

ビクッと赤いポニーテールが揺れる。何故か顔を引きつらせながら、

「そ、それはその、走太の紋章が……」

「紋章？」

「う……」

「う？」

「うあああつつつ！」

麗央奈は突然大声を上げると、自らの頬つぺたに右拳でコークスクリューを炸裂させた。

「ちよっ、麗央奈さあああ——ん!?」

「うああああ!」

「待って、落ち着いて! どうしたのいきなり!?」

今度は左手で自身にコークスクリューを当てようとしているので、走太は彼女の手首を掴んで、それを制す。

麗央奈はぼろぼろと涙を零した。

「ふぐっ……紋章は言い訳なんです! ひっく……本当はただのスケベ心なんです! ううっ……つい魔が差したんですう!」

「えと……色々と分からない部分はあるんだけど、とりあえず、紋章というのは……?」

「こ、これです!」

顔を涙でぐしゃぐしゃにしながら、自身が着ているセーラー服の裾を掴み、ぱつと勢い良く捲くる麗央奈。

「いやあああッ!?!」

走太は思わず女の子みたいない悲鳴を上げて、顔を両手で覆った。

「この、お腹にある赤い紋章……!」

「分かった! 紋章でも何でもいいから、お腹閉まって! 早く隠してえええ!」

「え? あ……きゃあああッ!?!」

我に返ったのか、麗央奈は制服の裾を下ろして、走太に負けじと大きな悲鳴を上げる。

彼女はベッドの横の床にぺたんと座り込み、お腹を押さえながら、怒った様な顔を向けて来る。

「……見た?」

「見てない見てない!」

走太は必死に首を横に振る。

「本当に?」

麗央奈は、今にもまた泣き出しそうである。いや、顔は既に涙で

酷いことになっちゃってるけども。

「本当！ マジ本当！ おへその部分にある赤い紋章なんて、これっぽっちも、微塵も見えてない！」

「……なんでおへその上に紋章があるって知ってるの？」

「あ……」

「……やっぱり見たんだ」

ゆらりと床から立ち上がる麗央奈。普段は綺麗な瞳からは光が消え、虚ろになっている。まるで死んだ魚の目だ。

走太は底知れぬ恐怖を感じ、理由も無く、首を横に振りながら、
「い、いや、違うんだよ麗央奈さん。不可効力だったんだよ。なにせ、いきなりだったしね？ 咄嗟に顔は隠したけど、ちらっとだけ見えちゃったんだよ？」

「ちらっとだけ？」

死んだ魚の目のまま、首を傾げる赤毛の幼馴染み。

走太は勢いよく頭を下げた。

「すみません、嘘です！ 本当はガン見でした！ 両手で顔隠してたけど、実は指の隙間からガッツリ見てました！」

「そうなんだ。そうか……ガッツリ見られちゃったんだ。はは……ははは……」

すると、麗央奈は不気味な笑い声を上げながら、保健室の窓際へと歩き出す。

「れ、麗央奈さん……何を……」

ゆらゆらとゾンビのように肩を揺らしながら、彼女は保健室の窓際に立った。

鍵を開け、ガラツと窓を開ける。やや西に傾いた日差しが彼女を照らし、赤い髪を美しく輝かせ、また午後のゆるやかな風が、髪と保健室のカーテンを揺らす。走太にはその光景がとても眩しく見えた。

ふと、麗央奈が振り向いて、先程までの死んだ魚の目とは打って変わって、ふわっと柔らかく、天使のような微笑みを浮かべて、言

った。

「走太」

名前を呼ばれて、走太はドキツとした。

そして、麗央奈はごく自然な動作で、窓枠に片足を掛けた。ブライドとか、罪悪感とか、恥ずかしさとか、何もかも捨て去った、それはもう天使のように素敵な笑顔で。

「私ね、ここから飛んで、赤いトマトになるんだ」

「ちよつ、落ち着いて！ 麗央奈さん、ここ一階！」

なにせ場所が保健室である。しかも窓の外側は芝生になっているので、多分どんな落ち方をしても死ねない。

「止めないで走太！ 私は……私はトマトになるの！」

「無理だって！ そんなことしても、せいぜい恥ずかしくなって、顔がトマト色になるだけだよ！」

「いや、角度と速度を付けられようにか……！」

「ならないよ！？ つーか、平気な顔してるけど、どう考えても頭の中混乱極まつてるでしょ麗央奈さん！」

「だって……だってだって、魔が差して走太のお腹を見た拳句、今度は走太に自分のお腹を見られて……しかも走太はガン見で！」

「すみません、マジすみません！ ガン見たことは謝ります！」

でも、仕方ないじゃん、俺だって健全な男の子だもの！ あんな白くて綺麗なお腹出されたら、普通の男子高校生は目が追っちゃうよ！？」

「き、綺麗……」

かあああああつと顔を赤くし、俯く麗央奈。

窓枠に掛けていた足を下ろし、左手と右手の人差し指を合わせて、もじもじする。

「そ、走太は……」

「な、なに？」

「走太は……お腹の綺麗な女の子は……好き？」

「へ？ あ、ああ、うん。そりゃあ、好きですよ。しっかりとくび

れつつも、女の子特有の柔らかいラインが出てるお腹は、健康美
て感じで、凄く素敵だよな」

「そ、そうなんだ。えへへ…… お腹見られて恥ずかしかったけど、
走太が好きだって言うなら、いいや」

そう言うてはにかみながら、麗央奈はベッドの横に戻って来る。

（いいんだ……）

よく分らないが、お腹を褒めたことで、平常心を取り戻してく
れたらしい。

走太は、ほっと胸を撫で下ろし、息を吐く。

「……でも、麗央奈の言う、紋章ってのは、何なんだ？」

「えっとね、キーパーマスターの証みたいな物で、ゲートキーパー
に選ばれると同時に身体のだこかに現れるんだ。レッドラスなら赤
色だから、ブラックテイラーの紋章は多分、黒色だと思うんだけど、
ぱつと見、走太の身体にはそれが見当たらないから、どこにあるん
だろうって思っ、気になって……」

「結果、自分と同じお腹にあるんじゃないかと推測して、ワイシャ
ツの裾を捲ってみた」

「プラス、ちよつとしたスケベ心で……」

恥ずかしそうに、手で顔を隠す麗央奈。

「スケベ心って…… 女子のスカートを捲る小学生の男子じゃないん
だから……」

走太の中にあつた麗央奈の聡明なイメージが、どんどん崩れて
行く。

あれ、おかしいな。目の前にいるのは、学園屈指の美少女のはず
なのだけだ。

「それにしても、ブラックテイラーの紋章か…… そんなのどこに……」

…… あっ！

「どうしたの、走太？ ひよつとして、何か思い当たる節があつた
？」

「…… うん、あれだ。俺、その紋章がどこにあるのか、知ってるわ」

一週間前、中間世界のことを知ったあの日に、風呂場で見つけたやつだ。多分、ゲートキーパー関係なんだろうなあと思い、後で源平にでも訊こうと保留したまま、完全に忘却の彼方へと追いやっていた。

「どこにあるの？」

「ええっと、女の子には少々辛い位置に……」

「言い辛い位置？ それってまさか——」

麗央奈は、ぽつと顔を上気させながら、

「おちんち」

「アウトオオツツツ！ 麗央奈さんアウトオオツツツ！」

言い切る寸前で大声を上げて、遮る走太。

ゼエゼエと息を切らしていると、麗央奈は肩を落とす。

「なんだ、違うんだ……」

「あれ、なんかガツカリしてます麗央奈さん？」

「え？ まさかそんなわけないよ！ ……で、走太の紋章はどこに？」

「妙に興味津々なのが引つ掛かるんですが……まあ、とにかく、言うのが恥ずかしい位置に……」

「やっぱり、おちんち」

「違うよ！？ そこだけは違う！ つーか、お願いだから保って！ ヒロインとしての体裁を保って！」

どうにもキヤラ崩壊が激しい紅坂麗央奈である。

走太としても、麗央奈にあの言葉だけは口にさせられないので、恥ずかしさを押して、言うことにする。

「……お尻だよ」

「え？」

「だから、お尻にあるの！ ブラックテイラーの紋章！ 尾てい骨部分に重なるようにして。多分、ブラックテイラーは尻尾が特徴的な機体だから、尾てい骨のところに紋章が現れたんだと思う」

麗央奈の赤い紋章がへその部分にあるのは、レッドラスの必殺武

器がそこにあるからではないか。あくまで推測だけれども。

ふと、急に真面目な顔になる麗央奈。

「あのね、走太」

「な、なんだ？」

「走太……一応、私の紋章は見たよね？」

「あ、ああ。見たよ、赤い紋章」

「それって……」

「それって？」

ごくりと唾を飲み込む走太。紋章が見えると、何かあるのだろうか。

麗央奈はごくごく真面目な口調で、言った。

「それって、凄く不公平だと思うんだ」

「へ？」

「冷静に考えて、私は走太に紋章を見られたのに、走太は私に紋章を見せないなんて、余りにもずるいと思わない？ 不公平だよ」

「は？」

「だからね、私は走太の紋章を見る権利があると思うんだよ」

「いや、言ってる意味が良く分からないんだけど……」

「そう、おかしくない。私は走太のお尻を見てもおかしくないんだ。だって、キーパーマスターの仲間だし。幼馴染みでもあるし。だからね？」

「あれ、気のせいかな、両手がワキワキしてますよ麗央奈さん？ なんか目が怖いんですけど！？ つーか、幼馴染みは関係なくね！？

ちよっ、ベルト外さないで！ 今日のトランクスは地味なの！

そっだ、先生！ 保健の先生はどこですか！？ 紅坂麗央奈さんが乱心してます！ ちよっ、麗央奈さん息荒いよ！？ 待つて待つて待つて！ 知ってる！？ 思春期の男子って意外と繊細な心持つてて、幼馴染みと言えども女の子にお尻見られるのは……ちよっ、待つ……いやああああああああアッ——！」

五分後、麗央奈はベッドに腰掛けながら、とってもツヤツヤなお肌をしていた。

少し前まで、一階の窓から飛び降りて赤いトマトになろうとしていたとは思えない程、爽やかな面持ちで、彼女は言う。

「いやー、ありがとね、走太。恥ずかしい場所にある紋章をわざわざ見せて貰っちゃって」

「は、はは……うん。麗央奈が納得してくれたなら、俺はそれでいいんだ」

ただ、見せたというより、無理矢理見られたような気がしてならない。

走太は何とか笑顔を作ってみせるものの、心の内ではしくしくと泣いていた。

と、麗央奈は保健室の時計の方を見やる。

走太も同じく時計を確認すると、時刻は午後の一時三十五分を指し示そうとしていた。少しして、校内にチャイムが鳴り響く。お昼休みの終わりを告げる予鈴だ。

「全然気付かなかったけど、今ってお昼休みだったのか」

「次元獣が中間世界に現れたのは、二時間目の授業の途中だったからね」

「じゃあ、俺って、気を失ってから割と眠ってたんだな……。三時間目と四時間目の授業をサボっちまった」

「大丈夫。次元獣のせいで欠席になった授業に関しては、たとえ出席日数が足りなくなっても、学園側が融通してくれるシステムになっているから」

そういえば以前にも、授業中に校内放送で呼ばれて教室を出て行く麗央奈を何度か見たことがあった。

「そうか、あれは次元獣と戦っていたからなのか……」

「うん？　なに、走太？」

「ああ、いや、麗央奈って、あんな怖い連中と今まで戦って来たんだなって思ってたさ」

「私だって、最初は怖かったよ」

「え？」

「でも、私がキーパーマスターに選ばれたのは、きっと何か意味があるんだろっし、それに……」

麗央奈がその大きな瞳に走太を映す。

「麗央奈？」

「う、ううん、何でもない。とにかく私は、今日まで出来る限りの事をして来ただけ。一ヶ月くらい前に一度、ピンチにもなったしね。私は全然、大したことないよ。それに今日だって、走太に助けられた」

「俺が？ いや、俺はただ、ジャガーに狙われて、自分が死にたくなかったから……」

「それでも、ピンチに陥っても、走太は自分の力で戦って勝った。私は、初実戦の走太のサポートも上手く出来なくて、ただ横で見るだけだった」

視線を床に落とし、悔しそうに唇を噛む麗央奈。

「それはたまたま、今回の敵とレッドラスの相性が悪かっただけじゃないか。別に麗央奈が気を落とす必要なんかない」

「ありがとう。でも、たとえ相性が悪くても、その分頭を使えば、私にも何かが出来たはずなんだ。だから、今日のことはやっぱり、反省しなくちゃいけないと思う。一歩間違えたら、走太は気を失うだけじゃ済まなかったかもしれない」

「麗央奈……」

彼女はぐっと拳を握り締める。ベッドから立ち上がって、自らに気合を入れるように、両手で頬つぺたをピシヤリと叩いた。

「うん、走太、私もっと強くなるよ。今度次元獣が現れた時は、私が走太を守ってみせる」

「あ、ああ」

「じゃあ、そろそろお昼休みも終わるから、私、教室に戻るね」

廊下の方へ歩き出そうとする麗央奈。

「あつ、だったら俺も。気を失ってただけなら、身体に問題は無いわけだし」

後を追って、立ち上がろうとする走太だが、麗央奈に制される。

「駄目だよまだ。一応、保健室の先生に診て貰わないと。走太は先生が来るまで、保健室で待機。分かった？」

「でも、授業が……」

「それなら後で、ノートを見せてあげるよ。友達に二時間目のノートを見せて貰って、写してあるし。三時間目と四時間目は私、授業に出たから。えっと……それで……」

言い辛そうに手をもじもじさせる麗央奈。最近、彼女のこういう仕草をよく見かける気がする。

走太は首を傾げる。

「ん？」

「走太は……さ、今日の放課後、暇かな……？」

「ああ、ロボット部の活動がなければ、後は特に何も」

ちなみに、ロボット部というのは、キーパーマスターに選ばれた生徒が所属する部活のことだ。表向きにはロボット好きが集まるマインナーな部活となっているが、実際は次元獣の対策会議や、ゲートキーパーの操縦訓練を主な活動内容としている。

ブラックティラーのパイロットになったことで、走太もまた、半ば強制的にロボット部の一員とさせられていた。

「それなら大丈夫。今日は部活無しで、神谷先輩が、今日はよく頑張ったから、家に帰ってゆっくりと休めって」

「そうなのか……残念だ。言いたいことが山程あったのに」

「で、でさ、もし放課後暇ならさ……その、二人で一緒に勉強しない？」

「それは助かる！ 麗央奈は成績が良いから、ノートを写すついで

に、分らないところがあつたら教えてくれると嬉しい。場所はど
うする？ 俺の部屋でいいか？」

「う、うんっ」

麗央奈は、こくこくと首を縦に振る。

「じゃあ、決まりだな」

「えへへ」

彼女は照れたように微笑むと、「それじゃ、先に教室に行つて
ね！」と手を振って、保健室を去って行った。

走太は一息ついてから、再びベッドに仰向けになる。

「俺を守ってみせる……か」

麗央奈が先程、真面目な顔で口にしたその言葉が、妙に頭にこび
り付いている。

自分を守るうとして失敗した少女は、成長し、いつの間にか「走
太を守る」とまで言うようになった。

今や立場が逆だ。

「強くなったよな、麗央奈は……」

同時に最近、麗央奈の女の子らしい一面も沢山見ている気はす
るけど。

それでもやっぱり、紅坂麗央奈は強い。

天井に向けて手を伸ばす。目標は保健室の蛍光灯。ギリギリまで
伸ばして握り締めるが、当然、何も掴めない。

（俺の方は、あの時から何か成長したのか……？）

今ここで自分が生きているということは、ジャガーを倒したとい
うことだ。

けれどあれは、その場の流れと勢いで倒しただけだ。ブラックテ
イラーが勝手に動いて、神谷源平にそそのかされてやったことに過
ぎない。走太が自ら決意をしてやったわけではない。

ゲートキーパーと次元獣のことを知り、麗央奈と再び交流を持つ
ようになってから一週間。走太は、過去に何も無かったかのように
麗央奈と接している。

昔、彼女を見捨てた事実など、無かったかのように。

一週間前までは、隙を見て謝ろうと思っていたが、今はもう、謝らなくてもいいんじゃないかとさえ思い始めている。

麗央奈とごく自然に話せて、彼女の笑顔を見ることの出来る今が、余りにも楽しくて、幸せで、余計なことをして、壊したくないと思っ
っている自分が居るのだ。

麗央奈は強くなることを望んでいるのに、走太は現状維持を望んでいる。

もしも走太が謝ろうと昔の記憶を掘り返した時、麗央奈は今と変わらず自分と接してくれるのだろうか。

わずか一週間前のことなのに、お互いを避けていた時のことを想像して、背筋に言い知れない寒気が走った。思わず、自分で自分の肩を抱く。

（嫌だ……俺は……もう麗央奈と話せなくなるのは……）

走太はもはや、一週間前の自分には戻れなかった。

幼馴染みと一緒に居る事の温かさを知ってしまった今、一週間前までの凍てついた日々に戻ることは、とてもじゃないが堪えられない。

（そんなことになるくらいなら俺は、謝らなくていい）

たとえ情けなくても、自分が一生罪悪感を抱えたまま生きることになっても、彼女が今、自分に微笑み掛けてくれるなら、それで。

その時、保健室のドアが開く音がした。

「お邪魔します」

仕切りのカーテンで遮られていて見えないが、足音がこちらに近付いて来る。

やがて、カーテンが開き、そこから顔を覗かせたのは、

「よっ、走太。気分悪くなって、保健室で休んでるって聞いたけど、元気にしてるか？」

ツンツン頭で黒縁眼鏡、無駄にルックスの良い悪友、崎原宮治であつた。

五時間目の授業の開始を告げる本鈴が鳴っている。

しかし、宮治は教室に帰る気配を見せず、仕切りのカーテンの一部を取り払い、走太が寝ている横のもう一つのベッドに、仰向けになる。

走太は彼に尋ねた。

「お前、授業始まったけど、いいのかよ」

「ん？ ああ、いいのいいの。お前の見舞いついでにサボる気だから」

「だらうな」

「それより、本当に具合悪そうだな。お前、顔青くね？」

「別に。大したことねえよ、こんなの」

身体の具合が原因では無いのだが、悩んでいるからとは言えない。特に、この宮治には。

しかしこういう時、この男には大抵見透かされている。

「最近さー、麗央奈ちゃん、よく笑うようになったよな」

「宮治にはそう見えるのか？」

「見えるね。以前までとは大違いだ。お前と会話するようになってから、麗央奈ちゃんは笑顔が多くなった」

「お前に麗央奈とのことを話した覚えはないんだけど」

「はっ、そんなもの！ 学園一の情報屋である俺には無力無力！ 舐めたらあかんよ走太くん」

「さいですか」

男同士で二人して、保健室の天井を見ながら話す。

「でだ、走太。俺は不思議で仕方が無い。再び麗央奈ちゃんと仲良くなれた。なのになんで、お前はそんな悩みを抱えた面してる？ 念願叶って、今や幸せの絶頂期なはずだ」

「確かに……幸せだよ。この上無いくらいに」

「だったら何故」

「今まで味わったことの無い幸せだから、壊れるのが怖いんだよ。いつ壊れるか分からない。俺は自分で壊すことも出来ない。でも、前みたいのは嫌だ」

「……つまり、お前はどん詰まりなわけだ。前に進むことも出来ないければ、後ろに戻ることも適わない」

「そうだよ。悪いか」

「選択なんて、人それぞれだ。良いか悪いかなんて、見方次第でどうにでも変わる。俺は走太がそれで良いって言っなら、口出しはしないさ」

宮治はいつも、走太がヘタレであることを、情けないとは言わない。何かとちょっかいを掛けて来る癖に、押せばあっさりと退く。いつもそうだ。

走太が目を瞑って黙り込んでいると、宮治は言う。

「走太は、麗央奈ちゃんが大事か？」

「は？ 何を突然……」

「そうか、大事じゃないのか」

「そんなわけあるか！ 大事じゃなきゃ悩んだりなんかしない！」

「でも、走太は、自分と麗央奈ちゃんの二者択一になったら、自分を取るよな、絶対」

「え？」

「例えば今、目の前で麗央奈ちゃんが不良達に襲われてたとしたら、走太は迷わず助け出しに行くことが出来るか？」

「それは……」

考えてなかった。今もし、あの時のような状況が訪れたら、自分は――。

「すぐに答えられないってことは、麗央奈ちゃんよりも自分の方が大事なんだな、お前は」

走太は言葉を返せない。

「走太。お前、本当は、麗央奈ちゃんのことなんて、ちっとも考え

てないんじゃないか？」

ただ保健室の天井を見上げることしか出来ない。

「お前は自分のことしか考えてないんじゃないか？ 自分が、痛みや辛さを感じたくないだけなんじゃないのか？ たとえそれで――」

宮治は告げる。

「麗央奈ちゃんを傷付けることになったとしても」

「お、俺は……」

何か反論しようと思った。しかし、何も言葉が浮かんで来ない。

「そんなこと……！」

起き上がって、隣のベッドを見る。

宮治は瞳を閉じ、静かな寝息を立てて、眠っていた。

「俺は……」

彼女を見捨てたあの日から、一度でも彼女の気持ちを考えたことがあっただろうか。

掛け布団を握る手に、力が入る。

走太はあの日から、自分を守ることに精一杯で。

麗央奈も自分と同じ、十一年の凍てついた刻を過ごしていたのだということ、すっかり忘れていた。

第三章 幸せの麗央奈（上）

紅坂麗央奈は昔、年齢にしてまだ五歳の時、とても気が小さかった。

知らない人とはなかなか打ち解けられなかったし、言いたいことは何一つ言えない。おかげで、幼稚園でも友達なんてものは全くと言っていい程に出来なかった。

麗央奈には、よく顔を合わす男の子が居た。家がたまたま隣同士で、母親同士の気が合ったこともあって、その男の子と会う機会が多かった。

しかし、麗央奈は人見知りが災いして、男の子と会話を交わすことすらままならない。いつも母親の後ろに隠れて、嵐が過ぎ去るのを待つように、男の子から視線を逸らすことしか出来無かった。

とはいえ、彼女の母親としては、友達を作って欲しいという気持ちがあったのだろう。麗央奈はある日、母親に無理矢理引き離され、その男の子と二人きりにさせられた。

「麗央奈の部屋に案内してあげなさい」と言われたのだ。耳を疑った。信じられなかった。自分の部屋に同年代の男の子を上げるなど、怖くて仕方が無い。

麗央奈に出来たことは、男の子を自分の部屋に案内した後、隅でウサギのぬいぐるみを抱え、じっとしていることだけだった。

（ワタシのへや、めちやくちやにされちゃうのかなあ……）

そんなことを考えながら。

男の子は部屋の中央に正座し、興味津々といった様子で、部屋を見回していた。

ふと、男の子と目が合う。麗央奈は慌ててウサギのぬいぐるみに顔を埋め、隠す。

「あー、えっと……」

男の子が口を開いた。

「ごめん。はずかしいよな……へやをじつとみられたら。オレだつてはずかしいもん」

麗央奈はぬいぐるみに顔を埋めたまま、その言葉を聞いている。「そもそも、カアちゃんたちがおかしいんだよな。コドモだからって、みんながみんな、すぐになかよくなれるとおもっててさ。そんなカンタンじゃないっての」

男の子は、そこで話すのを止める。

麗央奈は少しだけ顔を上げて、男の子の様子を窺う。何やら気恥ずかしそうに、人差し指で頬つぺたを搔いている。

「あ、あのさ……」

男の子は麗央奈の方へ向き直り、言った。

「し、しつもんしてもいいか!？」

「ひっ!？」

いきなりだったので驚き、身体が縮こまる。

男の子は慌てたように、手を振り、

「す、すまん! こわがらせるつもりなんかなくて……ただ、どうしてもその、きになることがあって……! オマエをはじめてみたひから、きになりすぎて、ねむれなくて。かといって、こんなことカアちゃんにきいたら、いろいろとからかわれそうで……! たのむ、おしえてください!」

ついには土下座までする。

麗央奈は依然人見知りが発動しており、喋ることが怖くて仕方が無いのだが、男の子は顔を床に貼り付けたまま、一向に顔を上げようとしない。

自分が何か言わなければ、おそらくこの男の子は顔を上げることはないだろう。そう思ったら、せめて話くらいは聞いてあげてもいいかもしれない、という感情が、麗央奈の中で渦巻き始め、

「……し、しつもんって?」

やがて、物凄く上擦った声ながらも、言葉を発することに成功した。

男の子は、ぱつと顔を上げて、とてつもなく嬉しそうな顔をする。
「こたえてくれるのか！」

麗央奈はこくりと頷く。

彼は「やった！」とガッツポーズをしてから、

「それでだな、オレがききたいのは、どうして——」

自分の頭に触れる仕草をする。

「オマエのカミがアカいイロをしてるのかってことなんだ」

ああ、やっぱりそのことか、と麗央奈は思った。

麗央奈には生まれた時からの強いコンプレックスがあった。周りの子供達とは明らかに違う、燃えるように赤い髪。ペンキを丸ごと頭にぶちまけたような、原色に近い赤。

一度道を歩けば、大人も子供も皆、好奇の視線を彼女に向けて来る。

母親に頼んで、何度黒色に染めようと思ったことが分らない。

麗央奈は自分の赤い髪が、大嫌いだった。

ぎゅつとウサギのぬいぐるみを抱き締め、彼女は俯く。

「やっぱり、きもちわるいよね……」

「え？」

「このアカいカミのけ。こんなカミのイロじゃなきゃ、ワタシだって……」

他の子と何の隔たりもなく遊べて、友達だって作れるはずなのに。
ところが、男の子は言った。

「そんなことねえよ」

麗央奈は顔を上げる。男の子は至って普通の表情で、続ける。

「オマエのカミ、すっごくキレイなイロじゃねえか。なんだっけ？」

ええつと……ホウセキでアカいのあるじゃん？ んー……あつ、

あれだ！ ルビー！ ルビーみたいにキラキラしててさ、オレ、オマエのことはじめてみたとき、まるでエホンのナカからでてきたオヒメサマみたいで、すっごくカワイイって……あ」

慌てて口元を押さえ、顔を赤くする男の子。

麗央奈も自分の頬が熱くなるのを感じる。

「か、カワイイ……」

「あっ、いや、ちがうんだ！ いまのは……」

「ちがうの？」

不安になつて、首を傾げる麗央奈。

「いや、ちがわない！ オマエのアカいカミはきもちわるくなんか
ないぞ！ オレがいたいのはだな、そういうイミじゃなくて、つ
いカワイイっていつてしまったことについてであって……って、こ
れじゃあ、カワイイっていつたのをみとめてるようなもんじゃん！
いや、いつたけどさ！ ああもう、とにかくオマエのアカいカミ
はすごくキレイだってこと！」

男の子は言い切つてから、恥ずかしそうにそっぽを向く。
生まれて初めてだった。自分の赤い髪をここまで褒めてくれた人
は。

両親にさえ「髪のことを馬鹿にされても負けちゃ駄目よ」と言わ
れたことはあつても、綺麗だと褒められたことは無かった。

宝石のルビーみたいだなんて、お姫様みたいだなんて、言つてく
れた人は今まで誰もいなかった。

「あ……ありがとう」

嬉しくて、自然と笑顔が零れる。

男の子がそれを見て、驚いたように目を丸くする。

今度は麗央奈が、はつとなつてウサギのぬいぐるみで顔を隠す。

頬だけじゃなくて、耳まで熱くなるのが分かった。

「オマエがわらつてるの、はじめてみた」

「か、カミのけをほめられたのはじめてだから、うれしくて、それ
で……」

「えっ、そうなのか？ おかしいな、オレはキレイだとおもうんだ
けどなあ」

「そ、そんなこと……」

「あと、イマしかったけど、わらつてる力才もすごくいいとおもう。

これだけはジシンをもっていえるぞ、オレは！ オマエのエガオは
すごくいい！ いつもこまったような、おびえたような力オしてる
けど、もったいない。オレはもっとわらえばいいとおもう！ ……
あ、いや、オレがキラいだから、いつもそんな力オしてるのかもしれないけど。そうだったら、ごめん」
「え？」

麗央奈は顔を上げる。

「いや、オマエさ、オレをみると、すごくおびえた力オをするだろ？ ひよつとしてキラわれてるのかなあ、っておもったり、おもわなかったり。でも、オレとしては、その……」

後ろ頭を掻き、男の子は一旦、深呼吸をして、

「できるなら、オマエとトモダチになりたいなあ、とかおもってた
りするんだけど……」

ちらつと横目で麗央奈の様子を伺いながら、言った。

麗央奈は男の子が口にした言葉の意味を理解するのに、数十秒を
要した。

「トモダチに……なってくれるの？」

「だ、ダメかな？」

「でも、でもワタシ、カミのけアカいし」

「うん、それはみればわかるけど」

「それに、ひとみしりだし」

「あつ、ひよつとしてオレとはなそうとしなかったのは、それがげ
んいん？ なんだ、よかった。キラわれてるわけじゃなかったんだ」

「ワタシ……ワタシは……」

視界がぼやけた。目頭が熱くなって、ポロポロと涙が零れた。

胸が一杯になって、口元が下に引きつった。堪えようとしても、
拭っても、抑えようのない感情と涙が溢れて来る。

我慢出来なくなつて、麗央奈は声を上げて、泣いた。

男の子が驚き、慌てた様子で、「えっ、なくほどイヤなの！？」

と言つが、麗央奈はただ、泣き声を上げることしか出来ない。

やがて、騒ぎを聞きつけたのか、階段を駆け上がる音がして、男の子の母親と麗央奈の母親が部屋に入ってくる。

泣いてる麗央奈の姿を見て、男の子の母親が目を尖らせ、男の子に向かって怒鳴った。

「くおらっ、このクソガキ！ なに麗央奈ちゃんを泣かしてんだ！」

「ちよっ、まっ、カアちゃん、オレはただトモダ——」

「問答無用！」

「ぎゃーっ!？」

滲む視界の中で、男の子が拳骨を喰らい、ジタバタと床を転がりながら悶えるのが見える。

麗央奈の母親が横に腰を下ろして、訊いて来た。

「麗央奈、走太くんと何があったの？」

「ちがうの……」

「え？」

「うれしいの……」

麗央奈は泣き続けた。

その日、彼女に初めての友達が出来た。隣の家に住む男の子。

彼の名前は、小林走太と言った。

「ん……」

麗央奈は目が覚める。

夢を見た。昔の夢を。幼き日、走太と初めて友達……いや、幼馴染みになった時のこと。

幸せて胸が一杯になった、あの日。麗央奈は一度だって忘れたことはない。そして、これからも忘れない。

枕元の、ウサギのぬいぐるみの横にある目覚まし時計を見やる。午前四時三十七分。セットした起床時刻よりも、少しだけ早い。目覚まし時計を裏返し、スイッチをオフにする。

「よし」

ベッドから起き上がり、収納ケースを開け、赤いジャージを取り出して、パジャマを脱ぎ、着替える。

ポケットティッシュとハンカチ、小銭入れ、ハンドタオルを持ち、自室を出て、一階に下り、顔を洗い、ゴムで髪を結わえてから、家を出る。

外はまだ真つ暗である。玄関先で軽く準備体操をしてから、川原に向かって走り出す。

日課で、今や趣味となったランニング。平日はランニングだけが、休日にはボクシングジムにも通っている。

次第に薄つすらと辺りが明るくなって行く中、川原の堤防を走る。往復で一時間程走り、家に戻って、セーラー服に着替える。

それから、麗央奈はエプロンを付け、台所に立った。

前日の夜に仕込みを終えていた食材を並べ、制服の袖を捲くる。

「お母さんの邪魔にならないように、手早く済ませないかね」

果たして、幼馴染みの少年は喜んでくれるだろうか。

そんな期待を抱いて、ドキドキしながら、麗央奈は調理に取り掛かった。

小林走太の日常に変化が訪れてから、一週間と四日が経つ。

その変化は一日の最初、朝の時点で、はっきりと目で見て分かる。

「走太。朝だよー」

正確には朝、意識が覚醒した時点ではっきりと分かる。

一週間と三日前まではあり得なかった光景が、目を開けてすぐに視界に飛び込んで来るからである。

いつの間にか開け放たれたカーテンから朝日が差し込み、腰を曲げて走太を見下ろす少女の、綺麗な赤色の髪を、一層鮮やかに映し出す。凜とした彼女が余りにも眩しく、走太は寝惚けていた頭の隅

々まで一瞬で血が巡り、ベッドから飛び起きる。

「お、おはよう、麗央奈」

走太は、幼馴染みの少女——紅坂麗央奈にぎこちなく挨拶をした。彼女は嬉しそうに微笑み、

「うんっ、おはよう、走太！」

元気な挨拶を返してくれる。

一週間と一日前に、彼女が部屋まで起こしに来るようになってから、日常に溶け込みつつある光景。

漫画やアニメで見たことはあったが、まさか自分にこんな日が来ようとは、夢にも思っていなかった。

正直、まだ慣れない。気恥ずかしさや緊張といったものが抜けない。いや、慣れては駄目な気がする。十一年間の凍てついた時間を経験し、距離と取っていたからこそ、幼馴染みとのコミュニケーションの一つ一つが、かけがえの無い、とても大切なものに思える。だから、慣れてはいけないのだ。彼女が起こしに来てくれることに感謝しなくてはならない。

これまた気恥ずかしくて、言葉になんて出来ないけども。

走太は心の中で深く感謝をしながら、枕元の目覚まし時計を手に取り、アラームのスイッチをオフにする。麗央奈が毎日起こしに来るおかげで、眠気なんてものはすぐに吹き飛んでしまい、目覚まし時計はお役御免になりつつある。それでも毎日、スイッチをオンにしてしまうのは、麗央奈が起こしに来ることを当然と思わないようにする、自分への戒めみたいなものなのかもしれない。

目覚まし時計の示している時刻は、たった今、午前六時四十五分になったところ。走太の高校生活が始まって以来、何があんでも目を覚ましていた起床時間。

全ては麗央奈よりも一本早い電車に乗り、彼女とブッキングしない為……だったのだが、今はその必要も無くなった。それでもこの時間に起きないと落ち着かないのは、習慣というやつなのだろう。

「なあ、麗央奈」

「なに、走太？」

「起こしに来てくれるのは嬉しいし、俺からは文句なんて一つも無いんだけど、別に遅刻ギリギリってわけじゃないんだからさ、無理して起こし来てくれなくてもいいんだぞ？」

漫画やアニメに見る同じようなシチュエーションは、主人公がなかなか起きず、遅刻しそうになっている為に見兼ねた幼馴染みが起こしに来てくれるのであって、一年生の時から無遅刻無欠席を続けている走太には、本来必要の無いものだったりする。仮に少しばかり寝坊したとしても、もとの起床時刻が一本早い電車に乗ることを想定しているので、そこまで致命的な事態になったりはしないのだ。

「そ、それはそうなんだけど——」

しかし、麗央奈はもじもじとポニーテールの先っぽを弄りながら、言う。

「わ……私はただ、自分が走太を起こしたいってだけで来てるから。無理してるわけじゃないよ。ほら、私、ランニングが日課で、もっと早く起きてるし。それに……幼馴染みだし」

「す、ストレートだな、麗央奈さん……」

言い訳の順序が逆になってる気がする。

彼女は指摘を理解したのか、かあああああつと朝一番の赤面を見せた。

「べ、別に、ちょっと本音が漏れちゃっただけなんだからね！」

ぶいっとそっぽを向きながら言う。

「そ、そうなのか……」

ストレート過ぎて、走太まで顔が熱くなって来る。

これ以上指摘すると、先日のように麗央奈が暴走して、窓からダイブし兼ねないし、しかも走太の部屋は二階なので、ツツコミは止めて、登校の準備を始めることにする。

「じゃあ、俺、制服に着替えるから」

「う、うん、分かった」

立ち上がり、壁のハンガーに掛けてある制服を手取る。

寝巻きの上着を脱ごうとしたところで、走太は動きを止める。

背後の気配がいつまで経っても消えないからだ。

振り返ると、赤毛の幼馴染みは、ぽーっと惚けた様子で走太の様子を見つめている。

「あの……麗央奈さん？」

「えっ、あつ、何？」

はっとなって顔を上げる麗央奈。

走太は彼女に言う。

「出来れば、その、せめて部屋の外で待っていて貰えると助かるんだけど。着替えを見られるのは、俺もちょっと、恥ずかしいというか、何というか……」

「ご、ごめん！ そうだね！ あは、あはは！」

麗央奈は、そそくさと部屋の外に退散して行く。

「な、何なんだ一体……」

彼女は時折、今のような怪しい挙動を取る。先日も言っていた、スケベ心というやつなのだろうか。

距離を取っていた一週間前よりも、距離が縮まった今の方がむしろ、麗央奈のことが分からなくなりつつある。

ふと、保健室での崎原宮治の言葉が、脳裏に蘇って来る。

——小林。お前、本当は、麗央奈ちゃんのことなんて、ちっとも考えてないんじゃないのか？

（俺って……麗央奈のこと、本当に全然知らないんだな）

十一年間の空白。走太はその間の彼女を、傍目でしか知らない。クラスメイトどころか、赤の他人と言ってもいいくらいの情報しか、持ち合わせていない。

（麗央奈の何を見て来たんだろう、俺は……）

走太が視線を床に落としていると、部屋の扉がノックされる。麗

央奈の声がした。

「走太ー、着替え終わったー？」

「あつ、ちよつと待って！　すぐ行く！」

一週間前に麗央奈が初めて走太を起こしに来た時、走太の母親の喜び様と来たら、それはもう未だかつて無い程のものだった。

何があつた、どうやって仲直りした、ひよつとして二人は恋人になつちやつてたりする！？　と瞳をキラキラさせながら走太に詰め寄つて来て、普段と全然態度が違うので、びっくりした。普段は走太よりも父親である走一にばかり興味津津な人であるから、なおさらだ。

そして、凛々しく成長した麗央奈のことを余程気に入ったのか、毎朝上機嫌で、彼女を食卓に座らせて、紅茶を淹れ、談笑していたりする。

その光景は今朝も変わらない。

麗央奈の前だと、口調が男前な格好良い母親に見えるから不思議である。

しかしまあ、幼馴染みの女の子と、自分の母親が楽しげに話している光景は、見ていて悪い気分はしない。

ふと、父親の走一と目が合う。二十代後半にしか見えないイケメン中年は、枝毛の一本もない長髪をわずかに揺らし、ふつと柔らかく微笑む。

走太は何となく心の内を見透かされたような気がして、幼馴染みと母親の談笑を眺めるのを止め、朝食を食べるのに専念することにした。

そうして、朝の支度を終え、麗央奈と共に家を出る。

十分ほど歩いて、地元の駅に着き、程好く空いた電車に乗って、御門市へと向かう。

今では電車の中でも、麗央奈と普通に話せるようになった。宿題のことや、友達のこと、今日のロボット部の活動について等。本当にもう、普通に幼馴染み同士といった感じた。

やがて、御門駅に着き、他の学生達もちらほらと見える中、通学路を歩いて行く。

と、ある路地を通り過ぎようとしたところで、走太は足を止めた。
「あ……！」

横目にその光景を目撃した瞬間、走太の頭の奥底にある記憶が蘇って来て、無意識の内に、足が止まってしまった。

路地で一人の女の子が、柄の悪い男達に囲まれていた。女の子の制服は、御門学園のものであり、一方の男達は、見慣れない制服を着ている。

リーダーっぽい、ロピアスでロン毛の男が、女の子の顔を舐め回すように観察してから、言った。

「ヒュー！ いいねいいね！ 御門学園の女子生徒は美少女揃いつて聞いたんで来てみたけど、初っ端からめちゃくちゃレベルの高い女の子を見つけちゃったぜ！」

小柄で、明るい髪色をした、ふわふわの巻き毛が似合う女子生徒だった。セーラー服の胸元に付いているリボンの色が赤ということ、は、一年生だろう。後頭部には、淡い緑色のリボンを結んでおり、レベルの高い、と男に評された通り、瞳が大きく、可愛らしくも整った顔立ちをしている。

しかし、その可愛らしい顔も今は、周りの不良達存在によって、不安と怯えが浮かんでいた。

「走太、どうしたの？」

足を止めている走太に気が付いて、麗央奈が戻って来る。

「れ、麗央奈、その……」

慌てて言い繕おうとするが、時既に遅し。

麗央奈もまた、走太の見ていた方向に目を向けてしまう。

幼馴染みの視線の先で、ふわふわ巻き毛の女の子が、現在の状況

から脱出すべく、顔を強張らせながらも不良をなだめていた。

「あ、あの、私、実は今日、日直で、だからその、早く学校に行かないといけなくてですね……！」

ロン毛は前髪を弄びながら、ニヤニヤと微笑む。

「へえ、そうなの。真面目なんだねー」

「そ、そんなわけで、失礼します！」

足早にその場を立ち去ろうとする女の子だが、ロン毛の不良が「おっと」と身体をずらして、前方に立ちはだかる。

「日直で急いでののは分かるんだけどさあ、ちょーっただけ話聞いてくれないかなあ、ちょっただけでいいからさあ」

「は、はあ」

「俺さ、隣町の間宮高校の生徒で、二年生の菅橋って言うんだけどお、御門学園って美少女が多いっていう噂を聞いてね。なら確かめてみようってんで、登校時を狙って、来てみたわけ。そしたらどうよ、早速美少女発見しちゃったじゃない。君だよ、君！」

「わ、私はそんな……」

「いやー、君可愛いよ。超俺の好み！ そんなわけでさ、学校なんかサボって、俺達のこれから遊びに出掛けない？」

「で、でも、日直の仕事がありますから」

「そおーんな、つれないこと言わないでさー。せつかく男に誘われてるんだよ？ 遊ばないのは損つてもものでしょー。日直なんて、やらなくても死ぬわけじゃないんだしさー？」

「ひっ……！？」

後退する女の子に詰め寄り、馴れ馴れしく肩に手を回す不良。

女の子はいよいよ泣きそうな顔になっている。

棒立ちになって見ていた走太は、ぐっと拳を握り締める。

十一年前の記憶に重なる状況が、今日の前で起こっている。ここまで見て、何もせずに立ち去ることは、あの時の激しい後悔を知っている走太には出来ない。それに、隣には麗央奈がいる。ここで逃げ出したら、彼女に幻滅されてしまう。

（俺が行かなきゃ……！）

行かなくてはならない。怖かろうと何だろうと、今行かなくは、全てを失ってしまう。だというのに。

走太は前に進まない。いつまで経っても。

行かなきゃいけないことを知っているのに、動こうとしない。

（行かなくちゃ、いけないのか……？）

どうしてそんなことしなくてはならないのか、と疑問を抱いている自分がいる。

なにせ、目の前にいるのは見ず知らずの女の子だ。学校が同じなだけ。助ける理由なんて、どこにもない。

自分はそこまで正義感があるわけではない。お人好しでもない。なにより、自分はそこまで喧嘩に強くない。世の中には出来ることと、出来ないことがある。

（そうだよ、俺である必要なんかどこにもないじゃないか。助けたいなら、力を持つてる奴が助ければいい……！）

掌の肉に爪を食い込ませる。

「おい、そこのお前達！」

はっとなって、走太は隣を見た。

赤いポニーテールを揺らしながら、幼馴染みが力強い表情を浮かべ、不良達の方へ歩いて行く。

やがて、彼女は不良達の前で足を止めると、腕を組み、凜とした声で言った。

「女の子が怖がっているのが見て分らないのか？ 肩に回した手を退けて、今すぐ離れろ」

「ああん、誰だお前？ つーか、髪赤いなオイ！」

ロン毛の不良が女の子から離れ、ポケットに手をつ込み、麗央奈に近付いて行く。

「その女の子と同じ、私立御門学園の生徒だ。間宮高校の生徒らしいが、朝からうちの生徒をナンパするのは止めて貰いたい。迷惑だ」

「はあ？ 何言っちゃってんの？ 別にテメエに迷惑掛けてるわけじゃねえだろうが。つーか、背の高いなオイ！」

身長百七十センチの麗央奈を見下ろす不良。麗央奈は一步も退かず、ロン毛を見上げる。

「その子に迷惑が掛かっている。聞けば日直の仕事があるらしいじゃないか。今すぐ解放して、ここから立ち去れ」

「偉そうな口訊きやがって。はい、そうですか、と俺らが引き下がるでも思ってたのか？ この女の子はな、日直なんてつまらないことしないで、これから俺らと楽しいことしに行くんだよ！ ……つーか、怖い顔してるから気付かなかったが、お前、よく見るとメチャクチャ可愛くね？」

ロン毛は左右に頭を動かして、麗央奈を観察し、

「おいおい、こいつは参ったぜ。髪を黒くして、眉間の皺を取り除いたら、特上のカワイ子ちゃんじゃねえか。しかも、背は高いが、冷静に見ればプロもびっくりのモデル体型！ 髪を赤く染めてるのが、難点だが、よく見りゃあ、結構さらさらで綺麗だし、悪くねえ。ひひひ、こりゃあいいい！」

興奮した笑いを上げ、麗央奈の前髪に触れようと手を伸ばす。

「気に入った。お前も俺達と一緒に来いよ。こっちの女の子も混ぜて、楽しいことし——」

ロン毛の指先が赤い髪に触れる前に、止まった。

麗央奈の右手が、ロン毛の手首を鷲掴みにして止めていた。

「私の髪に気安く触れるな」

「あ？」

「私の髪を好きに撫で回していい男は、この世でたった一人だけだ！」

掴んだ手首を勢い良く払い除ける麗央奈。

ロン毛の不良はよろけ、後退さる。怒りの形相を浮かべて、彼女を睨んだ。

「テメエ、このアマ……！ 調子に乗ってんじゃねえぞ！」

「調子に乗ってるのはお前だ、このロン毛。私の身体は、お前みたいな下衆にくれてやるほど安くない」

「そうかよ——」

走太は背筋に寒気を感じ、身震いした。

ロン毛の放つ雰囲気が変わったからだだった。走太のヘタレな勘が、これはマズイと告げている。

「麗央奈！」

走太が叫んだ瞬間に、ロン毛が拳を握って、振り被った。

「安くないって、テメエは一体幾らだこのアマアア——ツツ！」

反応出来て無いのか、麗央奈は微動だにしない。

拳が彼女の顔面を捉え、貫通した。

「「は？」」

ロン毛と走太は、同時に間抜けな声を上げた。

不良の拳が、麗央奈の頭の部分を貫通していた。というより、擦り抜けていた。

まるで、手を煙の中にも突っ込んだかのように。

次の瞬間には、貫通された麗央奈の姿は消え去っていて、彼女は別のところに立っている。

その場所は、ロン毛の腕の上。

「へー！？」

唖然とするロン毛。そりゃそうだ、攻撃した腕の上に立つとか、走太だっ て見たことが無い。

とにかく実際、麗央奈は不良の腕の上に左足で立ち、右足を思いっきり振り被っている。

「私は——」

彼女はロン毛の顔面に向けて、強烈な蹴りを放った。

「非売品で、特定の一人にはプライスレスだ、この野郎おお——
つつつ！」

「ぶげらっ！？」

ロン毛の顔面にスニーカーをめり込ませ、仰向けに吹っ飛ばす。

彼女は蹴った勢いのまま、空中で一回転。華麗に地面に着地し、肩に掛かったポニーテールを背中に払う。

残っている不良達が、戦慄の声を上げた。

「ちよつ、何だ今の!？」

「あの女、一瞬消えなかったか!？」

「つーか、腕の上に立つって、どんなジャンプ力だよ!？」

麗央奈はキリツとした顔で言う。

「残像だ」

「「いや、あり得ねえだろ、冷静に考えて!」「」」

不良達が一齐にツツコミを入れる。

走太も頷く。ごもつともです。

しかし、そんな中、不良の一人がツツコミを忘れて、わなわなと肩を震わせていた。その顔は青くなっている。

「ち、血を吸ったような赤い髪に……残像を作り出す程の素早い動き……俺、噂で聞いたことがある……!」

「き、聞いたことがあるって、一体何をだよ?」

別の不良が問う。

「半年前、ヤンキーの縄張り争いで、御門市の南にある蓮城市の峯川高校が、御門学園に喧嘩を売ったことがあった。御門学園は名のあるヤンキーなんて一人も居なくて、御門市は丸々、峯川高校に縄張りになるはずだった。けど、そこで一人の女が現れた。そいつは御門市に侵攻した百人の軍勢の前に、一人で立ちはだかり、残像を作り出す程の神速で動いて、自らは一発の攻撃も受けず、峯川高校の連中を全滅させたんだ。そして、その長い髪は、百人の返り血を吸って、真っ赤に染まっていたという……!」

「ちよつと待て! 俺も聞いたことがあるが、それって都市伝説じゃなかったのかよ!？」

「でも現に今、目の前に……!」

「う、嘘だろ……? 御門市の都市伝説、血染めの百獣王!？」
ブラッディレオン

不良達にざわめきが広がって行く。

麗央奈は、ゆつくりと不良達の方へ歩き出す。

「ブラッディーレオンだか何だか知らないが、とにかく、その女の子から離れる」

「ふ、ふざけんな！ 仲間一人やられて、黙って帰れるかよ！」

不良の一人が怒鳴って、女の子と麗央奈の間に立つ。

「勘違いするな。先に殴り掛かって来たのはそのロン毛だ。女の子さえ解放してくれば、私はこれ以上戦うつもりはない」

「関係ねえんだよ、そんなことは！ 殴られたから殴り返すだけだ！」

不良が麗央奈に向けて、走り出す。

麗央奈は、ずっと両手を前に出す。

「なら、殴り返さなければいいんだな？」

「殴らないって、舐めてんのかテメエ——ッ！」

「誰が舐めるかあ！」

両手の掌底をくっ付けける麗央奈。まるで某バトル漫画で使われるエネルギー砲を放つかのように、両腕を引き、溜める。

不良との距離はまだ遠い……のだが。

「私がぺろぺろするのは——」

麗央奈は全力で両手を突き出した。

「この世で一人だけだああ——ツツツ！」

走太は見た。彼女の前方の空間が歪むのを。

いや、空間ではなく、空気が歪んだのだ。勢い良く突き出された両手の平によって、空気が圧縮され、光の屈曲率が変化したのである……多分。

「あっちょんぶりけっ！？」

いずれにしても、大砲のごとく、言ってしまうえば某バトル漫画のエネルギー砲のごとく放たれた風圧が、男のどてっ腹を直撃。

男は残っている不良達の前まで地面を転がり、うつ伏せに倒れる。最後の力を振り絞り、顔を上げる彼に、麗央奈は言った。

「私は殴らなかつたぞ」

「いや、ぶつちゃけ……殴るより酷くね……？」

ガクリと額を地面に着け、男は沈黙する。

呆然とする残りの不良達に、麗央奈は鋭い視線を向けた。

「まだやるか？」

「「「全力で遠慮させて頂きますつつつ！」」」

不良達は一斉に首を横に振る。彼らはのびている二人を素早く回収すると、駅の方へ向けて走り去って行った。

路地に残されたのは、一年生の女の子と、走太、麗央奈の三人だけ。

麗央奈が女の子のところへ歩いて行き、やや腰を落として、女の子と視線の高さを合わせ、微笑む。

「大丈夫？ 怪我は無い？」

「は、はい、ありがとうございます！ あ、あの……お名前を教えてくださいても宜しいですか！？」

「私は、紅坂麗央奈。御門学園の二年生だ」

「麗央奈お姉様……！ 何て凛々しくも麗しいお名前……！」

「え？ お姉様？」

そんな感じで、一年生の女の子と麗央奈の周りに百合の花が咲き始める中、走太は思う。

「俺……必要なくね？」

十一年間で、圧倒的戦闘能力を身に着けてしまった幼馴染みの前に、走太の助けなど、全くもって必要が無かった。

「はぁ……」

ぼーっと授業を受けている内に、時間はあっという間に経過して、気付けばもうお昼休み。

頬杖をついている走太の口から出て来るのは、溜め息ばかりである。

そこへ崎原宮治が爽やかな笑顔で近付いて来て、言った。

「走太ー、購買にパン買いに行こうぜー」

「……」

「つて、そんな気分じゃないっぽいな」

真顔に戻って、前の席に腰掛ける宮治。足を組み、黒縁眼鏡の位置を直す。

走太は彼に言う。

「宮治。パン買いに行かなくていいのか？ 売れ切れんぞ」

「走太が行く時になったら、俺も行く」

「……女の子に言われたかったわー、その台詞」

「麗央奈ちゃんに頼んでみればいいんじゃないかね？ 頼染めながら言うてくれるぞ、多分」

「麗央奈は弁当持ち込み組なんだよ」

「馬鹿だな、走太。弁当のある無しなんて関係ないんだよ。その台詞を自分の為に言うてくれるか否かが重要なんだよ」

「言うてくれたら……凄く可愛いんだろうなあ」

「もつとも、言うてくれた瞬間に、お前はクラスの連中から殺気の集中砲火を浴びることになるだろうけどな！ ははっ！」

「笑えない、宮治。俺、笑えないよ……！」

麗央奈と話すようになってから一週間、クラスの男子達から「なんですか小林くん、一人抜け駆けしてリア充になっちゃうどころか脱童貞しちゃう気ですか？」という視線を向けられること多数。自意識過剰等では断じて無い。なにせ、走太が視線を向け返しても、一人として目を背けることなくガン見して来るのだ。まるで対立しているヤクザの事務所に放り込まれ、正座させられているかのようである。

いや、それよりももっと恐ろしいことがある。クラスの女子達も殺気を放っているということについてだ。彼女達は、男子のように視線を向けては来ない。走太と麗央奈が話していても、何事も無いかのように笑顔で世間話に花を咲かせている。咲かせているように

見える。しかし、明らかに走太には分かるように、微妙な仕草や、談笑の内容で、走太に向けての殺気を織り交ぜて来る。これについては、さすがに自意識過剰だと、走太は思った。ガン見して来る男子達とはかく、女子達については、走太が気にしなければ、普通に談笑しているだけである。

ところが四日前、走太は決して自意識過剰等では無いことを知った。体育の授業が終わり、男子更衣室のロッカーを開けると、制服の胸ポケットに、一目で分かるように、新聞の文字を切り貼りした一枚の紙が入っていたのだ。

『幼馴染みだからって、調子に乗ってんじゃねえぞ、このヘタレ』

もちろん差出人の名前など、何処にも無い。だがしかし、四つ折にされた紙の間に、ある物が挟まっていた。

それは、男子ではあり得ない、腰まである長さの、一本の黒髪。

「女子、怖っっっ!」

更衣室に他のクラスメイトがいるのも構わず、大声を上げてしまう程に、走太は戦慄した。

改めて、女子の嫉妬というものがいかに恐ろしく、紅坂麗央奈という少女がいかに男女問わず人気があるのかを思い知った瞬間であった。

ただ、走太が今回溜め息を吐いていたのは、そのことについては無い。

「なあ、宮治」

「なんだい、走太くん」

「この前、保健室でした話を覚えてるか？」

「さて、何のことやら」

「俺と気まづくならないように誤魔化してるなら、そんなものは無意味だぞ。なにせ、お前はいつだってポーカーフェイスなんだからな」

「無意味って、そりやないぜ、走太くん。俺は俺なりに気を使つて、あの時狸寝入りをしたのにさあ」

「一周廻つて、逆に分かり易いんだよ、お前は。とにかく、保健室でお前は俺に、自分のことしか考えてないんじゃないかねえの？　って言うただろ」

「言つたねえ、そんなこと」

「あの言葉、相当にショックでさ、それから冷静に考えてみたんだよ、俺。お前の言う通りだった。俺は、自分のことばっかで、あいつのことなんか全然考えてなかった」

麗央奈の十一年間を自分の頭の中で捏造して、勝手なイメージを作り上げていた。彼女のことを見てるようで、全然見てなかった。走太は自分のことを考えるのが精一杯で、余裕が無くて、見ようともしていなかったのだ。

「で、麗央奈ちゃんのことを、少しは考えるようになったと」

「うん。どんな十一年間を過ごしてたのかわつてさ。ただ俺、あいつのこと、十一年間本気で避けて来たから、思い返しても全然分らないんだよ。俺は本当のあいつのことを、何も知らないんだ」

「そうだろうな。はつきり言つて、麗央奈ちゃんに関しては、情報屋の俺の方が知ってる」

「それに気付いた時、あいつが急に遠く感じられてさ。今朝も色々あつて、俺の助けなんか必要ないくらいに強くなつたのを知つて、正直ショックだった」

「だから、朝から溜め息生産工場になつてたつてわけか？」

走太は頷く。

麗央奈と話すようになって、心のどこかで、いつか十一年前と同じことが起きたら、今度こそ彼女を助けてみせるという気持ちがあった。

けれど実際は、走太は不良を目の前にして、一歩たりとも動くことが出来なかった。それどころか、女の子を助ける理由なんて無いと、自身の説得までしようとした。

結局、走太が迷っている間に、女の子を助けたのは麗央奈だった。彼女は今や助けを請う立場ではなく、誰かを助ける側になったのだ。走太が助ける前に、彼女は自分で自分を助けるだけの力を手に入れたしまったのである。

「なんか俺、馬鹿みたいだ……」

情けなくて、悔しくて。そんな感情さえも馬鹿馬鹿しく思える程の無力感が、心を支配している。

何をどうしたらいいのか、分からない。

走太が俯いていると、宮治は言った。

「よく分かんけど、馬鹿は馬鹿なりに前に進むしかないんじゃないか、えの？」

「え？」

「お前は麗央奈ちゃんみたいに強くはないかもしれない。けど、立ち止まってたら、何も起こらないし、何も始まらない。だったら、弱かろうと何だろうと、全力で今、自分の出来ることをするしかないじゃねえか」

「自分の出来る限りのことを尽くす……」

「どんなに後悔したって、過去は変えられない。でも、全力で頑張れば、これからの未来は変えることが出来るかもしれない。要するに、後悔なんかしてないで、今努力しろってことだ。例えば、お前の場合こそ——」

宮治は、ぴつと横を指差す。

「目の前の、幼馴染みの笑顔に応えろとか」

「走太！」

呼ばれて振り向くと、嬉々とした笑顔でこちらに駆け寄って来る、赤髪ポニーテールの少女の姿。

麗央奈は走太の前に立つと、両腕を背後に隠し、やや緊張した面持ちで口を開く。

「あ、あのさ、走太は、今日の昼食はどうするの？」

「昼飯？ ああ、うん、これから購買にパンでも買って来ようかな」

って」

本当は食欲が湧かなくて、食べる気が無かった、とは言えないので、とりあえず適当に誤魔化す。

「だ、だったらさ!」

麗央奈は隠していた左腕を前に出す。その手には、一つの包みが握られていた。

「これは?」

「お、お弁当!」

「え?」

「今日、ちょっとその、いつもより多めに作り過ぎちゃって! だからもしあれなら、食べてくれると助かるんだけど……」

「俺が……食べていいの?」

こくこくと首を縦に振る麗央奈。

走太は彼女から、弁当の包みを受け取る。

「えっと……ありがとう」

笑顔を作って、礼を言うと、彼女はぼつと顔を真っ赤にし、叫んだ。

「か、勘違いしてよねつつつ!」

「は?」

麗央奈は腕を胸の前で組み、そつばを向きながら言う。

「別に、本当は多く作り過ぎちゃったとかじゃなくて、走太の為に丹精込めてお弁当を作って来ただけなんだからね!」

「ちよつ、麗央奈さん!? 本音漏れてる! 包み隠さず思いつきり漏れてるよ!」

どうやら相当にテンパっているらしかった。

横で見ていた宮治が眼鏡の位置を直しながら言う。

「これはデレツンだな」

「デレツン!?」

走太が訊き返すと、宮治は頷く。

「そう、デレツンだ。ツンデレの変化型。普段はデレデレしている

が、いざデレるべき時になると、テンパってしまい、思わず素っ気無い言動を取ろうとしてしまう。が、どんなに素っ気無くしようとしたところで、所詮中身は溶けたゼラチンのごとくデレデレなので、ツンになり切れない。素直系少女ならではの反動形成の型とみた」

「どうでもいいけど、麗央奈さん落ち着いて！　ここ教室！　教室だから！」

走太がなだめようと両肩を揺するが、彼女は頑なにそっぽを向きながら、更に大声で続ける。

「つ、ついでに、屋上で一緒に食べたりなんか出来ると嬉しいんだからね！」

「そうなんですか、嬉しいんですか！　うん、俺はもう、屋上だろうが何だろうが、どこでも付いて行っちゃいますよ！？　ただどね、教室はマズいんですよ！　なにせここは――」

ぞわつと背中を駆け抜ける悪寒。

走太は恐る恐る目だけ動かし、周囲の様子を探って――

「ひいひい！？」

我慢することが出来ずに、大きな悲鳴を上げてしまった。

顔に皺を寄せ捲くったクラスメイト達が、そこにいた。ブルドックみたいな顔になっていた。いや、そんなことを言っているとブルドックに失礼なくらい、恐ろしい形相で走太を睨み付けていた。もはや女子すらも殺気を隠そうとしない。男女の境界を越え、クラスメイト達は今、等しく獲物を狩る獣と化していた。

はつとなった走太は、教室の前の入り口を指差す。

「あつ、担任の先生！　助けて下さい！」

一斉にそちらを振り向くクラスメイト達。

瞬間、走太は左手で弁当の包み、右手で麗央奈の手を握って、教室の後ろの入り口に向けて駆け出す。

「しまった！　小林が逃げるぞ、追ええええ――つつつ！」

「野郎おお！」

気付いた男子が走り、捕まえようと伸ばす手からギリギリ逃れ、

廊下へと飛び出す走太。

「昼休みの間、麗央奈さんをお借りします！」

「ざけるんじゃないわよ！ 追え！ 追えええ——つつつ！」

「小林に麗央奈ちゃんの弁当を食わすな！ 捕まえて、何としても取り上げるんだ！」

「女子は一階と三階に分かれて、廊下を封鎖！ 男子は力の限り追つて！」

「麗央奈の弁当を一口も食わすんじゃないわよ！ 小林には校庭の砂を食わせてやるんだから！」

「くっそおお、なんでだ！ なんで俺の家の隣には、麗央奈ちゃんみたいな可愛い幼馴染みが住んでねえんだああ——つつつ！」

最後の男子の叫びは、なんとも切実であった。

どうにかクラスメイト達を撒こうと校内を逃げ続けた走太だったが、恐ろしいまでの嫉妬の力と、人数の差であつという間に追い詰められ、最後に残された選択肢は、指パッチンをして、中間世界へと逃げ込むことだった。

灰色の空の下、御門学園校舎の屋上で、走太は仰向けに寝転び、荒い呼吸を繰り返しながら、疲労した身体に酸素を供給し続ける。

一緒に逃げた麗央奈は、さすがと言うべきか、走太と同じだけの距離と走っているにもかかわらず、全く呼吸が乱れていなかった。

ただ、彼女はしゅんと肩を落として、申し訳なさそうに項垂れている。

「ごめんね、走太。私のせいで、こんなことになって……」

「麗央奈は人気があるから……仕方がねえよ。俺がクラスの連中の立場だったら……同じように嫉妬したんだろうし……」

「し、嫉妬……してくれるんだ？」

「え？ あっ……」

顔を赤くする麗央奈を見て、自分が本音を零してしまったことに気が付いたが、酸素が頭に回り切っておらず、否定する余力も無い。「幼馴染みが誰かに取られるのは……やっぱり、良い気分はしねえよ……」

走太が言えたのは、それくらいだ。

麗央奈は嬉しそうな顔をして、

「えへへ」

走太の片手に指を絡めて来る。

顔が熱くなつて、頭に血液が巡り、走太は麗央奈から目を逸らす。たまたま視線の先に、クラスメイトから死守した弁当の包みがある。走太は上半身を起こし、誤魔化すように包みを開いた。

「そ、そうだ！ 昼休みの間、クラスメイトの連中は血眼になって俺らを探してるだろうし、仕方ないから、ここで弁当を食べてくか！？」

「本当はこんなことで中間世界を利用しちゃいけないんだけど……まあ、でも、事情が事情だし。このままだと、お昼抜きで午後の授業を受けないといけないしね。今回は特別ってことで」

「決まりだな。ここで昼飯にしよう。あつ、でも、麗央奈の分は？」
「うん、大丈夫。あるよ。走太にお弁当を渡した後、そのまま屋上に誘って、一緒にお昼ご飯を食べるつもりだったから」

見れば、しっかりと右手に、弁当の包みを持っている。言動がおかしくなる程に混乱し、そんな状態で激しい逃走劇まで繰り広げたというのに、弁当箱を離さなかったのは、さすがとしか言いようがない。

「じゃあ、早速」

走太は包みに入っていた箸を持ち、弁当箱の蓋を開ける。

——血液をぶちまけたような真っ赤な弁当がそこにあった。

一秒と経たずに、蓋を閉める。

走太は努めて笑顔を作り、隣を見た。

赤毛の少女は、自身の弁当箱を膝の上に置いたまま、もじもじと人差し指を突き合わせて、頬をほんのりと朱色にし、期待に満ちた瞳を、ちらちらと向けて来る。

麗央奈はいつも弁当組である。自分で弁当を作って、学校に持ってきて来て、自らの胃袋に収めている。

だから、麗央奈が料理を作ることにに関して、実は下手クソなどという可能性はあり得ないはず。十一年間の空白で、彼女の腕の程は全くと言っていい程に知らないが、それにしたって相手は超人麗央奈さんである。料理だって、人並み以上にこなすだろう。

つまり、あれだ。これは、見た目はイマイチだが、食べてみたら超美味いというパターンだ。うん、そうに違いない。

走太は再度、弁当箱の蓋をオープンする。

二度見ても、やはり赤かった。一面の赤。どこまでも赤。

ただ、鮮やかで綺麗と言い難いのは、どうしてだろう。どこか暗い。第一印象の、血液をぶちまけたようなイメージを、どうしても拭えない。

いや、色のことは忘れよう。

走太は弁当の詳細に意識を移す。

ぱつと見よく分らない食材が、数多く入っていた。

（何だコレ、一体何の肉……？ 血抜き忘れたんじゃないかってくらい赤いんだけど。しかもよりによってミンチ！）

挽肉なんて有り触れた物であるはずなのに、何故か目の前の物体には、凄惨な殺人現場に散らばった肉片を思わせるグロさを感じざるを得ない。

（それからこっちは……トマト？ トマトって、もっとう、フレッシュな赤色じゃなかったっけ？）

例えるならばそれは、老婆が白雪姫に持って来た毒リンゴのような、濃いが故に禍々しさが滲み出る赤色。

駄目だ。やはり色を避けて通ることなんて出来ない。視覚を使っ

て評する上では、どうしたって色が最後の関門となって立ち塞がる。だが、身元不明の挽肉も、毒リングみたいなトマトも、この弁当のメインとなっている物体に比べれば、些細な物に過ぎない。

走太はあくまで平静を装い、「うわー、美味しそうだなー」と常套句を述べてから、麗央奈に尋ねてみる。

「えっとさ、この弁当って、ここに来る前に、購買のレンジとか使って温めたりした？」

「え？ ううん、使ってないよ。クラスの皆から逃げるので、精一杯だったじゃない」

「だよね……」

温める余裕など、どこにも無い。

しかし、だとすれば、ここで一つの矛盾が生じる。それは、この真っ赤な弁当のメインとなる物体。

弁当箱の中に置かれた、銀紙の仕切り内にある、ネッチャリとしたそれ。

血の池地獄を思わせる、グラタンっぽい、赤色の何か。

これならまだ、赤い絵の具を銀紙の上に盛った方が美味しそうだと思うる半固形物が、マグマのごとく煮えたぎっているのは、何故なのか。

弁当の蓋を開けた瞬間から、フシュー、ポコポコと湯氣を立てているのは、半固形物に含まれる水分の温度が沸点を超えた結果発生した水蒸気ではないと言うのか。

じゃあ、今もこの物体から発生し続けている気体は一体……！？
「走太、どうかした……？」

麗央奈の言葉に、はっとなる。

見ると、彼女の瞳に不安の色が漂い、揺れていた。何か弁当に不備があったのではないかと、心配しているのだ。

（馬鹿か、俺は！）

麗央奈の幼馴染みである俺が、彼女を信用しなくてどうするのか。昔、あんな酷いことをしたにも関わらず、俺と普通に接してくれる

彼女を。

（何を警戒する必要がある。これは、麗央奈が俺の為に作ってくれた弁当じゃないか）

見た目も味も関係ない。大事なものは、そこに込められた想いだ。

走太は、箸をしっかりと持ち直し、弁当に伸ばした。

どれを食べるか思案した末に、物体の明確な名前が分かる毒リンゴ色トマトを選択して、箸で摘む。持ち上げると、明らかにトマトの野菜汁とは異なる赤い液体がぼたぼたと零れ落ちるが、気にしない。

ゆっくりと口に運ぶ。麗央奈が不安と期待が入り混じった熱い視線を注いで来る。

走太は心を決めて、勢い良くトマトを食べた。

「っ！」

声が出ない程の衝撃が、舌から口内を駆け抜け、身体が震えた。断じて不味くなどなかった。余りの衝撃に、全身から、ぶわっと冷や汗が流れ出るのを感じる。

事実、額から流れ出た汗が頬を伝い、顎の先から落ちて、屋上のコンクリートを濡らす。

次いで、涙と鼻水が出る。胸が熱くなる。

……なんということだろう。これは、この味は、美味いとか不味いとか、そんなものを超越している。

そう、このトマトは――

壮絶に辛いっつ！

（ふおおおおおおおおおおおおおッ！？）

走太は叫んだ。絶叫した。悲鳴を上げた。口から火が出そうだった。

が、声は出さない。いや、出せない。

何故ならば――

トマトの圧倒的辛さにより、既に喉が死んでいたから。

「がぼげぼぐぼがぼごはごはうえげぼはっがぼげぼ、げぼっげぼげぼげぼっ！」

代わりに、そのまま窒息死するんじゃないかと思うくらい盛大に咽る。

麗央奈が慌てて、走太の背中に手を置く。

「だ、大丈夫、走太！？」

問題ナッシング！　と言おうとしたが、口からは「ヒュー」と謎の音が出るだけ。

なので、走太はこくこくと首を動かして、頷いてみせる。
やばい、なんか胃が痛いんだけど。精神的なところから来るものでは無く、明らかに直接的な刺激で。

「そ、それで……どうかな？　トマトの味」
辛いです。

「走太の口に合う……かな？」

全然合わなかったりするのだが、形の整った眉を八の字にして、上目遣いで見つめて来る彼女に、そんなことを言えるはずもない。
というか、喉が死んでいるので、言いたくても言えない。

走太は脳髓まで焼くような辛さのせいで涙と鼻水が止まらない中、頷きながらサムズアップをして、美味しいということを必死にアピールしてみせる。

「そっか、良かったあ」

ほっと胸を撫で下ろして、とても嬉しそうに微笑む麗央奈。

物理的大ダメージを受けているこんな状況下でさえ、思わずドキッとしてしまう程に魅力的な、幸せに満ちた表情だった。

走太は思う。

（この表情を曇らせてしまうような事態だけは、なんとしても避けねば……！）

麗央奈が悲しむ顔を見るくらいなら、どんなに辛かるうが、弁当を食べた方がマシだ。

（それに、全部が全部、辛いとは限らない。赤い＝辛いと決めつけるのは、余りにも早計。だったら逆に、今がチャンスと言える！）
先程の激辛トマトで、走太の舌は、味覚が麻痺している。それを利用して、弁当を一気に完食してしまうのだ。

後は笑顔を浮かべて、ご馳走様でした、とても美味しかったよ、とジェスチャーで伝えるだけ。

ならば、最初に胃に入れてしまうべきは、一面赤色の弁当の中でも、最も怪しいオーラを放つ、ネツチャリとした物体X。あえて名前を付けるならば、血の池グラタン。

走太は手を震わせながらも、マグマ溜まりのごとく盛られたそれを、下の銀紙ごと手に取った。

これさえ突破してしまえば、後は勢いでなんとかなる。これこそが災難関の障害。そんな気がする。

麗央奈は未だ、期待に満ちた眼差しを走太に注いでいる。

（よし、行くぞ……！）

気合を入れて、走太は煮え立つ血の池グラタンをまるごと口に入れた。

今なら、どんな味の物を食べても、全くの無意味――

またしても壮絶に辛かった。

（ひiiiiiiiiiiiiiiやあああああああああああ
ああッ！？）

走太は悶絶し、コンクリートの上を転げ回った。

恐るべきことに、血の池グラタンの辛さは、トマトを遥かに凌駕していた。

もはや辛さを通り越して、痛さに変わりつつある。オーバースペックな辛さに、口の中が火傷しているかのようにだった。

（俺、今ならリアルにファイヤーブレスを吐ける自信があるぜ！）
行き過ぎた辛さは、思考さえもオーバーヒートさせるのか、そんなことが頭を過ぎる。

「そ、走太？」

転がり回っている様子を見て、さすがにおかしいと思ったのだろう。麗央奈が晴れやかだった表情が、曇天に変わり、
「ひよつとして、グラタン、相当に不味かった……？」

走太は嫌な汗が吹き出る身体を起き上がらせ、氣力を振り絞って、今度は両手でサムズアップをしてみせる。それでもって、今出来得る最高の笑顔をニカツと浮かべてみせる。

少しでも気を抜いたら、意識を失って、倒れてしまいそうだった。麗央奈は未だ、眉を八の字にしたまま、言う。

「……本当に？」

走太は何度も頷いてみせる。

すると、麗央奈は先程よりもずっと、明るく、幸せそうな笑顔をを見せてくれた。

「だったら、嬉しい」

きつと、これを見た男は皆、惚れてしまうだろう――。
個人的な好みと、幼馴染みとしての贔屓目を差し引いても、自信を持ってそう思える、最高に可愛いらしい笑顔。

やっぱり、麗央奈は笑顔の時が一番良い。少なくとも、走太はそう思う。

だから、弁当を食べるくらいなら、頑張ってみせる。
ヘタレの自分でも、弁当を食べるくらいは出来る。

体勢を持ち直して、走太は弁当箱に向き直る。毒リンゴ色のトマトを、身元不明のミンチを、その他諸々を食べて行く。

やがて、走太の様子に安心したのか、麗央奈が自身の弁当箱を開くと、中身はやはり真っ赤だった。

にも関わらず、彼女は平然とそれを食べ、もぐもぐと口を動かす。とんでもない辛党なのか、はたまた純粹に味覚オンチなのか。

いずれにしても、麗央奈は走太の横で、幸せそうに笑ってくれている。

それがとても、嬉しい。

こんな日々が、出来るだけ長く、望むならばいつまでも続いて欲しいと、走太は願う。

第三章 幸せの麗央奈（下）

昼休みの同時刻。

神谷源平は、生徒会室に向かって、歩を進めていた。

生徒会長の金剛雅に、『先日の調査の件についての結果が出た。至急、生徒会室に来い』とメールで呼ばれたのだ。

源平はメールの『至急』という部分に、嫌な予感を感じ、足早に向かう。

やがて、生徒会室に辿り着き、扉を開けた。雅は、奥の会長席に座り、険しい表情を浮かべている。それは割といつものことなのだが、今日の彼女は、明らかに雰囲気違っていた。

彼女がいつだって必ず持ち合わせている余裕のようなものが、今日は全く感じられない。

なので源平は、会長席に歩み寄っても、冗談を言ったりせず、率直に本題を切り出した。

「……金剛、メール見たよ。四日前の件で、調査結果が出たんだって？」

「ああ、これを見てくれ」

そう言っただ渡された資料は、中間世界と別次元を繋ぐ『壁』に掛かっている圧力を示すデータが記された物だった。

源平は焦らず、じっくりと内容を見る。

どういうことか、最初は分からなかったが、雅の意図を探る内に、一つの解答に辿り着く。

「金剛……これはつまり、あれかい？ 別次元と、中間世界の間にある壁が、脆くなっているってことかい？」

「その通りだ」

雅は金フレームの眼鏡の位置を直して、

「生徒会メンバーで調査を続ける内に、中間世界と別次元を繋ぐ壁に、本来よりも大きな圧力が掛かっているというデータが出た。そ

れがどういうことか、分かるか？」

「次元獣が突破する時、次元の壁には、大きな圧力が掛かる。圧力に耐え切れなくなつて、次元の壁が一時的に破れることによって、敵は中間世界に侵入して来る」

次元の壁を破ることは、次元獣でも容易では無い。そう簡単には、越えられない壁なのだ。

故に、今までは多くても、一ヶ月に四体しか出現しなかった。

だが、目の前の資料によれば、現在、中間世界と別次元を繋ぐ壁には常に大きな圧力が掛かっており、次元の壁が脆くなっている。

「壁が脆くなっているから、次元獣が中間世界に侵入しやすくなっている。それは分かるよ。だけど、重要なのはそこじゃない」

源平が資料から顔を上げると、雅は頷く。

「ああ。問題は何故、次元の壁にそこまでの圧力が掛かっているからだ。それも常に」

次元の壁を突破するのに必要な圧力は、あるものに比例して増加する。

それは、次元の壁を突破しようとする物体が持つ、情報質量。分かりやすく表現するならば、次元獣が持つ『エネルギーの大きさ』。つまり、今現在、次元の壁に常時大きな圧力が掛かっているという状況は、言い換えれば、

中間世界と別次元を繋ぐ『壁』に対して、常時大きな圧力を掛けている者が存在しているということを意味している。

それが、果たしてどういうことか。

「近い内に来るかもしれないってことだね？ 強力な次元獣が」

「そういうことだ」

落ち着いた様子で答える雅だが、既に状況は非常事態を示している。

「このこと、上層部にはもう伝えてあるの？」

「ああ、先程親父殿に連絡した。いざという時の現実世界での対応や、住民の非難はなんとかしてくれるだろう。私達は、そうならないように全力で次元獣を阻止するだけだ」

「シラシオンの完全修復を待ってる場合じゃないね、これはもう。

キーパーマスターを六人揃える必要がある」

「うむ。時間の許す限り、搜索してくれ。戦力は一人でも多い方が――」

その時だった。

窓ガラスを叩き割るような、甲高い音が頭の奥に響いた。

「っ！」

次いで、ズンッ！と凄まじい重圧感が、源平の身体を襲う。

それは、見知った感覚。何度も味わった感覚。

だが、この規模は、この重圧感の大きさは、これまで一度たりとも味わったことが無い。

余りの音の甲高さと、内側から押し潰されるような感覚に、眩暈すら覚え、危うく倒れそうになる。かろうじて、会長席の机を支えることで、立ったままでいられた。

感覚が引いて行き、雅に視線を向けると、彼女もまた、頭を抱え、苦悶の表情を浮かべていた。

彼女は「くっ……！」と頭を振って、

「これは……まさか!？」

「残念だけど――」

源平は、額に脂汗が滲むのを感じながら、言った。

「どうやら、新しいキーパーマスターを探している暇はないらしいね」

死ぬ程辛い弁当を平らげた走太にとって、突然襲われたその感覚は、何にも勝る追い討ちだった。

無理し過ぎた為に、自分の中の何かが壊れてしまったのでは思うような、ガラスの破碎音。

もともと座っていなければ、耐え切れず、その場に倒れていたであらう強烈な重圧感。

頭がくらくとする。しかし、それまで朦朧としていた意識は、背筋に走る寒気で逆に覚醒する。

その感覚は、前にも一度、味わったことがあったからだ。

それは、四日前に、次元獣『ジャガー』が出現した時。

ちょうど二限目の授業中で、生まれてこの方味わったことの無い不気味な感覚に、言い知れない恐怖を感じ、びびりと足から頭へと身震いが伝わり、椅子を倒して立ち上がって、「ひいやああーっ！？」と女の子みたいな悲鳴を上げてしまった。クラスメイト達が目を見くしたのは言うまでも無い。

あの時でさえ、激しく恐怖したというのに、今日のそれは、前回のそれを遥かに凌ぐ。まるで別物。口内に充満していた辛さも落ち着いて来て、まともに喋れるようになった今も、行き過ぎた恐怖で、悲鳴が上げられない。

一体、何が起きたというのか。

答えを求めて、視線を屋上に彷徨わせ、麗央奈の方に動かすと、彼女の綺麗な瞳は大きく見開かれ、驚愕に揺れていた。

「何……これ……？　こんなの、今まで一度も……！」

彼女は跳ねるように立ち上がり、パチン！と指を鳴らす。

世界が反転し、青い空から色彩と雲が消え、灰色の天井に変わる。ゲートキーパーの戦場、中間世界。

麗央奈が御門市の中心街がある南方を振り向いて、一步後退さった。

「これは……！？」

動揺した彼女の声に、走太もまた、振り向く。言葉を失った。

南半球全ての空が、丸ごと砕け散り、無くなっていた。プラネタリウムの天井が半分、爆破されたかのような惨状。亀裂は、御門学園の真上辺りまで来ている。つまりは、南の空に巨大な穴が開いていた。

その奥には、何色とも言い難い、異様な空間が広がっており、波打っている。オーロラが天井に貼り付けられた、とても表現すればいいだろうか。ただし、美しさは微塵も感じない。ひたすらに不気味さがあるだけである。

前回、ジャガーが現れた時は、次元獣が通れるギリギリの大きさの穴しか開かず、通過するや否や一分と経たずに修復されてしまうようなものに過ぎなかった。

だからこれは、異常事態。麗央奈の表情を見なくても、そう感じるほどに異常。

麗央奈が制服のポケットからインカムを取り出して、装着する。

走太も制服の内ポケットに手をつ込み、インカムを掴む。源平から「次元獣がいつ出現してもすぐ対応出来るように、肌身離さず持っていて」と言われていた物だ。

スイッチをオンにして、頭に付ける。

『紅坂先輩！ 小林先輩！ 聞こえますか？』

オペレーターである蓬菜菜美子の声が鼓膜を震わす。

走太よりも先に、麗央奈が答える。

「こちら紅坂。現在、校舎の屋上に居ます。小林も一緒です」

『なっ……！ 小林先輩、屋上で一体何をしてたんですか……？』

「え？」

いきなり名前を呼ばれた上、菜美子の声が冷たくなったので、走太は目をぱちくり。

『どうやら小林先輩は、ヘタレなだけでなく、変態だったようですね』

「何故に屋上に居ただけで、変態呼ばわり！？」

全くもって意味が分からない。

『本当ならもつと販したいところですが、残念ながら、今は余り時間がありません。……というわけで、手短に状況を報告します。屋上に居るならば、一目瞭然だと思いますが、つい先程、大規模な次元震が確認されました。原因は、強大な情報質量を持つ次元獣の出現によるものです』

それを聞いて、麗央奈が問う。

「次元獣の種類は？」

『全くの新種です。ゲートキーパーに搭乗してから、映像を転送しますが、サイズはゲートキーパーと同じ、約二十メートル。二足歩行の完全な人型です』

「二十メートル！？　こんな大規模の次元の裂け目で……！？」

『はい、間違いありません。ですから、敵は規格外の情報密度を持つていると思われます。率直に言うならば、過去最強クラスの次元獣です』

絶句する麗央奈。

と、背後で屋上の扉が開く音がした。

振り向くと、走太達と同じようにインカムを付けた源平が、扉の奥から現れる。

「二人共、蓬萊から、どんな状況なのかは聞いてるね？」

麗央奈は頷く。

「は、はい。もしかして、神谷先輩も出撃するんですか？」

「うん。今回ばかりは僕も、シラシオンの修復状況がどうか、言ってられないからね」

そう言って、源平は座り込んだままの走太を見下ろす。

「小林くん」

「あつ……はい！」

「申し訳ないけど、これが君の実戦の二回目になる」

「マジですか……？」

「うん、大マジ。今回の次元獣は、十中八九強力な奴だ。紅坂と僕だけでは、正直苦戦は免れない。前に話したことがあったかもしれない

ないけど、僕の乗るゲートキーパーに至っては、現在修復途中で、どんなに頑張っても六、七割の力しか出せない。だから、是非とも君の力を貸して欲しい」

「でも、俺は……」

走太は、ぐつと両手の拳を握り締める。

『実戦』という言葉を聞くと、未だに嫌な汗が止まらない。心がざわめく。

「小林くん、君はこの前、初実戦にも関わらず、ジャガーとともに戦って、見事に倒してみせた。それは君が思っているよりも、ずっと凄いことだ。僕達から見ても、君とブラックテイラーはもう、十分な戦力になり得る存在だ」

「この前のは単なるマグレです！ 俺はただ、自分が生き残るために必死だっただけで……」

がむしやらに逃げ回った拳句、何も出来ずに死ぬよりマシだと、抑え切れない感情を拳に乗せて振るっただけだ。

四日前の戦闘を思い出すと、二度と同じことが出来る気がしない。自分に対する自信なんて、微塵も湧いて来ない。

今朝の出来事を振り返れば、決定的である。自分は、断じて強い人間などでは無い。一塊の男子高校生に過ぎない。いや、それ以下の人間だ。

女の子が目の前でピンチに陥っていても、足が竦んでしまい、助けられない。そんな人間なのだ。

と、強く握り締めて白くなっていた走太の手を、同じくらい白くて柔らかい手が包み込んだ。

誰の手かと顔を上げると、麗央奈だった。

「大丈夫。走太なら出来るよ」

「っ……！」

彼女の瞳には、期待の光が灯っていた。

弁当を食べていた時と同じだ。走太ならばきっと、自分の期待を裏切らない、期待に応えて、四日前と同じ働きを見せてくれると、

そう信じている目だ。

走太は、彼女の瞳を見て、何も言えなくなってしまった。
まただ。また、トラウマが蘇って来る。

ここで逃げ出すのは、あの日と同じように、目の前で「助けて」と言う麗央奈を見捨てることと、何も変わらない。

彼女はこれから、強力な次元獣との戦いに身を投じる。彼女が危険に晒されるのを知っていながら、見過ごすことなんて、走太には出来ない。

あのトラウマを繰り返したくない。それだけは駄目だ、絶対に。

「私と神谷先輩に、走太が加われれば、相手がどんなに強力な次元獣だとしても、絶対に勝てる。だから、一緒に戦おうよ、走太」

彼女は「ね？」と柔らかく微笑んで、小首を傾げてみせる。

走太は悩んだ末、拳を固く握り締めたまま、頷く。

「分かった……やってみる」

「うん！」

屈託の無い笑顔を浮かべる麗央奈。

そのやり取りを見ていた源平が「よし」と頷き、

「じゃあ、小林くんの子承も得たところで、出撃するとうかが」

彼は約半分が消失した空を見上げ、叫んだ。

「シラシオンッ！」

次元獣が開けた穴のように、見上げた上空、空間の壁を叩き割つて、その奥から巨大なシルエットが迫り出す。

西洋の騎士が着る甲冑を思わせる、白銀のボディー。肩のアーマ―パーツは大きく左右に張り出しており、頭部にはエメラルド色のアイカメラが二つ輝いている。右腕にはブレードを持ち、左腕の甲にはシールドを装備している。特徴的なのは、背部に取り付けられた大きなウイング。全体的には細身な機体なのだが、天使のごとき翼が背中に加わることで、他を圧倒するような存在感を放っている。
「これが神谷先輩の……！」

走太のブラックティラーが、ロボットアニメに登場するライバル

機のような雰囲気であるのに対し、目の前の機体は、正統派主人公機らしい雰囲気を持ち合わせていた。

ボディーと同じく白銀色をしたウイングを展開し、空中に静止するその立ち姿は、一瞬、悩みを忘れてしまう程に格好良く。

「小林くんは初めて見るよね。これが僕の相棒、ゲートキーパー『シラシオン』だ」

源平は、瞳を見開いたイケメンフェイスを、走太に向けた。

走太達が各々のゲートキーパーに乗り込み、次元獣の下へ向かう最中、オペレーターの菜美子から一つの映像が送られて来る。

「これが今回の敵、新種の次元獣です」

走太はブラックテイラーを走らせながら、コクピットのモニター上に流れるそれを見た。

御門市の南部区域を闊歩する大きな人影。屋上で聞いていた通り、次元獣は二足歩行で、本当に人の形をしていた。

見た目は凄くシンプルだ。一言で表現するならば、鉄色の全身タイツを着た男性の巨人。鍛え上げられたアスリートのような細身ながらも、二の腕や太腿に盛り上がった筋肉から、力強さが見て取れる。他は所々に分割線のようなラインが引かれており、肩や肘、膝などには薄いアーマーがある程度。

最初に見た恐竜＋ゴリラの外見をした一つ眼の次元獣や、四日前のジャガーに比べると、若干拍子抜けな印象を受ける。

が、あることに気付いた途端、シンプル過ぎる外見は、不気味な物へと認識を変化させた。

この次元獣、顔が無いのだ。

目も、鼻も、口も無い。人間のような体型をしていて、頭部があっても、そこにあるべきパーツが一つたりとも無いのである。さながら、妖怪『のつぺらぼう』のごとく。

菜美子は言った。

『その外見から、この次元獣を以後、「ノーフェイス」と呼称することになります』

ノーフェイス——顔無し。

『敵は全くの新種である為、どのような攻撃を仕掛けて来るのか、想像も付きません。ですので、ゲートキーパー各機は、細心の注意を払って戦闘を行って下さい。特に小林先輩』

「わ、分かった」

『まあ、もつとも、先輩はヘタレなので、こんなこと言わなくとも無茶はしないと思いますが。前回みたいに感情任せに突っ込んだ拳句、気絶して、保健室送りにならないとも限らないので』

「仰る通りで……、気を付けます……。心配してくれてありがとう、菜美子ちゃん」

『は？ なに調子に乗ってるんですか？ 貴重な戦力が減ったら困るだけです』

いきなりブツツと通信が切れる。

「ちよつ、なんで!？」

今更だが、嫌われているのだろうか。

ガックリと肩を落としている暇も無く、モニターの右側に新たなウィンドウが開き、源平の顔が映し出される。

『紅坂、小林くん、もうそろそろ、そのノーフェイスとやらの接触するよ。気を引き締めて』

『了解』

「り、了解」

前回ジャガーと対峙した場所を通過して、更に南へ。

両脇にビルが立ち並ぶ大通りを走って行くと、源平に「小林くん、そこでストップだ」と指示を出される。

およそ百メートルくらいの高さを飛行していたシラシオンとレッドラスも、ブースターの出力を弱め、空中で静止する。

『紅坂、敵が見えるかい？』

『はい、確認しました』

麗央奈がそう答えるが、地上にいる走太からは、ノーフェイスの姿は見えない。レーダーで確認すると、南方二キロの地点に反応がある。

「す、すみません。俺からは見えないんですけど……一体どの辺りに？」

走太が質問すると、源平よりも先に、モニターの左側にウィンドウが開き、麗央奈が教えてくれる。

『えっとね、大通りをここから一キロ半くらい直進した先に、丁字路があつて、大きなショッピングセンターが立っているでしょ？ その丁度裏側辺りに居るよ』

「あれか……。分かった。ありがとう、麗央奈」

『うん、どういたしまして。……それで、神谷先輩。砲撃ですか？』
途中で真面目モードに切り替えて、麗央奈が問う。

『話が早くて助かるよ、紅坂。レッドラスの砲撃で、先制攻撃を仕掛けようと思う。砲撃開始と同時に、僕と小林くんがノーフェイスに接近戦を挑む。紅坂はそのまま、適正射程距離を維持しつつ、援護射撃を』

『しかし、走太はまだ……』

『紅坂の気持ちは分かるけど、レッドラスの火力が一番発揮されるのは中距離戦だ。近くで守るよりも、中距離で援護射撃をした方が、小林くんを守る。それに今回は、僕もいる。何かあった時は、僕が近距離で小林くんをカバーするよ』

麗央奈は少しの間、走太に心配そうな眼差しを送っていたが、やがて頷く。

『……分かりました。私は援護射撃に徹します』

『よし。次は小林くんだ』

「は、はい！」

走太はウィンドウの源平に視線を向ける。

『今話していた通り、レッドラスの砲撃と同時に、僕のシラシオン』

と君のブラックテイラーで、敵に接近戦を仕掛ける。僕がメインで戦うから、小林くんは隙を見て、前回の戦いの時みたいに、右ストリートを敵の顔面に叩き込んでくれればいい』

「先輩を援護すればいいってことですか？」

『そういうこと。場合によっては、色々指示を出したりするかもしれないけど、基本はそれでいい。小林くんのことには頼りにしているけれど、それでもまだ実戦馴れしていないのは事実だから、あまり無茶はしないようにね。まずは落ち着いて、ノーフェイスがどんな次元獣なのかを見極めるんだ』

「はい、分かりました」

普段はどこか掴みよしの無い源平だが、今はとても頼もしく思えた。

ノーフェイスは強力な次元獣であるらしいが、彼の指示通りに戦えば、何とかかなりそうだ。

（落ち着け俺……大丈夫だ。別に一人で戦うわけじゃない。麗央奈も、神谷先輩もいるんだから）

その中で出来る限りのことをすればいい。焦る必要は無い。

『じゃあ、これより、戦闘を開始する！ 紅坂、頼む！』

『了解！』

源平の指示を受けて、レッドラスが双肩のキャノン砲を、シヨツピングセンターの方へ構える。

走太もまた、ブラックテイラーの姿勢を低くし、両手を地面に着けて、クラウチングスタートの準備をする。

『ターゲット……ロックオン！ ショルダーキャノン——発射ッ！』

二本のキャノンが唸りを上げ、先端から赤いエネルギー弾が放たれる。

『小林くん、行くよ！』

「はい！」

源平のシラシオンがウィングのブーストで加速し、走太はダッシュを開始する。

レッドラスのエネルギー弾がショットピングセンターの向こうへと飛んで行き、爆音と黒煙を上げる。

一キロ半の距離を走って、ブラックテイラーにショットピングセンターの側面を回り込ませる。シラシオンは建物の上を飛び越えて、直進。

ショットピングセンターの裏側が見えて来て、走太の目にもようやくノーフェイスを捉えることが出来た。

ゲートキーパーと同サイズにして、全身鉄色の人型。既にシラシオンと交戦を始めており、源平の振るう白銀のブレードを、飛び退って回避している。

シラシオンは左腕に装備したシールドの先端を、ノーフェイスに向ける。シールドに開いている二つの穴は、どうやら銃口であったらしく、そこから二本のレーザーを放つ。

ノーフェイスは素早く横に動いて、これを回避。間髪入れず、シラシオンへと走り出し、握り拳を作り、振るう。

『おっと、危ない!』

ウィングのブーストで飛び上がり、かろうじて回避するシラシオン。

そこで、走太は源平のもとへと辿り着く。

「先輩、大丈夫ですか!？」

『いやー、恥ずかしながら、しばらく出撃してないと、腕が鈍って全然駄目だねやっぱり。おまけにシラシオン自体の動きのキレもイマイチと来た。これはかなりマズイかもしれない』

「え」

先程までの安心感はどこへやら、走太は一気に不安になって、頬と眉をひくつかせる。

『小林くん、来るよ!』

「おわあああ!？」

シユタタタタタ! と陸上の短距離走選手さながら、腕と太腿を大きく振り上げて、猛速前進して来るノーフェイス。

顔のパーツがゼロで表情無し、声も出さないの、何を考えているか理解出来ない分、相当に怖い。

ノーフェイスが、ばむっ！と地面を蹴る。美麗なフォームだが、全身タイツの次元獣が空高く舞い上がる姿は、どこか気持ち悪かった。次元獣は、空中で両手両足を広げ、大の字になる。

呆けて見惚れていると、源平が慌てたように言った。

『ちよっ、何してるんだ小林くん！？ 避けて！』

『避け……え？』

場を離れるシラシオンに視線を向けてから、再び空を見上げた。そうしてようやく、ノーフェイスの飛び上がった意味が分かった。空中で大の字になったまま重力に身を任せ、走太目がけて落下して来たのである。

それは、プロレス技の『ランニングボディープレス』だった。

「のおおおおおおおおおおおうッ！！？」

走太は咄嗟に、ブラックテイラーを横に跳躍させる。

ノーフェイスの鉄色ボディーが脇を掠め、地面に激突して、轟音と共に半径数十メートルものクレーターを作り上げる。爆撃でもされたかのようにだった。

走太とブラックテイラーは巻き起こった衝撃波で飛ばされ、地面をゴロゴロと転がる。

「あ、危ねえ……！！」

起き上がる走太。ブラックテイラーのアイカメラをクレーターの中心に向けると、人型の穴が開き、そこにノーフェイスがめり込んでいた。

まともに喰らったら、バラバラにされていたかもしれない。……それにしてもまさか、ボディープレスとは。

『無事かい？』

ブラックテイラーの隣に、シラシオンが着地する。

「な、なんとか」

『油断しちゃ駄目だよ。今の攻撃はちよっと予想外だったけど、相

手の情報質量と密度が高いのは、確かだからね』

ノーフェイスが、めり込んでいた身体を地面から引き抜き、ゆるやかな動きで立ち上がる。

何故かボディーに付いた土埃を気にしており（自らボディープレスを仕掛けて来たというのに）、ポンポンと両手で叩いて落とす。

何だろ、妙に人間味があるというか、こういう無駄な動き、ブラックテイラーに似ている気がする。

『ふむ……今のボディープレスの必要性を考えると、ノーフェイスはもしかしたら、飛び道具を持っていないのかもしれないね』

「確かに、今のところは、使って来てないですね」

ノーフェイスのシンプルなボディーを見るに、飛び道具が出て来そうな箇所は、どこにもない。

『あと、翼も無いし、浮力が得られそうな箇所も無いから、飛べないタイプの次元獣である可能性が高い』

「ということは、距離を取って戦えば……！」

『その前に、ちょっと確かめてみようか』

「確かめる？ 一体、どうやってです？ ……って、あれ？ 神谷

先輩、何故にそんな高く飛んでいるんですか？」

何気なく横を見ると、いつの間にかシラシオンの姿が無く、上空五十メートル近くまで上昇していることに気付く。白い機体はそのままぐんぐんと高度を上げて行き、百五十メートルくらいのところで静止する。

『じゃあ、行くよ！』

源平はそう言って、シールドのレーザー砲をノーフェイスに向けて、撃った。

全身鉄色の次元獣は、きつちりと反応し、それを回避する。目の付いていない顔で、シラシオンを見上げる。

いよいよビームでも放つのかと思いきや、そんなことは無く、十秒くらい上空を睨んでいた後、次元獣は走太の方を向いた。

「え？」

走太は目を瞬かせる。

ノーフェイスは、じつとブラックテイラーを見つめて来る。やがて、首を傾げ、思案するような仕草を見せてから、シユタタタタタ！ と走太目がけて駆け出した。

「ええええ！？ なんてええええ！？」

相手は強力な次元獣。ヘタレな走太が、怯えないはずが無い。反撃という選択肢を選ぶこと無く、「いやあああ！」と悲鳴を上げて、恥も外聞も無く敵に背を向け、全力逃走。

ゲートキーパーと次元獣、大きさ二十メートルの者同士による鬼ごっこが始まる。

モニターの源平は顎を擦りながら、

『上空から攻撃されたにも関わらず、こちらへの反撃は一切無し。追うことも無く、ターゲットを地上のブックテイラーに変更した……』
「……つてことは、どうやら推測は当たっているようだね」

「先輩、俺を利用しましたね！？ ブラックテイラーが空を飛べないからって！」

『利用だなんて、人聞きの悪い。協力して貰ったんだよ、協力』

「どつちでもいいですから、早く助けて下さい！ このままじゃ……ぎゃ——っ！？」

背後を見れば、ノーフェイスは距離を詰めて来ており、ブラックテイラーの揺れている尻尾を掴もうと、手を伸ばしている。

ジャガーもそうだが、何故奴らはブラックテイラーの尻尾を求めるのか。そんなに魅力的か！？ セクシーか！？ プリティーなのか！？

と、ノーフェイスの後ろ、斜め上空にシラシオンの姿が映った。

『心配しなくて大丈夫だよ。今助ける！』

源平が眼を見開き、言った。

『行け！ ダンシングフェザー！』

シラシオンのウイングが左右に大きく展開、ウイングの背面に付いていた放熱板のような物が射出され、誘導ミサイルのようにノー

フェイスを襲う。その数全十発。

ノーフェイスはその気配に気づき、ブラックテイラーを追うのを止め、ブレイキを掛けて、振り返る。迎撃する気なのか、ファイティングポーズを取った。

そうして、一点に収束するように集まるミサイルに対して、ノーフェイスは拳を放つ。

が、そのパンチは外れた。見ていた走太は目を丸くする。ノーフェイスもおそらく、同じ気持ちだったろう。

ミサイルが次元獣の拳を避けるように、拡散したのである。まるで意思をもっているのかのようだった。

「いや、これはミサイルじゃない……！」

走太は知っていた。こういう武器を、ロボットアニメで見たことがある。某リアルロボットアニメで使われる、有名な兵器。

敵を中心に、三百六十度、全方向から包囲し、死角の無い『飽和攻撃』を行う遠隔誘導端末。

ノーフェイスを取り囲むように散らばった放熱板の先端から、一斉に、ビーム砲が放たれる。

そう、これは、ロケットパンチ、必殺剣、ドリル等に並ぶ、漢のロマン！

「オールレンジ攻撃、キタアア——ツツツ！」

鼻息を荒くし、身体の前で、ぐっと両手の拳を握り締めて、走太は叫んだ。

必死に避けようとするノーフェイスだが、全方位からの連続攻撃を捌き切れるはずもなく、次々とビーム砲の直撃を受ける。

『これで！』

源平はそれによって生まれた隙を見逃さず、いつの間にか、ノーフェイスの懷に飛び込んでいた。

右手に輝く白銀のブレードが、勢い良く振り上げられる。ノーフェイスは、反応出来ていない。

火花が散り、金属音が響いた。

ノーフェイスの左腕が切断され、宙を舞った。

怯まず、残った右拳を振るおうとするノーフェイスだが、遠隔誘導端末『ダンシングフェザー』がそれを許さない。シラシオンの周囲に位置を取り、次元獣にビーム砲撃のシャワーを浴びせる。

距離を取るシラシオン。

『今だ紅坂！』

源平が声を張り上げて、走太は上空に浮かんでいる赤い機体に気付く。

『はい、先輩！』

重火力型ゲートキーパー・レッドラスの腹部装甲は、既に展開されており、赤熱していた。

そのパイロット、紅坂麗央奈が、凜とした声を碎け散った空に響かせる。

『クリムゾンノヴァアア——ツツツ！』

腹部の銃口から、溜めていたエネルギーが解放され、太さ四十メートルはあるうかという深紅のレーザーを放つ。

止まないビーム攻撃によるけていたノーフェイスに回避する術は無く、鉄色の身体は深紅の閃光に上塗りされ、見えなくなる。そして、爆発。

割と近い距離で巻き起こった爆風に飛ばされそうになるのを、両足で踏ん張って堪える。

『小林くん、爆風が止んで、それでも敵が立ってたら、すかさず飛び込んで！』

源平の言葉に対して、意図を訊き返す暇は無かった。

レッドラスの攻撃が終わり、深紅の柱が消えて、中心に立っている巨大な人影を確認したからだ。

ノーフェイスはまだ、立っていた。だが、結構なダメージを受けているようで、鉄色の身体には所々罅が走っている。

あと一撃で罅が全身に回り、崩れ去りそうなイメージが見えて。

走太は、迷うよりも先に、ブラックテイラーで駆けた。

黒い拳を握り締め、振り被って、突っ込む。

「吹っ飛ばえええ——つつつ！」

本能のままに吼え、その表情無き顔面に、拳を繰り出した。鉄色の表面にめり込み、変形させ、宙に浮かせる。

ノーフェイスは弾丸のように空を舞い、錐揉み回転をしながら飛んで、ショッピングセンターに突っ込んだ。

轟音と白煙が上がる。

走太はそこでようやく、止めていた息を吐いた。緊張が解けたのだ。背中から、ぶわっと冷や汗が出る。

「やった……！」

源平が『ナイスパンチ！』と、シラシオンにサムズアップをさせる。

麗央奈も表情を明るくして、

『やったね、走太！ あとはこれで、ノーフェイスがどうなったのかだね』

「手応えは結構あったけど……」

『あれだけ攻撃を浴びせたんだ。仮に生きていたとしても、まともに戦闘出来る余力は無いはずだよ』

三人して、ショッピングセンターの方を見やる。

白煙が止むと、ノーフェイスはショッピングセンター瓦礫の中に身体を埋めさせ、頭を垂れていた。

ブラックテイラーが殴った顔面は、左半分が砕け散り、無くなっている。鉄色のボディーは、レッドラスの必殺技によって黒く焦げ、亀裂が走り、シラシオンのオールレンジ攻撃によって、所々に穴を穿たれている。おまけに、左腕は切断されている。

誰がどう見たってボロボロだった。だというのに。

ノーフェイスはまだ動こうとしていた。瓦礫に埋まった身体を引き抜こうともがく。

源平がダンシングフェザーをシラシオンの周囲に集め、言う。

『さすがの情報密度だね。バラバラになってもおかしくないのに、

砕けない。攻撃面はともかく、防御面だけで言ったら、今まで戦って来た中で最強だ」

『先輩、ノーフェイスには飛び道具が無いってことは、距離を取って、近付かずに止めを刺した方が安全じゃないですか？』

『そうだね。後は、シラシオンとレッドラスの砲撃で破壊しよう。』

小林くんは、ノーフェイスに近付かず、離れていて」

「分かりました」

走太は頷き、後ろに下がる。

モニターの奥で、ショッピングセンターの瓦礫の中から、ノーフェイスが起き上がるのが見えた。

ランニングボディープレスを決めた後に立ち上がった時のような、ゆるやかな動きだった。

それが、何か引つ掛かった。緩慢な動き。フラフラしていると、そういうのじゃなくて、どこか余裕があるような……。

『ダンシングフェザー！』

『シオルダーキャノン！』

シラシオンとレッドラスが止めの砲撃を開始し、ノーフェイスは爆炎に包まれる。

シラシオンの遠隔誘導端末とシールドから、レッドラスの双肩と両手の十指から、止むことなく攻撃が続けられる。

ショッピングセンターが崩れ、次々と爆発が起きる。

（いや、ノーフェイスに余裕があるうがなかるうが、大丈夫なはずだ）

走太は思い直す。

（相手に飛び道具は無いし、仮にこの攻撃に耐えたとしても、さっきみたいなコンビネーションで何とかなる）

実戦馴れしている源平と麗央奈がいるのだから、心配無い。相手は既に、左腕を失っているわけだし。

問題なんかどこにも――。

炎に包まれるショッピングセンターの中から、二発の光弾が走っ

た。

続いて、空中で爆発が起きる。

「——ッ！」

掠れた悲鳴。麗央奈の声だった。

走太は空を見上げる。ブラックテイラーの方に何か落ちて来た。

ゴウン！ と大きな金属音を立てて、目の前の地面を跳ねたのは

……レッドラスの右腕。

「なっ……！」

『小林くん！ 警戒して！』

源平が叫び、走太はショッピングセンターの方を向く。

燃え盛る炎の中に、ノーフェイスが立っていた。ただ、シルエットが今までと違う。

ノーフェイスの両肩に、レッドラスに似たキャノン砲が付いていた。

「なんだ……あれ……！？」

キャノンの砲頭が、走太を捉え、火を噴く。

「うわっ！？」

横に飛んで回避。寸前まで居たところで爆発が起き、地面に二つのクレーターを作る。

ノーフェイスが歩いて来て、炎の中から姿を現す。

走太は、愕然となった。

「嘘だろ……？」

ノーフェイスの身体から、亀裂が消えていた。失ったはずの左顔面も、元通りになっている。左腕は切断されたままだが、代わりに両肩からキャノン砲が生えていた。身体の延長と言っている、鉄色の砲身。

一体何がどうなっているのか、分からない。

と、ノーフェイスが自らの左肩を見やった。同時に、変化が起きる。

左肩の切断面が、ボコボコと膨れ上がり、伸びた。次第にそれは、

腕の形を模って行き、最終的には、切断された事実が無かったかのように元通りになる。

『再生したのか……！』

源平が驚きの声を上げる。

ノーフェイスが上空に浮いている二体のゲートキーパーを見やり、砲撃を仕掛けた。

片腕を失ったレッドラスが後退しながら、キャノン砲で応戦。シラシオンは砲撃をかわし、遠隔誘導端末を放つ。

すると、ノーフェイスにまたしても変化が起きた。背中から無数の触手が飛び出したのだ。触手は絡まりあつて、一体化し、左腕を再生した時のように一つの形を成して行く。

それは、大きな翼。ただ、ノーフェイスの持つキャノン砲がレッドラスの物に似ているように、その翼もまた、似ていた。

——シラシオンのウイングに。

ノーフェイスの翼の背面から、小さな羽根が外れ、襲い来るダンシングフェザーを迎撃せんと飛び立つ。

シラシオンと次元獣の物を合わせ、合計二十機の遠隔誘導端末が、空中でドッグファイトを開始する。

ノーフェイスが翼を広げた。遠隔誘導端末による戦場を擦り抜け、シラシオンに突撃して行く。

『再生だけじゃなく、武装のコピーまで……！』

源平はブレードを振るい、ノーフェイスと接近戦を始める。拳とブレードがぶつかり、火花を散らす。

『神谷先輩！』

右腕を失ったレッドラスが、両肩と両脚部の装甲を開き、そこから無数のミサイルを発射した。

ノーフェイスはそれを避け切れず、喰らって、爆発に飲み込まれる。が、驚くべきことに怯まず、爆発の中から飛び出したノーフェイスは身体を再生しながら、レッドラスに肉薄、拳で殴り飛ばす。

『きゃあッ！？』

強いベクトルに押されて、レッドラスは叩き落され、離れた地点の地面に激突した。

「麗央奈！」

反射的に、そこへ向かおうとする走太。

ところが、舞い降りた鉄色の次元獣が、進行方向を阻む。

「う……あ……」

走太は後退さる。

ノーフェイスは地に足を着き、パーツ無き顔をブラックテイラーに向けた。

攻撃を受けても再生し、肩にキャノン砲、背中に翼を生やした次元獣には、もはや死角は無く、全く太刀打ち出来る気がしない。

もともと兼ね備えていた不気味さは今、恐怖に変わって、走太を威圧する。

頭が真っ白になって、身体が震える。操縦桿を握った手が汗ばむのを感じる。

『小林くん！』

ブラックテイラーとノーフェイスの間に、シラシオンが割って入った。頭部から真っ二つにせんと、ブレードを振り下ろす。

だがしかし。ノーフェイスは落ち着いた様子で、右の拳を振り被り、真正面からブレードに放つ。

パキヤアンツ、と薄いガラスが割れるかのように、ブレードが碎けて折れた。

拳を放った勢いのまま、ノーフェイスは身体を回転させ、シラシオンの脇腹に回し蹴りを叩き込む。

吹き飛ばされた白銀のボディーは、横のビルに突っ込み、コンクリート片を撒き散らす。

残ったのは、走太のブラックテイラーとノーフェイスのみ。

「殺……される……！」

ノーフェイスが走太の方へ向き直る。駄目押しと言わんばかりに、鉄色のボディーが変形する。体型は維持したまま、胴体のアーマー

が模られて行く。

レッドラスのアーマーだった。

変形が完了すると、腹部装甲が展開される。覗いたのは、レッドラスの必殺技『クリムゾンノヴァ』の銃口。赤熱し、エネルギーがそこに収束して行く。

走太は動くことが出来ない。金縛りにあつたかのように、身体が動かない。

やがて、エネルギーが溜まり切った銃口から、深紅の閃光が放たれて――。

『走太あああ――つつつ！』

ブラックテイラーを庇う様にして、目の前にレッドラスが飛び込んで来た。

ノーフェイスのクリムゾンノヴァが解放される。深紅の業火が視界を覆う。

機体が激しい衝撃に揺れる。走太は目を開いて、前だけを見ていた。

業火を受け止め、必死に押し返そうとする赤い機体を見ていた。目が離せなかった。

だって、その機体には、大切な幼馴染みが乗っていて。しばらくして、業火が止む。レッドラスが仰向けに倒れる。

前面の装甲が溶け、各部がスパークを起こしていた。

「れ……麗央奈？」

走太は跪いて、レッドラスの肩に手を置く。

モニターの麗央奈のウィンドウは、消滅していた。

「麗央奈！　おい、麗央奈！」

必死に呼び掛けるが、返事は無い。

「麗央奈つつつ！」

ほとんど泣き声に近い叫びを、走太は上げる。

コンクリートを踏み砕く音がして、顔を上げると、ノーフェイスがブラックテイラーを見下ろしていた。

もはや走太には、一欠片の気力も残っていない。走太はただただ、ノーフェイスの動向を見つめるのみ。

ノーフェイスは首を横に振った。「つまらない」とか「殺す価値も無い」とでも言いたげな仕草だった。

次元獣は、走太に無防備な背を向けた、ショッピングセンターの方へ飛ぶ。

半壊した建物の中心に立つノーフェイス。その鉄色の身体に至る所から、触手が伸びて、周囲の瓦礫に突き刺さる。

新たに触手が生えて、くるとノーフェイスを包んで行く。触手は次々と身体から飛び出し、何重にもノーフェイスの身体に巻き付いて行く。

やがて、触手を巻いたノーフェイスの輪郭は球形を描き、蛾や蚕の『繭』のような物体を形成した。

『小林先輩！ 聞こえますか、小林先輩！ 聞こえてたら返事をして下さい！』

その内、通信回線を開いた菜美子が何事かを叫んでいたが、走太は一言たりとも返せず。

ただ呆然と立ち竦み、終始、繭が作られる様を眺めていることしか出来なかった。

「おそらく、この繭の中では、ノーフェイスが現実世界に侵攻する為に必要な準備を行っているものと思われる」

プロジェクターで白幕に静止画を映し出しながら、金剛雅が言った。

ノーフェイスが繭に閉じ籠ってから、三時間後。

現実世界、放課後の生徒会室で、生徒会メンバー——キーパーア

シスト達による会議が行われていた。

「未だかつて、我々『門番』側がここまで追い詰められたことは無かった。故にこんな現象を目撃するのも初めてだが、おそらく導き出した解答は間違っていないだろう」

雅はその理由を説明する。

「ノーフェイスは、全てのゲートキーパーを無力化し、次元の門が無防備になったのにも関わらず、門へと向かわずに、わざわざ繭を作って閉じ籠った。

これはつまり、現状ではまだ、ノーフェイスが現実世界へと侵攻出来ない状態であることを示している。

では何故、ノーフェイスは繭に閉じ籠ったのか。……奴の情報質量と密度は、開けた次元の裂け目の大きさから目算するに、他の次元獣の数百倍という値に相当する。私の解答としては、奴はその圧倒的過ぎる情報質量と密度のせいで、現状の形態では、現実世界が受け入れることの出来る情報処理のキャパシティを超越しているのではなからうかと考える。つまり、分かりやすく言うと――」

片手に持ったシャーペンの頭で、チャームポイントの広いおでこを叩き、思索するように眉根を寄せる。

生徒会メンバーに混じり、話を聞いていた源平は、フォローするように口を開いた。

「ノーフェイスは今、繭の中で、自身の情報構成を現実世界対応バージョンに変換してるってことだね？」

雅は台詞を取られ、やや不満そうな顔をしたが、すぐに「うおっほん」と咳払いをし、

「……そういうことだ」
話を続ける。

「さて、この現状を踏まえた上での、今後の作戦だが、私からの提案としては、繭からノーフェイスが出て来るまで待つべきでないかと考える」

「何故です？ 敵が動けない今が、むしろ攻撃のチャンスではない

かと思うのですが」

生徒会メンバーの一人が手を挙げて、質問する。

「戦力が十分に揃っているなら、その選択肢もあっただろう。だが、現状、戦力は不足していると言わざるを得ない」

先の戦闘で無事だったのは、ゲートキーパー三体の内、ブラックティラーのみ。源平のシラシオンは、ノーフェイスの回し蹴りを喰らって小破。もともと修復中だったこともあって、次の出撃時はまともな戦力になるかどうか怪しい。深刻なのはレッドラスで、奇跡的に大破こそしなかったものの、一ヶ月前のシラシオン以上の損傷を受けていた。はつきり言って、出撃すらも困難な状態だ。

質問した生徒会メンバーもそのことを理解したのだろう。俯き、黙ってしまう。

雅は金縁眼鏡を中指で持ち上げて、言う。

「……焦る気持ちは凄く分かる。私だって、そうだ。しかし私達は、今のような状況だからこそ、慎重に事に当たらなければならない。次回の戦闘でノーフェイスを倒せなければ、現実世界に奴の侵入を許すことになるだろう。そうなれば……中間世界での戦闘が現実のものとなる。情報破壊能力を持つゲートキーパー以外に、次元獣を倒す術は無い。核を撃ち込もうが何をしようが、一切の物理攻撃はノーフェイスには通用しない。後に待っているのは……遅かれ早かれ、現実世界の滅亡だけだ」

現状で最も勝率が高いのは、と雅は続ける。

「繭からノーフェイスが出て来るまでに、迎撃の準備を整え、万全の状態で決戦に臨むことだ。神谷達キーパーマスターには、ゲートキーパーの修復に専念して貰う。私達キーパーアシストは、作戦の考案と、繭の解析作業を行う。現状で、他に何か意見がある者はいるか？」

源平を含め、手を挙げる者はおらず、とりあえず会議は終了になる。

そこから休む間も無く、各自に仕事が割り当てられ、作業に移る。

源平が、雅と共に作戦について話し合っていると、「神谷先輩」と背後から声を掛けられた。

振り返ると、そこにいたのは、オペレーター役の蓬菜菜美子だった。

「蓬菜、どうしたんだい？」

「あの……小林先輩のことなんですけど……」

菜美子は少し躊躇う様子を見せてから、言った。

「その……大丈夫……なんでしょうか？」

「蓬菜は、小林くんが無事だったって話は聞いたんだよね？」

「はい」

「つまり、蓬菜の言う『大丈夫なのか』は、小林くんの精神的な状態についてだよね？」

こくりと頷く菜美子。

「小林先輩は今……どうしてますか？」

「今は、紅坂の看病をしてるよ。保健室で。ほら、紅坂が小林くんを庇って倒れたから……それで」

「そうですか……」

保健室のベッドに寝かされ、目を閉じている麗央奈の横で、走太は椅子に腰掛けていた。

ボロボロのレッドラスのコクピットから彼女が助け出され、現実世界の保健室に運ばれてから、ずっと付き添っていたのだ。

ベッドに寝かせるに当たって、トレードマークのポニーテールは解かれ、ルビーのように赤い髪は今、下ろされている。顔はいつもよりも白く、長い睫毛はピクリとも動かない。

あれから何時間経ったのか、走太には分からない。

（何も……出来なかった……）

そのことが頭の中を占めている。

レッドラスの右腕が破壊され、ノーフェイスに翼が生えて、シラシオンと空中戦を始めた時。本当はあの時、走太はやるうと思えば、助けに行けたはずだった。

ノーフェイスがやって見せたように、ブラックテイラーも翼を作れば良かったのだ。なのに走太は、それをしなかった。分かっていたはずなのに、いつもみたいに足が動かなくなった。

身体を支配していたのは、圧倒的な恐怖。足が震えて、頭が真っ白になって、全身から汗が出て。

動けず、考えられず、後は馬鹿みたいに突っ立っているだけだった。

そのせいで、麗央奈が自分を庇って、傷付いた。噛み締め続けて、裂けた唇は、鉄の味がする。

「ん……」

と、麗央奈の睫毛が震えた。

走太は顔を上げて、思わず呼び掛ける。

「麗央奈！」

彼女はゆっくりと、星の散りばめられた黒い瞳を開ける。瞳は辺りを確かめるように動いて、それから走太の姿を映す。

「ソウ……ちゃん？ 走……太……？」

懐かしい呼び名を一度言ってから、彼女は今の呼び方で言い直す。走太が「うん」と答えると、白かった顔に、段々と赤みが戻って行く。

「走太！」

がばつとベッドから起き上がった麗央奈は、直後、身体をふらつらせる。

走太はそれを支えて、

「駄目だ、麗央奈。まだ寝てないと。あの攻撃をまともに喰らって、コクピットの中が熱を帯びて、蒸し風呂状態になってたんだから」「うん。でも、私は大丈夫だよ。それよりも、走太は怪我しなかった？ 無事！？」

「俺は……無傷だよ」

麗央奈と源平が庇ってくれて、走太は一切の攻撃を受けなかった。彼女は安心したように、ほっと息を吐いて、微笑む。

「そっか、良かった。走太が無事で」

「……」

走太は麗央奈と目を合わせられない。

「というか、そうだ、ノーフェイスはどうなったの！？ 倒したの！？」

「いや……倒せなかった」

彼女に、ノーフェイスがあの後、繭を作って、その中に籠もったことを説明する。

「ということはまだ、次元の門は破られて無いんだね？」

「ああ、まだ破られて無い」

それでも、絶望的な状況であることに変わりはないが。

「なら、勝算はまだあるってことだね」

「え？」

走太は外していた瞳の焦点を麗央奈に合わせる。

彼女の表情は、敗者が浮かべるそれでは無く、希望を見出した者の、自信に満ちた笑みだった。走太には到底得ることの出来ない、力強さがそこにはある。

麗央奈は、強い。

「走太」

彼女に両手を掴まれる。

ノーフェイスと戦う前にされたように、温かい両手に包まれる。

希望の星に満ちた黒い瞳が、走太を照らし出す。

「私は、走太なら、ノーフェイスに勝てると思う」

「俺が……どうして……？」

「ノーフェイスの能力が、ブラックティラーと同一のものだからだよ。創造と再生。走太も見たでしょ？ ブラックティラーも同じことが出来るんだ。だから——」

「俺なら、ノーフェイスと対等に戦うことが出来るって？」

麗央奈の柔らかく、温かい手に包まれた自分の手を、走太は強く握り締める。

彼女は頷いて、

「そうだよ。走太なら、ノーフェイスを倒すことが出来る。私はそう思う。大丈夫、走太だけで戦わせたりしない。レッドラスの修復を急いでやって、私も出撃するし、神谷先輩もきつと協力してくれるはずだよ。だから、今度こそ一緒に、ノーフェイスを」

「いい加減にしてくれよ……！」

気付けば、そう言葉を漏らしていた。

麗央奈が瞳を見開いて、走太の手を離す。

「え？」

「俺が、あの化け物に勝つ……？俺に一体、何を期待してんだよお前は！」

「走……太？」

「俺は、今日の戦いで、何も出来なかった！お前と先輩がピンチになってる時に、足が竦んで動けなかった！そういう男なんだよ俺は！いざという時に、何も出来ない！とんだ根性無し！ヘタレ！それが俺なんだ！」

「し、仕方ないよ、それは。だって、走太はまだ、キーパーマスターになったばかりだし。二回目の実戦で、こんな強い相手と戦うことになっちゃんだから、足が竦んだって仕方ないよ」

「それで、次の三回目の実戦は、足が竦まないように、頑張ってみようって？お前、馬鹿にしてんのか……？」

「違う。馬鹿になんか……！」

「お前と一緒にすんなっ！」

走太は勢い良く、右手を横に払いながら、

「俺は、麗央奈みたいに強くない！お前みたいに頭は良くないし、運動神経も良くない、ルックスも良くない、人望もない！お前とは違うんだよ、何もかも！俺は強くないんだ！」

溜まりに溜まった負の感情は、一度吐き出し始めると、もう止まらない。

「分かってんだろ、お前も！ 本当は俺がどういう人間か！ 俺は――」

ずつと言わずに来た。今の関係を壊したくなかったから。

でも、心のどこかでいつも燻っていた。

「過去に一度、お前を見捨てた男だぞ！？」

麗央奈の肩が、ビクツと震えた。黒い瞳が動揺する。

「それは……！」

「十年前のこと、お前だって、忘れたわけじゃないだろ。俺はそういう奴なんだよ！ その件を通して、どんな心境の変化があったのか知らないけど、お前は今みたいに強く成長した。でも、俺は違う。あの時から、何も変わって無いんだよ！ ヘタレなままなんだ、ずっと！ 誰も彼も、お前みたいに強くなれるわけじゃない！」

幼馴染みの少女が顔を青ざめさせる。

走太は胸が突き刺すように痛んだ。でも、言葉は止まらない。

「お前が俺に何かを期待するのは勝手だ。だけど、俺はそれに答えられない。俺はお前と違って、弱い。あんな化け物に殺されかけて、逆に奮起出来る程の精神力と勇氣は、持ち合わせじゃない……！」

俺は今だって――」

ベッドの脇の椅子から立ち上がって、言った。

「お前を見捨てて、逃げ出すよ。怖くなったら、絶対に……！」

自分の身の安全を優先して。「助けて」と伸ばされた手を払い除けて。

だって、今だってほら。

走太は幼馴染みの泣きそうに歪んだ顔を見続けることが出来なくて、この場から逃げ去ろうとしている。

麗央奈が何か言おうとしたのを聞かず、走太は背を向けて、保健

室から飛び出す。

行く当ても無く、廊下を走り続ける。

あの日と同じだった。十年前のあの日と。

心に湧き上がるのは、激しい後悔と、惨めな気持ち。

結局、十年経っても、自分は何も変わっていない。

変わろうと思った。あの日と同じことをしたくなくて、怖かろう

が何だろうが、我慢してゲートキーパーに乗って、戦場に立った。

でも所詮、やせ我慢に過ぎ無かった。

（俺には最初から無理だったんだ。分かってたじゃないか……！）

だって、どんなに自分を取り繕ったところで――

小林走太は、小林走太でしかない。

第四章 守る女、守られる男

幼き日の紅坂麗央奈にとって、小林走太は、かけがえの無い存在だった。

赤い髪が原因で、他の子達が自分を敬遠する中、走太だけはいつも、自分の傍に居てくれた。

彼は麗央奈にとって、唯一の友達だった。大切な、大切な友達だった。

ただ、幼稚園でよく一緒に遊ぶようになって、いつの頃からか、自分が走太に対して、不思議な感情を抱いていることに気付いた。走太の顔を見ると、それだけで無性に嬉しくなる。

彼の前だと何故か、良い自分を演じなくなる。

彼に触れられると、顔が熱くなつて、胸がドキドキする。

一秒でも長く、彼の傍に居たい。一センチでも一ミリでもいいから、もっと傍に近付きたい。

大切は大切なだけけど、それは友達だからというわけではなく、別の意味で大切だった。もっとずっと大切だった。

この感情は何なのだろうかと知りたくなって、母に尋ねると、

「それは、麗央奈が、走太くんを『好き』ってことじゃないかしら」

「スキ……？」

「そう、『好き』。麗央奈が女の子として、走太くんっていう男の子を大切に思ってるってこと」

「トモダチとしてタイセツなのとは、ちがうの？」

「それも『好き』ってことだけど、麗央奈が走太くん to 思っているのは多分、友達とは別の『好き』。麗央奈は、お母さんのことは『好き』？」

「うん、スキだよ」

「じゃあ、その『好き』は、走太くん to 思っ『好き』と同じかしら？」

考えると、少し違っていた。

麗央奈は首を横に振って、胸元をきゅっと押さえる。

「おかあさんのことはスキ。だけど、ソウちゃんのスキとはちがう。ソウちゃんのスキは、もっところ……ムネがドキドキするの」

そう言つと、母は麗央奈の赤い髪を優しく撫でて、微笑んだ。

「それはね、きつと、麗央奈が走太くんに、『恋』をしているからよ」

「コイ？」

「うーん、麗央奈にはまだ、難しいかもしれないけど……そうね、麗央奈が走太くんと結婚して、夫婦になりたいってことかしら？」

「け、ケッコン！？ フウフって……おかあさんとおとうさんみたいな？」

「そう。お母さんとお父さんみたいに、一緒の家に住むってこと」

思い返せば、母の話はとんでもなく飛躍していたが、それでも麗央奈は、『恋する』ということの意味を少しだけ理解した。

何故ならば、麗央奈は、

「そ、ソウちゃんとケッコン……」

走太と結婚して、夫婦になって、一緒の家に暮らすことを想像して、結構良いかもしれないと思ってしまったから。

もしも、もしもの話だ。もしも結婚したら。そうしたら。

——父が仕事に出掛ける際に、母としてるように、キスしたりするのだろうか。

「ソウちゃんと……チュー……」

胸がドキドキして、顔が熱くなって、熱くなり過ぎて、頭からシューと白い蒸気が上がった。

その日から、麗央奈は走太のことを、恋愛対象として意識するようになった。

色々想像したり、勉強熱心になって、テレビの恋愛ドラマを見るようになり、小学校に入るまでの間、『恋』に対する理解を深めていった。走太に対する恋心も、次第に膨らんでいった。

小学一年生になった時には、恋心が膨らみ過ぎて、走太が別の女の子と会話しているのを目撃して（小学校に通う生徒の半数は女子であり、冷静になれば、走太が他の女子と会話の一つや二つしていても、何の不思議もないのだが）、麗央奈は危機感を覚え、ついに告白までしてしまった。

「ワタシね……大きくなったら、ソウちゃんとケツコンしたい！」
「な、なんだってえええ——っ!？」

ドン引きされた。おまけに泣いて逃げられた。

そのことは凄くショックだったが、告白の翌日からは、走太も多少、麗央奈のことを以前よりも女の子として意識してくれて、顔を赤くしたり、恥ずかしそうにそっぽを向いたりするようになった。

以前のように、ただの友達ではいられなくなったのは少し寂しくもあったけれど、それでもやっぱり、前よりは走太との距離が縮まった気がして、麗央奈は嬉しかった。

こうやってずっと一緒に居て、いつか走太も、自分と同じように恋してくれたらいいな――。

そんな風に思っていた。

しかし、恋の幕切れは、突然にやって来た。

ある日、麗央奈はクラスの男子達に体育館裏へと連れて行かれた。腕を掴まれて、ほとんど強制的に。

小学校に入って、赤い髪の苛めは酷くなる一方だった。が、走太には心配を掛けたくなくて、何より惨めな自分を見られたくなくて、黙っていた。

体育館裏で、赤い髪を馬鹿にされた。麗央奈は人見知りで、気が小さくて、走太以外とはまとも喋れもしなかったから、幾ら罵られても黙っていることしか出来なかった。

本当は怖かった。このまま罵られ続けたら、泣いてしまいそうだった。

でも、麗央奈にだって、許せないことはあった。

男子が、麗央奈と親しくしている走太まで馬鹿にし始めたのだ。

好きな人を馬鹿にされて、それがどうしても許せなくて、怖さなんか忘れて、気付けば麗央奈は、平手で男子の頬を思いっきり引っ叩いていた。

男子は激昂した。拳で顔を殴られた。次いで、髪を掴まれて、引っ張られる。

振るわれる暴力に、一瞬忘れていた恐怖が蘇って来た。

（痛い……、怖いよ……！）

と、その時、麗央奈の瞳が一人の少年の姿を捉えた。

ランドセルを背負った走太が、校庭の方、体育館の角に立ち、こちらを見ていた。

走太が、自分を助けに来てくれた。目頭が熱くなった。

「ソウちゃん……！ たすけて……！」

反射的に、その言葉を漏らしていた。希望の光に手を伸ばす。

けれど、その手が届くことはなかった。

走太が、背を向けたのだ。振り返らず、彼は走り去って行ってしまふ。

「え……？」

頭の中が、真っ白になった。

麗央奈は恐怖した。暴力には無い。走太が自分を置いて、行ってしまったことに恐怖した。

何故？ どうして？ 走太と目が合った。気付かなかったなんてことはないはず。つまり、走太は――

自分が苛められているのを見た上で、敢えて放置したのだ。

その事実を認識した途端、胸にぽっかりと風穴を開けられた気がした。

男子に突き飛ばされて、体育館の壁にぶつけられる。痛みは感じなかった。

胸の風穴の方が、よっぽど痛かった。

男子が拳を振り被る。いつそ、殴ってくれた方が頭がスッキリするかもしれない。

だが、殴られることはなかった。

「おい！ 何してるんだお前ら！」

寸前で、先生が通り掛かったのだ。

「やべっ！ にげる！」

男子達が顔を青ざめさせて逃げようとするが、大人の足に適うはずもなく、捕まる。

先生は麗央奈の顔を見て、男子達以上に顔を青くした。

「こいつらに殴られたのか！？ 痣が出来てるじゃないか！」

すぐに騒ぎになって、他の先生達も体育館裏にやって来る。

職員室に連れて行かれ、まもなく母が迎えにやって来た。

母が麗央奈に、何かを言った。男子達の親らしき人達がやって来て、頭を下げた。先生や親に怒られて、男子達は泣きながら、麗央奈に謝った。

どうでも良かった。そんなのは今、どうだっていい。

麗央奈の頭の中は、走太のことで一杯だった。

何故、走太は自分を置いて行ってしまったのか。

それだけが全てだった。

翌朝、殴られた頬に湿布を張った麗央奈は、走太と話したくて、彼が隣の家から出て来るのを待っていた。

何か、事情があったのだ。止むを得ず、麗央奈を置いて行かなければならなかったのだ。……いや、違う。走太はきつと、先生を呼びに行ってくれていたのだ。だからあの時、先生が助けに来てくれたに違いない。

昨日の放課後からずっと、そのように絶えることなく、自分に言い聞かせ続けている。

やがて、玄關の扉開いて、ランドセルを背負った走太が現れる。
道路に踏み出したところで、麗央奈の存在に気付いて、彼は目を
見開いた。

「ソウちゃん」

「……」

麗央奈が口を開くと、走太は視線を逸らす。

胸に開いた目に見えない風穴が、ズキリと痛む。どうして、こち
らを見てくれないのか。

麗央奈は声を震わせながら、尋ねる。

「あのね……そのね……きのうのことなんだけど——」

「レオナ」

大声で言葉を遮られる。その視線は、逸らされたまま。

「ソウ……ちゃん？」

麗央奈が顔を覗き込もうとすると、彼は言った。

「もうオレにかかわるな」

「え……？」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。

俺に関わるな——何かの聞き間違えだと思おうとしたが、その直
後に、

「オレにかかわらないでくれ……！」

もう一度、告げられる。

麗央奈は後頭部を殴られたような気分になった。

「な、なんで……！？ ソウちゃん！」

走太は両手の拳が真っ白になるくらい、強く握り締めていた。

「オレは——」

その一言は、とても深く、鋭く。

「お前をみすてたんだ！」

麗央奈の胸の風穴に突き刺さった。剣のように刺し貫いた。

走太は顔を向けずに、麗央奈の脇を抜けて、走り出す。

待って、とすら言えなかった。そんな資格は、自分には無いと思えた。

（ワタシは……ソウちゃんにみすてられたんだ……）

振り返れば、麗央奈はいつだって、走太に助けられて来た。

コンプレックスの赤い髪を褒めてくれた。友達になって、優しくしてくれた。こんな自分と、文句の一つも言わずに、一緒に居てくれた。

だというのに。自分は走太に、何もして来なかった。走太を頼って、助けられてばかりで。

ついには、呆れられてしまった。

苛められている自分を見て、情けなく思ったのだろう。

『好き』になんて、なって貰えるはずが無かった。

こんな気が弱くて、情けない自分が『恋』の対象になど、なるはずが無かった。

じわりと、視界が滲んだ。

「うつ……く……」

口から嗚咽が漏れる。俯くと、目からポロポロと雫が零れて、道路を濡らした。

その内、我慢が出来なくなつて、麗央奈は声を上げて泣いた。

「——っ！」

声を聞いた母が玄関を開けて出て来るまで、泣き続けた。

胸の風穴に深々と刺さった剣は、十年以上経った今も、抜けることはない。

『——坂。紅坂』

声が聞こえて、麗央奈は閉じていた目蓋を持ち上げる。

「あつ……はい！」

レッドラスのコクピットモニターに表示されている源平の顔を見やり、返事をする。

『大丈夫かい？ ひょっとしてまだ、体調が優れなかったりする？』心配そうな顔をする細眼の先輩に、麗央奈は首を横に振る。

「いえ、ちよつと考え事をしていて……。すみません。レッドラスの修復に集中します」

麗央奈と源平は現在、中間世界に来ていた。

次元の門の内側、学園の校庭にレッドラスとシラシオンを召喚して、そのコクピットに入り、破損する前の姿を強くイメージして、自己修復を促進させる作業を行っていた。

ゲートキーパーのボディーは、特殊なナノマシンによって構成されており、キーパーマスターのイメージを反映して、活性化する性質を持っているのだ。

『考え事っていうのは、ひょっとして、小林くんのことかい？』

再び目を瞑り、イメージを思い浮かべようとしたところで、尋ねられる。

「……」

『あれからもう、一週間か……』

源平はいつもに増して、目を細める。

ノーフェイスに敗北し、走太がロボット部の部室に足を運ぶことが無くなってから、七日が経とうとしていた。

授業も休んで、ひたすら修復作業に専念したおかげで、シラシオンはおよそ五、六割まで回復、レッドラスは失った右腕を再生し、三、四割のコンディションを取り戻すことに成功したが、ノーフェイスと戦うには、全然戦力が足りていない。

いや、戦力よりも何よりも……麗央奈にとっては、走太が居ないことによる精神的損失の方が、限りなく大きかった。

（走太……）

一週間前の、保健室での出来事を思い出す。

——俺は今だって、お前を見捨てて、逃げ出すよ。

胸がぎゅっと締め付けられる。苦しくて、心臓の部分を手で押さえる。

「……走太が部室に来なくなったのは、私が走太に頼り過ぎたからなんだと、思います」

『頼り過ぎた……？』

麗央奈は頷く。

「私が……弱いから」

どこか無意識に、走太に頼っていた。

走太とまた、一緒に居れるようになったのが嬉しくて、幸せ過ぎて、甘えてしまった。

その結果が、これだ。

頼り切って、走太に負担を掛けてしまった。これでは、昔と何も変わらない。

馬鹿だ。死ぬ程馬鹿だ。いつそ、死んでしまえ。

一度は失った幸せを、せっかく取り戻せたというのに、同じ過ちを繰り返して、また失ってしまった。

十一年間、強くなろうと努力して来たが、全然成長していない。

モニターの向こうで、源平が複雑そうな顔をする。

『紅坂……』

「大丈夫です、先輩。走太が居なくても、私が何とかします」

麗央奈はレッドラスの修復作業に戻るべく、瞳を閉じる。

（もっと、強くならなきゃ……）

強く、もっと強く。

五月三十日。ノーフェイスが繭に閉じ籠もってから、一週間が経

過した。

走太は麗央奈に怒りをぶつけたあの日以来、ロボット部の部室に行っていない。

理由は簡単で、もうブラックティラーに乗りたくないからだった。乗れば、あの底知れぬ強さの化け物と戦わなくてはならない。そんなのは御免だった。

何故なら、走太は、死ぬのが怖い。死にたくない。

人間として、抱いて当然の感情ではないか。誰が自分を責められようか。

（戦える奴が戦えばいい。俺には無理だ……！）

この前の戦いで、それがようやく分かった。

自分には、戦いが向いてない。どうしたって、恐怖を感じてしま

う。

人にはそれぞれ、出来ることと、出来ないことがある。

麗央奈や、源平は、戦うことが出来る。自分には出来ない。それだけのことだ。

走太は授業中、麗央奈の席を見やる。そこには今、彼女は座っていない。一週間前から、ずっと公欠扱いになっていた。

保健室から逃げ出して以来、麗央奈とは一切、言葉を交わしていない。彼女が家に迎えに来ることも無くなったし、一緒に登下校することも無くなった。

五月の中旬に激変した生活環境は今、何事も無かったかのように元通りになろうとしていた。

幼馴染みの少女を見捨てて逃げ出したという苦い過去があって、どうしようもない罪悪感が胸に残っていて、言葉を交わすこともままならない。気まずくて、距離を置いて過ごす。そんな日常の延長に帰ろうとしていた。

なるようにしかない、特別な変化も無い、平凡な日常。勉強を程々に頑張って、部活に行くわけでもなく、学校が終わったら、家に帰って、ゲームをしたり、漫画やライトノベルを読んだり、口

ポットアニメを観たりする。

あの日、走太が中間世界に取り込まれるまで過ごして来た、平凡な生活。

（これが、普通だったんだよね……）

胸が痛むのは、結局、麗央奈に昔のことを謝れなかったからだろ
うか。

そう思ったところで今更、謝れるはずもない。自分は、彼女の期待には応えられないのだ。

麗央奈の席から視線を外して、黒板を見る。教師の言葉を聞きながら、そこに書かれたことを板書する。チャイムが鳴って、教師が教室を出て行き、宮治を含めたクラスメイトの男子達と他愛のない話をして、笑い合う。

そうやって、授業と休み時間を淡々と繰り返し、昼休みがやって来る。

「宮治、購買に行こうぜ」

走太は財布をポケットに入れて、席から立ち上がると、いつものように悪友を昼飯調達に誘う。

ところが。

「すまん、今日は忙しくて、無理なんだ」

宮治は片手を挙げて、謝るポーズをした。

「何か用事でもあるのか？」

「ああ。学園の情報屋としての仕事でね。これからちよっくら、依頼人の所へ足を運んで来る」

「えっ、宮治が情報屋って、マジ話だったの？」

「今更！？ 前から何度もそうだって言ってるじゃん！」

彼はガツクリと肩を落とした後、走太に「ほれ」と切符のような物を手渡してくる。

「ん？ 何だこれ」

受け取って、見ると、それには『たぬきそば』と書かれていた。
「学食の食券じゃないか」

「購買に付き合えない御詫びつてわけじゃないけど、期限が今日中だから、お前にやるよ」

「購買組のお前が、どうして学食の食券なんか持つてるなんて、珍しいじゃないか」

「今朝方、別の依頼人から情報料とは別に、貰い受けたんだ。この前のお礼に、一緒にお昼でもどうですか、ってな。相手は同級生の可愛い女子だった。昼休みに、別の依頼人と会う約束をしていたので、残念ながら断ったが」

「いや、そこはためきそばを食いに行けよ！ 約束をキャンセルしてでも！」

女の子の方から食事に誘われた（しかも可愛い）というのに、それを断るなんて、勿体無さ過ぎる。

「俺だって、出来るなら彼女と食事をしたかったが、そうは行かない。情報屋つてのは、信頼関係が凄く重要なんだ。だから、依頼人との約束は、何よりも優先しなくてはならない。そんなわけで、その食券はお前にくれてやる。学食で、思う存分ためきそばを食って来い」

そんなわけで、走太は食券片手に食堂へ向かう運びとなった。

廊下を歩いて行き、昇降口を通ろうとしたところで、ちょうど階段を上がって行く、麗央奈の後ろ姿が目に入った。赤いポニーテールが左右に揺れている。

当然、声など掛けられるはずもない。

走太は、彼女に見つかる前に、階段を足早に降りる。

彼女の姿は、これまでも校内で何度か見掛けていた。授業には出ないものの、学校には来ているようで、ロボット部の部室や、生徒会室に出入りしているようだった。おそらく、ノーフェイスと戦う為の準備をしているのだろう。

宮治によれば、彼女は生徒会の手伝いをしているのだそうだ。「御門学園の生徒会は、他と違って少々特殊らしいからなあ。生徒会の活動で、何日も公欠が通っちゃうくらいだし」とも言っていた。

表向きは、そういうことになっているらしい。

（麗央奈は強いんだ。俺一人が居なくなったところで、どうにかしてくれるさ）

心の中で自分に言い聞かせて、走太は一階の廊下を進む。

渡り廊下を通過して、食堂に辿り着く。

二百席くらいある広い空間は、学生達で賑わっていた。食券を買う必要は無いので、そのまま麺類のブースに並ぶ。長い列が出来ているのは、定食や日替わりランチのブースであり、たぬきそばは五分と待たずに手に入る。

それをお盆に乗せ、箸を持ち、コップに水を汲んでから、空いていた窓際の席に腰掛ける。

そうして、たぬきそばを食べていると（一年以上学園に通っていて、初めて食べたが、意外と美味しい）、近くを通り掛かった誰かが「あつ」と声を上げた。

走太は声のした方を見やる。

そこにいたのは、一人の女子生徒だった。

中学生みたいに小柄な背丈で、色素の薄い、やや茶色掛かったショートボブの髪は、頭の天辺に、アンテナのようなアホ毛が一本立っているのが特徴的。童顔だが、目鼻立ちは整っており、素朴ながらも可愛らしさに溢れている。

走太は彼女のことをよく知っていた。何故ならば、彼女は――

「……小林先輩。何やってるんですか、こんなところで」

生徒会メンバーにして、キーパーアシスト。加えて通信オペレーターという役職を持ち、

「一週間も音沙汰無しだった癖に、いざエンカウントしてみれば、食堂で優雅に昼食とは、いいご身分ですね」

キツイ物言い、いつも走太の心を抉ってくれる後輩であった。その名を、蓬菜菜美子という。

「な、菜美子ちゃん……」

彼女は、童顔で大きな瞳をジト目をして、言う。

「個人的には大変遺憾なんですが、他に空いている席が無いので、向かいに座ってもいいですか？ 構いませんよね？」

「え、えっと……」

「それでは向かいの席、失礼します」

「気まずくて答えに迷う走太の返事など知ったことか、とでも言うように、菜美子は向かいの椅子を引いて、どかっと腰を下ろす。お盆をテーブルの上に置く。

お盆には、唐揚げ定食が乗せられていた。

「私、小林先輩に言いたい文句が山程あるんですよ。どんな文句かって、わざわざ説明しなくても、おおよそ想像は付きますよね？」

「……」

「あれから、一週間が経ちました。生徒会の予測ではもう、ノーフエイスがいつ繭から出て来てもおかしくないとこまで来ています」
走太は菜美子の顔を見ることが出来ず、黙って俯き、手元のためきそばを眺め続ける。

菜美子は構わず、口を動かす。

「先輩が生徒会の呼び出しに全く応じなくて、皆困っています。何故、ロボット部の部屋にも、生徒会室にも来ないんですか？ どうして、授業が終わったら、すぐに帰ってしまうんですか？」

「……」

「後輩相手に、いつまで黙ってるつもりですか、小林先輩」

「俺は……」

「何です？」

「もう、ゲートキーパーには乗らないって、決めたんだ」

「どうしてですか？」

「そんなの……戦うのが怖いからに決まってるじゃないか……！」
菜美子は溜め息を吐いて、

「とんだヘタレですね」

「ああ、そつだよ。俺はヘタレなんだ。麗央奈や神谷先輩みたいに強くない！」

「つまり、小林先輩は、ゲートキーパーで戦って世界の平和を守ることよりも、自分の命の方が大事ってことですか？」

「その何が悪いんだよ……。普通の人間は、死ぬのが怖い、死にたくないって思うだろ！？」

「先輩、馬鹿じゃないですか？」

「なっ……。！？」

「確かに、私だって、死ぬのは怖いです。けど、先輩は大事なことを忘れてます。もしもこのまま、ノーフェイスを倒すことが出来ずに、現実世界への侵入を許したら、どうなりますか？ 冗談抜きに、世界は滅びますよ。そしたら当然、小林先輩も死にます」

「っ……。！」

走太は顔を上げて、後輩の少女を見る。

「先輩は、現状を見て見ぬフリして、逃げてるだけです。ピーマンが嫌いだから食べませんって、ワガママを言ってるようなもんです。死ぬのが怖いから戦わない？ 言っておきますけど、今回は戦わないと死にますよ、先輩」

お盆から味噌汁のお椀を取り、口を付ける菜美子。唐揚げを食べ、ご飯を口に運ぶ。

彼女はもぐもぐと口を動かし、飲み込む。

「……あと、小林先輩、他の二人の先輩を強いつて言いましたけど、何をもって強いと判断してるんですか？ 戦うことに恐怖を感じてるのが、自分だけでも思ってるんですか？」

「え？」

「だとしたら、勘違いも甚だしいです」

菜美子はテーブルに身を乗り出し、走太に顔を近付け、至近距離から言う。

「自惚れないで下さい。怖いのは皆一緒です」

意思の籠もった大きな瞳に圧倒される。言葉が出ない。

彼女は視線を外さぬまま、続ける。

「怖さを感じない人間は、心が麻痺しているだけです。それは強さ

でも何でも無い。強い人間ってというのは、恐怖を感じてもなお、勇気を振り絞って前に進む人のことを言うんです。先輩は自分のことを強くないって言いましたけど、それはただ、強くなるうとしていないだけです。努力を放棄しているだけです」

そこまで言って、菜美子は近付いていた顔を離し、席に座り直す。「小林先輩が怖いという理由で戦わないのは、ただの言い訳です。紅坂先輩も、神谷先輩も、生徒会メンバーの皆も、どんなに怖くたって、誰一人逃げ出さずに、ノーフェイスと戦おうとしています。他ならぬ、自分達の世界を守る為に。それを知ってなお、何もせず戦わないと言うのなら、先輩はもはや、ヘタレですらありません」彼女は箸で唐揚げを挟み、齧った。

「ただのクソ野郎です」

後はもう、何も言わず、ぱくぱくと唐揚げ定食を平らげる。「ごちそうさまでした」と言って、お盆を持ち、彼女は席から立ち上がった。

走太にだって、反論したいことは山程あった。でも、それよりも考えることの方が多かった。頭の中で色んな考えがぐるぐると回っていた。

菜美子は去る直前、ためきそばも食わず、閉口する走太に言った。「……目上の方に対して、色々失礼なことを言いました。ご無礼をお許し下さい」

そうして、頭を下げる。

走太は驚いて、目を見開いた。

「菜美子ちゃん……!？」

「私は、小林先輩は別に、ヘタレのままでもいいと思ってます」「え?」

「それだけです。では」

彼女はもう一度会釈して、背中を向けると、振り返ることなく食堂から出て行く。

その後ろ姿が見えなくなるまで、走太は眺めていたが、やがて、

たぬきそばに向き直る。

（俺は……）

とりあえず、麺が伸び切る前に食べてしまおうことにした。

たぬきそばの次は、ラーメンだった。

午後の授業は、ノートの板書をこなすだけで、頭の中では菜美子に言われたことをずっと考え続けていた。

かといって、放課後になり、ロボット部の部室、もしくは生徒会室に行く気にはなれない。

誰も居なくなつた教室に一人残り、窓際の机に尻を乗せ、校庭の様子を眺める。

陸上部がトラックを回り、サッカー部が実戦形式の練習を行っている。

そうしている内に、背後から声を掛けられた。

「小林くん」

振り向くと、教室の扉のところに、細眼の男子生徒が立っていた。

「神谷先輩……」

「やあ」

いつもの爽やかさで、神谷源平は微笑む。

「えっと、先輩、俺は……」

走太が何を言うべきか迷う中、彼は教室に入り、歩み寄って来る。

「一週間ぶりだね。元気にしてたかい？ 全く音沙汰が無かったから、結構心配してたんだよ？」

「すみません……」

「メールには返信してくれないし、電話にも出てくれないからさ。こうやって、直接出向くことにしたんだ。二年生玄関で待っていたんだけど、教室に居たんだね」

そう言って、源平は走太の肩をポンポンと叩く。

「俺を呼び戻しに来たんですか？」

走太は彼の顔色を伺いながら、尋ねる。

「違う……とは言い切れないけれど」

源平は首を横にも、縦にも振らず、走太の肩に手を置いたまま、
「ただ、僕は先輩として、このまま小林くんと何も話さずに終わってしまふのはいけないと思ったし、個人的にも、何か嫌だった。考えてみればさ、僕と小林くんって、私的に話したことが、一度も無かったじゃない？ あくまで公的な先輩と後輩としての間柄だったっていうかさ。だからー」

親指で教室の出口を示しながら、言った。

「一緒にラーメンでも食いに行かない？」

源平と共に向かった場所は、御門駅の駅前にある、最近オープンしたばかりのラーメン屋だった。

クラスの男子達と会話していた時に一度、「駅前のオープンしたラーメン屋が、かなり美味くてさー」と話題に上がったことがあり、走太も機会があれば来てみたいと思っていた。

ここ最近、麗央奈やゲートキーパーのことで色々あったから、この店の存在はすっかり忘れていたのだけれど。

まさか、こんな形で来ることになるとは思わなかった。

店の前には長蛇の列が出来ており、源平と二人並んで、待つことになった。

前に並んでいる源平が、細い目を振り向かせて、言う。

「いやー、結構並んでるねー」

「は、はい……。二十人くらい並んでますね」

「校内で話題になるだけあるよね。部活終わりの時間帯がピークだつて聞いてたから、放課後すぐに来てみたんだけど、まさかこれ程とはね……。一体、ピークの時間帯にはどれだけ並ぶのやら」

「そ、そうですね……」

「……もしかして、小林くん、僕と話すの、結構緊張していたりする？」

「あつ、いや、そんなことは……！」

口ではそう答えたが、実際はかなり緊張していた。

一歳年上の先輩であることを意識しているのもあるし、一週間逃げていたことによる気まずさもある。

ロボット部の部室で話す時は、いつも麗央奈が居たし、源平とこうやって二人きりで落ち着いて話すのは、実は初めてだった。

源平は手をひらひらとさせる。

「そんなに肩肘を張らなくてもいいよ。たった一個違うだけなんだし。それに今は、男同士、交流を深める為に来てるわけだしさ」

「す、すみません。俺……この間までずっと、帰宅部だったんで、高校に入ってから、上級生と話す機会とか全然無くて」

「他の人がどうなのか知らないけど、僕は、学年とか関係なくて、後輩とは友達になりたいと思って。実を言うと、こうやってさ、放課後に後輩と食事に行くの、割と夢に見てたんだよね」

「えっ、でも、麗央奈とか、生徒会メンバーの二年生がいるじゃないですか」

「そうなんだけど、ほら、紅坂は女の子で異性だし、生徒会メンバーは、僕の直接の後輩ってわけではないじゃない？ だからなんか『僕と友達になりませんか』って理由だけでわざわざ誘うのは、どうなのかなって思っちゃってさ」

「……神谷先輩でも、そういうことに躊躇ったりするんですね」

「あれ？ 何かそのニュアンスだと、僕が物凄く押しが強い人間みたいに聞こえるんだけど……」

「俺をキーパーマスターとして、ロボット部に引き込んだのは、先輩じゃないですか」

忘れたわけではあるまい。

「そこはまあ、ゲートキーパーが二体しか居なくて、おまけに僕の

シラシオンは修復中で、戦力不足だったのが大きいかな。男のキーマスターが選ばれたっていうのを聞いて、いよいよ僕にも男の後輩が！ って嬉しくなったのもあるけど」

源平はそこで一端、言葉を切る。

並んでいる列が五、六人進む。

「話は変わるけどさ」

「はい」

「小林くんって、紅坂のこと、好きなの？」

「でええっ!？」

走太は思わず奇声を上げた。

源平は、にやにやと楽しそうな笑みを浮かべる。

「好きなんだ？」

「いや、その……何というか……」

「やつぱりなあー、そうだと思ったんだよね。どんなところが好きなの？」

「どんなところって……」

「色々あるじゃない。整ってる顔立ちだとか、胸が大きくて、腰が細くて、モデル体型なところとか。性格も面白いと思うし」

「……」

走太は、ぱくぱくと金魚のように口を動かすだけで、何も言えない。顔が猛烈に熱かった。

源平は特に問い詰めようとはせず、

「まあ、いいさ。今日ラーメン屋に誘った理由の二つ目は、紅坂のことについてなんだ」

「麗央奈の……?」

「うん。小林くんも知ってる通り、ノーフェイスが繭に籠もってから、一週間が経つ。生徒会が繭の内部を解析したんだけど、明日にでも繭から出て来る可能性が高いという予測が出た」

その話は、今日の昼休み、菜美子からも聞かされていた。

「僕はね、小林くん。君が戦いから逃げ出しても、仕方が無かった

「思ってる」

「え？」

「だって、余りにも酷いじゃないか。この間のジャガーも、今回のノーフェイスも、小林くんが戦う必要を迫られている」

源平は顔を前に向けて、続ける。

「僕や、去年まで戦っていた先輩達は、比較的弱い次元獣を相手にすることで、戦闘に慣れていった。」

ところが、君はそうじゃない。最初から、死闘だ。戦闘経験があるが無かるうが、自らの生命と世界の命運を賭けて戦わなければならなかった。

それを知っていながら、僕は君の背中を押した。戦力が足りず、状況が切迫していたから、強引でも何でも、君に戦闘を押し付けて成長を促したんだ。

けど、この前の戦いは余りにも酷過ぎた。成長を促すとか、そんなこと言ってる場合じゃなくて、危うく君を死なせ掛けた。完全に僕の判断ミスだ。ノーフェイスがいかに強いかわかっていたはずなのにね。

……あんな経験をしたんだ。小林くんが逃げ出すのも、無理はないよ。

今では凄く反省してる。……ごめん」

「神谷先輩……」

源平の真面目な言葉に、走太は何も言えなくなる。

沈黙が流れている間に、列がまた数人進む。

前を向いたまま、源平が口を開く。

「ただ、それでも、どうしても小林くんに知って置いて欲しいことがあったんだ」

「……それが、麗央奈のことなんですか？」

彼は頷いて、

「詳しいことは、ラーメンを食べながらにでも話すよ」

「ノーフェイスと戦う以前にさ、僕のシラシオンが、修復中だって話をしたじゃない？」

ラーメン屋に入り、二人席に腰掛け、この店の看板メニューであるトンコツラーメンを食べながら、源平は語る。

「はい」

「当然、次元獣と戦闘した結果、損傷を受けたんだけどさ」

源平の話によると、シラシオンが損傷を受けた戦闘は、今から一ヶ月半程前のこと。

相手はかなりの強さを持つ次元獣であつたらしく、源平と麗央奈は、二人がかりで戦つても、苦戦を強いられたのだという。

「僕が接近戦を担当して、紅坂には中距離からの援護を頼んでいた。基本的には、いつもそれで戦っていたんだ。でも、その日は敵の次元獣が強力で、僕が押され気味だった」

その状況を見兼ねたのだろう、麗央奈は中距離の援護を止めて、源平が決定打を与える隙を作るべく、敵に接近戦を挑んだ。

しかし、その判断は間違いだつた。

「紅坂は接近する途中で、次元獣から逆に隙を突かれてしまったんだ。そこから一気に押されて、レッドラスはピンチに陥った」

接近戦では持ち味の火力が十分に活かせず、反撃の糸口を掴めぬまま、レッドラスは押され続けた。

「このままではいけないと思って、僕は紅坂に、一旦距離を取るように言った。けれど、何故かレッドラスはその場から退こうとはしなかった。それどころか――」

気付けば、レッドラスはガードすらしようとせず、その場で棒立ちになっていた。

次元獣がそこを狙わないはずは無く、レッドラスは危うく破壊されそうになった。

「僕はすかさず飛び込んで、次元獣の攻撃を受け止めた」

シラシオンが、次元獣からレッドラスを庇ったのだ。

その後、源平は何とか次元獣を撃破する事に成功したが、シラシオンは、庇った際に受けた大きなダメージで、一ヶ月以上に及ぶ修復を余儀なくされた。

「問題は、その後だった。戦闘が終わったというのに、レッドラスに動く気配が無かったんだ。何かあったのかもしれないと思って、通信で呼びかけたらー」

源平はラーメンを一口食べてから、言う。

「紅坂は、泣いていた」

「え……？」

「コクピットの中で、膝を抱えて、震えて、泣いていたんだ」

「麗央奈……が……？」

どうして、という言葉が、頭の中で反芻される。

「僕も、正直驚いた。紅坂は、ゲートキーパーに初めて乗った時から、泣き言の一つも漏らさなかったから。学園で噂される通りの、常に凜として格好良い女の子だと思っていた。でも、違ったんだ」

呆然とする走太に、源平は告げる。

「紅坂はさ、怖かったんだよ、本当は。それをずっと、我慢して、戦ってたんだ。考えてみれば、当たり前のことだった。十代の女の子が、あんな得体の知れない怪物と戦って、怖くないはずが無かったんだ。僕が勝手に、紅坂はこういう奴だ、って思い込んでただけで」

「……」

走太はトンコツラーメンを食べることも出来ない。

「ただ、泣いていたのは、その時だけで、翌日には『申し訳ありませんでした。ご迷惑をお掛けしました』って、ロボット部の部室にやって来て、頭を下げた。紅坂は、それから強い意志が籠もった瞳で言ったよ。『もっと強くなります』って」

「あっ……」

それはかつて、走太も保健室で聞いた言葉だった。

「その言葉を聞いて僕は、思ったんだよ。紅坂は、何か理由があって、強くなるうとしてるんじゃないかって。理由は聞けなかったけど、彼女の戦いを見ていると、そんな風に思う。どこか、無理を通そうとしている。僕が出撃出来なくなってから、ずっとそうなんだ。被弾するのを恐れずに、敵の懷に飛び込んだり、パワーで強引に敵をねじ伏せたり」

「……」

「だから多分、次のノーフェイス戦も相当な無茶ををすると思う。今回のことで、小林くんが部室に来なくなつて、紅坂は小林くんに頼り過ぎたつて、責任を感じてた。きつと、いつも以上にがむしゃらに戦おうとする。下手をしたら……命を落とすかもしれない」

麗央奈が、命を落とす。

その言葉に、走太は動悸が激しくなる。

「でも、かといつて、ノーフェイスと戦わないわけには行かない。次の戦いで奴を倒さなければ、今度こそ次元の門は突破される。それを阻止するには、紅坂の力が、どうしたつて必要なんだ。お前は無茶をするから出撃するな……なんて、言える状況じゃない。僕だつて命を賭けて戦うことになるだろう」

源平は、細い目を開いて、走太を見た。

「いずれにしても、小林くんには、紅坂のそういう部分を知つて置いて欲しかった。君にとつて、紅坂は大切な存在のはずだろうから僕は君に、後悔して欲しくない。だから、彼女を守る為にも、小林くんにはもう一度、ブラックテイラーに乗つて、力を貸して欲しいと思う」

そこまで言つて、源平は目を細くし、「ラーメンが伸びちゃうから、食べよう」と箸を動かす。

走太は頷いて、トンコツラーメンを口にする。

ラーメンを汁も含めて完食し、会計を済ませて、店を出る。

日は傾き、駅周辺の街並みは、オレンジ色に染まりつつあった。

走太が駅の方へ向かうとすると、源平は足を止めて、

「じゃあ、小林くん。僕は今日、学校に泊まるから」

「泊まる……？」

「ほら、いつノーフェイスが繭から出て来るか分からない状況だし。家に帰ろうにも、何となく、落ち着かなくてね」

「俺は……」

「小林くんは一旦、家に帰って休むといいよ」

「いいんですか？」

「考えることもあるだろうしね。万が一ノーフェイスが出て来たら、伝わって来る感覚で、小林くんにもそのことが分かるはずだよ。後の判断は、君に任せる。もしも戦いたいと思うなら、その時は、心の中でブラックテイラーに強く呼び掛ければいい。きっと、君を中間世界に導いてくれるはずだ。……そんなわけで、今日は食事に付き合ってくれてありがとう。小さな夢も叶って、僕としては楽しかったよ」

彼は爽やかな笑みを浮かべ、手を振り、

「またね、小林」

背中を向けて、去って行くこととする。

「神谷先輩！」

走太は彼を呼び止めた。

「なんだい？」

「先輩も……次元獣と戦う時は、怖いですか？」

彼は最初、驚いたような顔をしていたが、やがて頷く。

「もちろん、怖いよ」

「じゃあ、どうして先輩は、怖いのに戦うんですか？」

「怖いのにどうして、か……。うーん、僕の場合はそう……『意地』かな」

「意地？」

「去年まで一緒に戦ってた先輩から、後を任されたことによる意地。今まで先輩達が守って来たものを、僕が守らないわけにはいかない。それから、先輩がかつて僕を守ってくれたように、僕も後輩を守ら

なくてはいけない。だから、僕は怖くても戦うんだと思う」

源平は、「こんな答えでいいかな？」と首を傾げる。

走太は頭を下げて、答えとする。

ロボット部の先輩は、今度こそ手を振り、去って行った。

源平に言われた通り、走太は家に帰った。

風呂に入って、自分の部屋に行き、明かりを点けぬまま、ベッドに仰向けになった。身体は妙に疲れていたが、頭の方は麗央奈やノーフェイス、菜美子や源平の言葉について考え続けていて、なかなか寝付けなかった。

走太は自室の暗い蛍光灯から垂れ下がる紐を見て、特に意味もなく、手を伸ばす。届かない。

起き上がれば、その紐を引いて、明かりを点けることも出来るだろう。

しかし、走太は伸ばしていた手を諦め、ぼふつとベッドに落とす。

——そうして、いつの間にか眠ってしまったらしい。

瞼をゆつくりと開け、薄暗い部屋を見回すと、カーテンの隙間から朝日が射し込んでいた。

枕元の目覚まし時計が示す時刻は、六時二十八分。

何か不気味な感覚に襲われて、飛び起きるといふようなことは無かった。ということは、ノーフェイスはまだ、繭から出て来ていないはずだ。

カーテンを開ければ、いつもと変わらぬ世界がそこにある。

ついでに、源平からメールが来ていた。受信時刻は、午前六時ジャスト。

『今のところ、繭に異変無し』

安心する一方で、強大な敵がまだそこに存在しているという事実を突きつけられて、身震いもした。

目覚まし時計のアラームを切り、寝間着から制服に着替え、鞆を持ち、一階に降りる。

「おはよう」

麗央奈が起こしに来なくなつて、ここ一週間機嫌の悪い母に挨拶をすると、返事の代わりに「ふん」と鼻を鳴らされる。

走太は食卓の席に腰掛けて、テレビを点けて、朝のニュースを観る。

母は台所に立つて、朝食を作っている。

ふと、

「クソガキ」

母が口を開いた。

「なんだよ、母ちゃん」

「麗央奈ちゃんは、いつになったら、家の食卓に顔を出してくれるんだ？」

「……」

答えられなかった。

「さつさと仲直りしやがれ。面倒臭いことしてんじゃねえ、このヘタレ」

「……うるせえよ」

「走太」

「え？」

名前で呼ばれて驚き、台所の方を見やった。

「お前のヘタレさと、何かを抱え込もうとする癖は、間違いなく俺からの遺伝だよ」

母は手元を見つめ、調理を続けながら、

「俺はさ、高校で走一さんに出会ったんだけど、もしも走一さんが告白してくれなかったら、俺は一生、走一さんに自分の気持ちを伝えられなかったと思う。そしたら多分、今も独身だった」

「と、父さんが告白したの!？」

絶対に逆だと思っていた。のほほんとしている父に対して、母が「てめえ、今日から私の恋人になれ!」というような感じで迫って押し切ったのだろうと考えていた。

「小学一年生の時に、お前、麗央奈ちゃんと喧嘩して、疎遠になっただろ。俺がどんなに問いただしても、キレて拳骨を喰らわしても、お前は絶対に口を割ろうとはしなかったよな。『俺はもう、麗央奈と関わらないんだ!』って、強く言って」

「……うん」

十一年前、何があったのかは、母にも父にも言っていない。これは自分の問題だ、自分が一生抱えて行くべき胸の傷だ、と幼心に思っただけだった。

「俺はお前の目を見て、何も言えなくなった。何かを強く抱え込む目。やっぱりお前は、俺の血を引いてんだな、って思ったよ。普段は全然怒らない走一さんも、あの時ばかりは本気で怒ったよな。それでもお前は、何があったか答えなかった。」

……けどさ、この間、麗央奈ちゃんがお前を起こしに来た。十一年間疎遠だった麗央奈ちゃんが、昔みたいににお前と仲良くなっていた。俺は……本当に嬉しかったんだぜ? 同時に、走太、お前は俺とは違うんだって思った」

「違っって?」

「お前は、走一さんの血も引いてるってことさ」

「父さんの?」

母は頷く。

「俺に告白して、相思相愛の言葉を引き出させた、イケメンの血を半分、お前は引いてる。十一年掛かったけど、それでもお前は、麗央奈ちゃんと和解してみせた」

「それは……偶然が重なっただけだよ」

「だとしても、お前は、俺と違って、自分の気持ちを素直に言えるはずなんだ、きっと。俺はそう信じることにした。だから、十一年

前は諦めたが、今回は諦めない。俺は何度だって、お前を罵倒する！」

彼女は台所から、走太の方へ歩き出し、言った。

「さっさと麗央奈ちゃんと仲直りしろ、このクソガキ！ また十一年も掛ける気か？ さっさと今日中に謝って、明日の朝からまた、起こしに来て貰え！」

食卓の前まで来て、手に持っていた丼を、走太の前にドン！ と置く。

「必勝祈願だ。食ってけ、ヘタレ息子！」

「うおっ！？」

出された朝食は、なんとカツ丼であった。

「どうだ、美味そうだろう？ 俺の自信作だ！」

「いや、朝からこれはちよつと……」

胃がもたれそう。

「うるせえ！ ごちやごちや言ってない食え！」

「ちよつ、俺の箸！ 何！？ 無理矢理食わせる気なの！？ 分かった、自分で食うから！ カツをこっちに近付けないで！ 熱っ！？」

やがて、二階の寝室から降りてきた父が、走太達を見て、「今日も二人は仲が良いね。思わず妬いてしまうよ」と言っ、微笑んだ。

母に背中を押されて、家を出て、一人で電車に乗り、学校に着く。麗央奈の席を見やるが、そこには誰もおらず、朝のHRが始まった。その空席が埋まることは無かった。

（どうする、俺……）

走太は未だに悩んでいた。

今すぐにでも、ロボット部の部室に行くべきかどうか、考えていた。

いや、行くべきなのは分かっている。そんなことは最初から知っている。

菜美子ちゃんの言う通り、死ぬのが怖いからと言い訳をして、逃げているだけだ、自分は。

（だからって、決められねえよ、そう簡単には……）

何故なら走太は、今日までずっと逃げ続けて来た。

怖いことや、辛いことと戦わず、それらから逃げることで生きて来たのだ。

昨日の今日で、「逃げずに戦え！」と言われても、その術が分からない。どうやって戦えばいいの分からない。

どうやってたら自分は、ここから一歩踏み出せる？

どうやってたら、その勇気が手に入る？

「小林くん」

「えっ？」

名前を呼ばれて、顔を上げると、英語担当の女性教師が、教卓のところから走太を見ていた。

「ぼーっとしているようなので、指名させて頂きました。この英文を訳して下さい」

「あ……はい」

気付けば、朝から大分時間が経過しており、今はちょうど、三時限目の『英語』の授業中だった。

走太は席から立ち上がって、黒板の英文を見やり、訳そうとして

全身を内側から揺さぶるような感覚に、よろけた。

「ぐっ……！？」

膝が折れて、崩れ落ちそうになる身体を、両手を机に着いて、支える。

その際に机がズレて、大きな音が教室内に響く。

英語教師が驚いた顔をし、クラスメイト達が振り向いて、走太を見た。

「だ、大丈夫ですか、小林くん？ ひょっとして、具合が悪かったりする？」

戸惑いの声を上げる英語教師。

走太は返事をする事が出来ない。それどころじゃ無かったからだ。

心が激しくざわめいて、鳥肌が立つ。

ついに、この時が来てしまった。

源平が言っていた通り、走太にも分かった。

（ノーフェイスが……繭から出て来る……！）

中間世界のショッピングセンターは、一週間前から半壊したままの姿で存在し続けている。

放って置けば、現実世界と同じ形に再生するはずなのだが、ショッピングセンターの中心にある巨大な繭が、それを妨げていた。

全長四十メートル程の、硬質な、鉄色の繭。

そして今、繭の表面には亀裂が走り、中から次元獣が姿を現そうとしていた。

金剛雅は、指令室のメインモニターで、その光景を眺める。

「思っていたより、長く繭に閉じ籠もっていたな……。まあ、その方が有り難かったわけだが」

どうせ長く閉じ籠もるなら、シラシオンとレッドラスの修復が完全に終わるまで、待っていて欲しかった。

繭の亀裂は全体に広がり、上面を突き破って、そこから一本の腕が覗く。

さらに一本、腕が飛び出して、開いた穴をこじ開けて行く。
やがて、爆発するように繭の外殻が全て弾け飛んだ。

そこには、一週間前と同じ、背中に翼、双肩にキヤノン砲を生やしたシルエットの、人型が立っていた。

以前と異なるのは、全身タイツのようなボディーの色が、鉄色から真珠に似た白色——つまりはパール色に変化していること。表情を作るパーツを持たない顔面は、美しい虹の光彩を放って、さらに不気味な物へと変貌を遂げている。

果たして、次元獣『ノーフェイス』は、一週間の休息を経て、再び活動を開始した。

鈍い印象だった鉄色のボディーを捨てさり、煌びやかなパールカラーを全身に纏ったノーフェイスは、背中に生えた翼も合わせて、雅には、シラシオン以上に天使らしく見えた。

ただ、あれはシラシオンと違って、人類を守ってくれるような守護天使ではない。

人類に裁きを下す為に舞い降りた、恐るべき使徒だ。

いや、創造と再生の能力を持つノーフェイスは、使徒と言うよりも神そのものと言った方がいいのかもしれない。

だが、相手が神だろうが何だろうと、自分達は戦って、倒さなければならぬ。

他ならぬ、自分達の世界を守る為に。

「蓬萊！」

「はい、生徒会長」

インカムを付けた菜美子が、パソコンから雅に視線を移す。

雅は彼女に言った。

「神谷、紅坂の両名に、通信を繋いでくれ」

「了解です」

「来た……！」

朝からレッドラスのコクピットに入り、源平のシラシオンと共に

機体の修復作業を進めていた麗央奈は、全身を駆ける振動に、閉じていた瞳を開ける。

中間世界という空間が、大きなエネルギーを感じて、軋み、揺れていた。

モニターのウィンドウに映った源平が、頷く。

『どうやら、そうみたいだね。昼間を選んでくれたのは、不幸中の幸いというべきか。悪くない時間帯だ。心の準備も出来ていたしね』

と、モニター上に新たなウィンドウが開き、そこに生徒会長の姿が映し出される。

『神谷、紅坂。状況はお前達にも分かっているな？ たった今、ノーフェイスが繭を突き破って、活動を再開した』

『金剛。ノーフェイスの外見は、以前と比べて、何か変化はあった？』

『想定パターンの範囲内だ。シルエットは全く変化していない。翼とキヤノン砲は生えたまま。変わったのは身体の色で、真珠のような白色——パール色に変化していた』

『ということは、作戦は、昨日の打ち合わせ通りでいいんだね？』

『ああ。ノーフェイスがブラックテイラーと同じように、イメージすることで身体構造を変化させているのだとすれば、奴も必ず、アレを持っているはずだ』

『了解した。紅坂、そういうわけで、レッドラスの火力に頼ることになるけど、大丈夫かい？』

モニター越しに二人の話を聞いていた麗央奈は「はい」と力強く頷く。

「それで問題ありません」

レッドラスのコンディションは、本来の三、四割。

最大火力のクリムゾンノヴァを放つても、ノーフェイスに致命的なダメージは与えられないだろう。

しかし、足りない出力は、気力でカバーする。強い自身をイメージすれば、レッドラスはそれに応えてくれるはずだ。

ゲートキーパーとは、そういう機体なのだ。

源平がしばし考えるように沈黙していたが、口を開く。

『よし、なら出撃しよう。小林が来るにせよ、来ないせよ、作戦通りに行動する』

「……」

走太の名前が出て、麗央奈は胸が少し痛んだ。

彼は多分、来てくれないだろう。

走太に頼ってはいけない。自分が強くない限り、彼は自分の傍に居てはくれない。

だから、この戦いは、走太の力を借りずに勝つ。

ノーフェイスを倒して、自分が強くなったことを証明する。

『行こう！』

「……はい！」

シラシオンが白銀の翼を広げ、南方の空へと飛び立つ。

麗央奈もレッドラスのブースターを点火し、後続く。

（お願い。私に力を貸して、レッドラス……！）

操縦桿を握り締め、イメージする。

恐れず、挫けない心。

堅固たる装甲を持ち、圧倒的火力で全てを突破する、レッドラス。どうか自分に、何にも負けない強さを。

源平は、シラシオンをノーフェイスのもとへ向かわせながら、モニターのウィンドウに映る、険しい顔立ちをした麗央奈を見やる。彼女はおそらく、走太は来ないと考えているのではなからうか。そんな気がする。

走太や麗央奈には言っていないが、十一年前、幼かった二人に何があったのかを源平は知っていた。ゲートキーパーのことも含め、学園内のことに詳しい崎原宮治から、教えて貰ったのだ。

珍しく情報の提供に渋っていた宮治だったが、一週間前からロボットの部室に来なくなった走太や、黒い瞳に何か決意のようなものを秘めつつも、時折浮かない顔をする麗央奈に、先輩として何か出来ることをしたいのと言うと、協力してくれた。

源平は背後の御門学園の方に、視線を向ける。

そこに、ブラックティラーの姿は確認出来ない。

（小林……）

麗央奈が諦めてしまっている、源平は最後まで諦めずに待とうと思う。

（紅坂を助けてやれるのは、君だけだ）

物理的に守るだけなら、自分にも出来る。

しかし、本当の意味で彼女を救ってやれるのは、走太だけだ。

ノーフェイスとは、どんな状況になろうが全力で戦う。けれど、ブラックティラーが加勢に来てくれることを信じようと思う。

希望に縋るとか、そういうことではない。もっと純粹に――

ただ先輩として、後輩を信じたいのだ。

（僕は、小林に言いたいことは全部言った）

後は、あの男に託す。

そして、走太を信じる。

『神谷先輩！ ノーフェイスを目視で確認！』

麗央奈の言葉に、源平は前方へと向き直る。

繭が存在していたショッピングセンターから少し北――御門学園側の位置を、全身パール色の巨人が歩いていた。

分割線の少ないボディと翼を、美しいパール色で染めた次元獣は、一種の神々しささえも感じさせる。天使、使徒、神といったワードが、源平の頭の中で回る。

「シリシオンとキャラが被ってるじゃないか……！」

思わず口走る。

雰囲気は似ているが、スペックでは、再生や創造が出来るノーフェイスの方が、圧倒的に上だ。

「紅坂」

『はい』

「作戦の通り、まずはとにかく、頭部と胴体を狙って攻めて、損傷を与える。それで倒せるなら万々歳だけど、金剛の考えが合っているなら、おそらくノーフェイスは極力避けて来るはずだ。外見のシルエットは変化してないけれど、以前とは異なる能力や兵器を使用して来る場合もある。慎重に攻撃を行ってくれ」

『了解です』

「じゃあ、まずは初撃。ミサイルで派手に頼む！」

『はい！ 行きます！』

麗央奈が言い、レッドラスの肩と、脚部のアーマーにあるハッチを展開する。

『ターゲット……ロック！ ミサイル一斉発射！』

合計二十発のミサイルがまとめて放たれ、ノーフェイスへと一直線に向かって行く。

源平は、シラシオンの翼のブースターを全開にして、突撃を開始する。

真正面から襲い来る二十発と一体の脅威に気付かないはずが無く、ノーフェイスは肩のキャノンを構えて、迎撃しようとする。

「させない！」

源平は向かうミサイルの隙間を縫って、シールドの先端を向け、ビーム砲を撃つ。

ノーフェイスが身体を捻って、それを回避。

だが、牽制としての意味は果たした。ノーフェイスはミサイルの迎撃に間に合わなかったのだ。

二十発全てのミサイルが着弾し、市街地の真ん中で盛大な爆発が起きる。もうもうと上がる黒煙。

源平は反撃に警戒しつつ、黒煙が収まるのを焦らずに待つ。

攻撃を受けたノーフェイスは、右翼と右腕を失っていた。見事なまでに、粉々に破壊されている。

「やはり……！」

雅の予測は、当たっていた。

ノーフェイスの身体は、一週間前よりも脆くなっている。

雅によれば、

「ノーフェイスが、その身体構造を現実世界に進出する為の仕様に変更したとすれば、情報密度が同じでも、一週間前のような防御力を保つことは不可能だ。現実世界に存在し得る素材で身体を構成しなくてはならない。故に、ノーフェイスは以前よりも身体が脆くなるはず」

とのことだった。

ノーフェイスが繭から出て来るのを待った理由の一つが、これであつた。

（これなら、勝算はある……！）

源平はすかさず、シリシオンを急加速させて、パール色のボディに肉薄する。

右腕と右翼を再生される前に、与えられるだけダメージを与える。出来るならば、そのまま押し切って倒す。

「はあああ！」

強い斬撃のイメージをブレードに乗せて、振るう。

ノーフェイスの左腕を、根本から切り取った。

これで今、ノーフェイスは避ける以外に防御方法が存在しない。行ける、と源平は思った。

振るったブレードの柄を、シリシオンの両手のマニピュレーターで、ぐっと握り締める。

「これで！」

胸部のど真ん中に向けて、刺突を放った。

この至近距離では、避けようとも間に合わない。

白銀のブレードがノーフェイスのボディーを刺し貫く……はずだ

った。

しかし、次の瞬間。

「なっ……!!?」

ノーフェイスは両腕を再生させて、真剣白刃取りでブレードを受け止めていた。

タイムラグなど微塵もなく、一瞬で損傷面から腕が生えて、そのまま防御行動に出たのだ。

恐るべき再生速度。まさに超速再生。

源平は、このままではまずいと回避行動に出るべく、ノーフェイスと距離を取ろうとする。

が、白刃取りされたブレードが抜けない。微動だにしない。

わずか数秒、その場に立ち止まってしまったことで、隙が生まれる。

ノーフェイスの破壊されていた右翼が瞬時に原型を取り戻す。両翼合わせて十機のダンシングフェザーが射出される。

「くっ……!!」

源平はかろうじてそれに反応、回避が間に合わないと判断して、シラシオンの翼からもダンシングフェザーを放つ。

シラシオンに向けて一斉に銃口を構えた敵の遠隔誘導端末を、味方の遠隔誘導端末で全て撃ち落とす。

源平は、はっとなる。意識をそちらに向けてしまったことで、またしても隙が生まれてしまっていた。

気付いた時にはもう遅く、白刃取りを解除し、自由になったノーフェイスの手が拳の形を作り、目の前まで迫って来ており――。

シラシオンは、思いつきり殴り飛ばされる。

声を上げることも適わず、強烈な慣性に押され、一直線に宙を舞い、何かのビルに激突、二つ程貫通して、地面を転がる。

「かはっ……!!」

肺に溜まっていた息を、一気に吐き出した。

『神谷先輩!!』

ウィンドウの麗央奈が、叫ぶ。

若干くらくらする頭を振って、源平は機体を起き上がらせる。

「だ、大丈夫……」

後輩に笑ってみせながら、崩れさるビルの向こう、翼を広げ、低空に浮く全身パール色の次元獣を見やる。

（なんてこった……）

口には出さないが、心の中で呻く。

確かに、敵の防御力は低くなった。けれど、ノーフェイスはそれを、超速再生することでカバーしている。

一週間前に見せた再生の速度は、余裕があったから遅く行っていただけで、本気になれば一瞬で行えるものだったのだ。

（遊んでるとでもいうのか……）

一週間前の戦闘を振り返ると、そういう節が多々あった。隙だらけの攻撃を行ったり、一度ボロボロにやられてみたり、拳げ句の果てには、破壊しようと思えば出来たはずのブラクテイラーを完全放置。

源平はここに来て、ノーフェイスという次元獣に、とてつもない戦慄を覚えた。

（小林、やっぱり君の力が必要みたいだ……！）

このままでは、戦力が足りない。幾らあっても足りない。

ノーフェイスは、本当に最強の次元獣だ。

先程までの勝算は、今やどこかに、さっぱりと消えてしまっていた。

ノーフェイスが右腕を上げた。パール色の触手が伸び、絡まり、シラシオンのブレードの形を象る。

翼を広げ、敵は一気に加速、シラシオンの方へ接近して来る。

「うおおお——ッ！」

源平は声を張り上げ、反撃すべくブレードを振るった。

遠くから、爆音が聞こえて来る。

廊下の窓から見える市街地では、幾筋もの黒煙が灰色の空に立ち昇っている。

そんな中間世界で、走太は御門学園三階の廊下を駆けていた。

少し前、ノーフェイスの活動再開を察知してから、しばらくの間、走太は教室で迷っていた。

椅子に座り直して、英語の授業を受け続けた。自分の気持ちを決め兼ねていた。

ただ、頭の中に、麗央奈の顔が浮かんた。

彼女と二度と会えなくなるかもしれない。そう思ったら、居ても立つてもいられなくなった。

「先生！ やっぱり調子が優れないみたいなので、保健室に行つて来ます！」

立ち上がって言い放ち、返事を待たず教室を飛び出し、指を鳴らして、中間世界に入った。

そうして今、走太は走っている。

昇降口が見えて来て、階段を駆け上がる。

四階と五階を無視して、更に上へ。

六階の行き止まりにある扉を開け放ち、辿り着いた場所は、屋上だった。

息を切らしながら、灰色の空の下、南方へと歩いて行く。

柵のところまで来て、走太は手摺りを掴む。

市街地で新たな爆音が上がリ、三つの小さな点が飛び交っているのが見えた。

「麗央奈……！ 神谷先輩……！」

二人が、ノーフェイスと戦っている。

走太は手摺りを握る手に、力を込める。

行かなきゃ、と走太は思った。

今すぐに行つて、加勢しなくてはならない。

「行かなくちゃ……！」

だから、ブラックテイラーの名前を呼ぶ。

呼べば、あの黒い機体は瞬時に駆けつけてくれる。
だというのに。

「っ……！」

口から、言葉が出ない。

走太の口は動かない。

（動け。動けよ。ここまで来たんだ。行かなきゃ話にならないだろ）
身体が震える。身体が熱くなつて、でも心は冷え切っていて、汗ばかりが出て来て、シャツを湿らせて行く。

一つ、また一つ。市街地方面で爆音が上がる。黒煙の筋が増える。
走太は動かない。口も足も、縫い付けたように動かない。
いつまでも、その場から動こうとしない。

「俺は……！」

本当にクソ野郎だ。

そう思う。

この期に及んで、覚悟も何も決まっていけない。

昨日からずっと考えていたことが、恐怖に塗り潰されて、全く機能しない。

これ以上の思考を止めようとしている。

「畜生……！ 畜生畜生畜生畜生……！」

手が真っ白になるくらい、手摺りを握り締める。

意味の無い言葉だけは、幾らでも口から零れ落ちるというのに、
肝心な言葉はいつも出て来ない。

情けない。本当に情けない。

ノーフェイスが怖い。死ぬかもしれない。あれともう一度戦うのが怖い。殺されるかもしれない。凄く怖い。どうしようもなく、怖い。

足がガクガクと震える。息が苦しい。

こうやって、自分はまた、麗央奈を見捨てるのか。

十一年前と同じように。あるいは、一週間前の保健室の時みたい
に、背中を向けて逃げ出して。

今度は、見捨てるどころか、見殺しにしてしまつかもしれない
というのに。

視界が滲む。俯いた顔からポロポロと涙が零れて、手の甲に落ち
る。

（何やってんだ俺は……！）

市街地方面からの爆音は、止まない。

「助けに行かないのか、走太？」

背後から、声がした。

聞いたことのある、男の声だった。

走太は振り返って、男の顔を見た。

「宮……治……？」

ツンツンヘアーに、黒縁の丸眼鏡、ルックスは決して悪くない――
。

いつも教室で話しているクラスメイトの、崎原宮治が、そこに立
っていた。

麗央奈は砲撃を続ける。

絶やすことなく、レッドラスの両手十指から放たれるビームバル
カンを、肩と脚部のハッチから放たれるミサイルを、双肩から放た
れるキヤノン砲を、ノーフェイスに浴びせ続ける。

爆炎の中から、遠隔誘導端末が次々と飛び出して来て、麗央奈は
ブースターで急速後退しながら、ビームバルカンでそれらを撃墜。
距離を取ったところで、爆炎が収まり、ノーフェイスの姿が露わ
になる。

ノーフェイスのパール色のボディーには、傷一つ付いていなかった。
た。

「くっ……！」

攻撃を喰らった傍から、超速再生しているのだ。
レッドラスの火力をもつてしても突破出来ない再生力に、麗央奈は焦りを覚える。

あるいは、レッドラスのコンディションが不完全な為に、一発一発の威力が低くて突破し切れないのか。

ノーフェイスのウイングから、撃墜された分のダンシングフェザーが再生されて、生えて来る。何度破壊しても瞬時に再生する遠隔誘導端末が、まさかここまで恐ろしい兵器だとは思わなかった。

いっどこから攻撃されるか分からないので、常に全方位を警戒して、集中していなければならない。しかも、シラシオンの物と違って、撃墜しても再生されてしまうだけに、ずっと気が抜けない。

おかげで、戦闘が始まってからそんなに経っていないのに、麗央奈の精神にはかなりの疲労が蓄積されていた。

おそらくそれは、源平も同様だろう。

『紅坂、後ろ！』

「っ！」

源平の通信を受け、麗央奈は振り返りながら右手のビームバルカンを乱射する。

たまたまその一発が、背後のダンシングフェザーを射抜き、破壊した。

源平の駆るシラシオンが、レッドラスの脇を通過する。彼もまた、市街地の建物を盾にして飛び回り、自らのダンシングフェザーと、左腕シールドのレーザー砲、右腕に持ったブレードを駆使して、ノーフェイスの遠隔誘導端末と戦っている。

ノーフェイスがばらまくダンシングフェザーは、十機だけに留まらず、今もその数を増やし続けていた。射出しては再生するという行動を、無制限に繰り返しているのだ。

故に、麗央奈達は遠隔誘導端末の撃破に追われ、隙を見てノーフェイス本体に攻撃しても超速再生に阻まれ、再び量産される遠隔誘

導端末の相手をする、という悪循環に陥っていた。

しかも、ノーフェイス本体は、遠隔誘導端末を量産するプラントとして動かずにいるわけではない。

ブレードを構え、ウィングのブースターを点火し、レッドラスに接近してくる。

「このっ！」

肩と脚部のミサイルを放てるだけ放って、弾幕を張る。

ノーフェイスはブレードを振るい、飛んで来るミサイルを次々と真つ二つにし、弾幕を抜ける。そのままレッドラスに突っ込み、斬撃を放つ。

麗央奈は右腕のビームシールドで、それを防御。ブレードとシールドの接触面で、激しいスパークが起こる。

『はあああ！』

そこへ割って入る源平。上空から急降下し、ブレードを振り下ろす。

ノーフェイスのブレードを持った腕が切断され、道路上を転がり爆発する。麗央奈はその隙に後退、敵との距離を取る。

シラシオンも同様に、その場を離れようとするが、ノーフェイスの再生の方が速い。生えた腕が握り拳を作り、シラシオンのボディに叩き込まれる。

『ぐあっ！？』

吹っ飛ばされる源平。

「神谷先輩！」

間髪入れず、ノーフェイスの表情無き顔が、麗央奈の方を向く。

ほぼ同時に、四方八方から遠隔誘導端末が襲い来る。

少なくとも二十機。両手のビームバルカンでは、捌き切れない。

「だったら！」

右腕を前に突き出し、拳を作る。二の腕の甲にある装甲をスライドさせ、拳を包み込み、ビームシールド発生装置を前面に展開する。麗央奈は脳内にイメージを作り上げながら、大声を発した。

「ロケットパアア——ンチッ！」

肘部のロックが外れ、レッドラスの右腕が巨大な弾丸となって射出される。

ビームシールドを前面に発生させた拳が、内蔵されたブースターで遠隔誘導端末を追尾。レッドラスの周囲で円を描くように飛び、全てのターゲットを一掃、数十の花火を咲かせる。

仕事を終えたロケットパンチは、ブースターで戻って来て、器用に位置を調整、レッドラスの右肘と連結し、元通りの右腕となった。「出来るならこれは、使いたく無かったけど……！」

一度でもノーフェイスに見せて、有効だと判断されてしまったら、コピーされてしまう。

クリムゾンノヴァと並び、レッドラスの切り札であるこれは、ギリギリまで取って置きたかったのだが、残念ながらそんな余裕はなかった。左右の腰部アーマーを变形させて使用するレールガン二丁と、両膝部から取り出して使うビームトマホーク二本をまだ隠しているが、どちらを使っても、今や戦局に大きな差はないだろう。

いずれにしても、埒が開かなかった。

ノーフェイスを見れば、ウイングから新たなダンシングフェザーを量産し始めている。

（一気に勝負を決めるしかない）

このままでは、じわじわと体力と精神力を奪われ続け、いつか隙を突かれて殺される。

（私は、ここで死ぬわけには行かない）

源平でもノーフェイスに太刀打ち出来ないのだ。自分が死んでしまったら、次元の門は確実に突破されてしまう。

そうしたら、現実世界にいる走太は——。

（駄目だ……それだけは……絶対に！）

何としても、阻止しなくてはならない。

走太を守らなくてはならない。

でなければ、彼の傍に居るところか、仲直りすることさえも出来

なくなってしまう。

だから。

深く息を吸って、麗央奈は眼前の光景を見据える。

「ノーフェイス、お前を……倒す！」

レッドラスのほとんどの火器を構える。両肩と両脚部のミサイルハッチを開き、双肩のキャノン砲二門を構え、両手十指のビームバルカンの狙いを定め、腰部アーマーをレールガン二丁に変形させる。背中と脚部のブースターを全開にし、

「はああああ——ツツツ！」

麗央奈はノーフェイスへと突撃を開始した。

ノーフェイスの周囲に展開していた数え切れないダンシングフェザーの銃口が、一斉にレッドラスへと向く。

麗央奈は構わず、突撃を続け、レッドラスの火器の照準を全て、ノーフェイス本体に合わせる。

ダンシングフェザーがビームを放った。無数のビームが嵐となつて、レッドラスを襲う。

「レッドラスの重装甲を舐めんなあ！」

ビームをかわそうともせず、ノーフェイスに向けて、火器をぶつ放す。

肩のキャノン砲と、腰のレールガンから始まり、両手のビームバルカン、そして無数のミサイルを叩き込む。爆炎に包まれ、一瞬ダンシングフェザーの動きが鈍くなる。

麗央奈は爆炎の中に突っ込む、ノーフェイスを見つけ、その両肩を掴む。

「だああああ——ツツツ！」

ブースターを全開にしたまま、爆炎の中から押し出す。道路上を低空飛行しながら押し続けて、突き当たりのビルに、ノーフェイスを叩き付ける。

幾つかのビルを貫いて、パール色の身体を建物にめり込ませる。身を擦じらせるノーフェイスだが、麗央奈はその両肩を掴んで離

さない。

レッドラスの腹部装甲を展開し、そこにある銃口に、レッドラスが持つ全てのエネルギーを収束させて行く。

「超速再生するというのなら、その超速再生を上回る熱量を浴びせればいいだけの話だ！」

至近距離から、限界を超えた必殺技を当てる。

何一つ残らないくらい強力な熱量をぶち当てる。

その為に必要なのは、強いイメージ。麗央奈の強い感情。願い。

麗央奈は手を重ね、瞳を閉じて、念じる。

（強くなる。私はもっと、走太に認めて貰えるくらい、強く）

十一年前のあの日から、麗央奈は逃げるのを止めた。

人見知りも克服したし、弱い心も叩き直した。

自分に出来ることは、何でもやった。

全ては、走太に振り向いて貰う為に。

「私の今日までの全部……この一撃に込める！」

ノーフェイスを倒す。倒して、自分は本当の強さを手に入れる。

そうすれば、全部上手く行く。走太はきっと、自分の傍に居てくれる。

だから、レッドラス。

（今だけでいい。どうか、自分の願いを聞き届けて）

自分には今、力が必要なのだ。

銃口のエネルギーが増大して行く。ノーフェイスが逃れようと足掻く。

ギリギリまで溜める。ノーフェイスがレッドラスを押し返す。

麗央奈は、力の限り叫んだ。

「クリムゾンノヴァアア——ッッッ！」

紅蓮の砲火が、パール色の全身を包んだ。

ノーフェイスの背後にあるビルを消し飛ばし、地面を抉り取り、今までに放った中で最大火力の一撃が全てを焼き尽くす。

エネルギーのセーブは一切しない。出し尽くす。この攻撃で、絶

対に倒す。

全身全霊の一撃。

やがて、エネルギーを出し切って、砲火が止む。

レッドラスの動きが鈍り、腕が勝手に、だらんと垂れ下がる。

目の前は大きく開け、黒煙の道が出来ている。地面が中間世界の端まで半円の形に抉れていた。

黒煙が止んで行く。レッドラスの付近から中間世界の端に掛けて、どんと黒煙が消えて行く。

ノーフェイスの姿は見えない。どこにもいない。

倒した。麗央奈は、ノーフェイスを倒した。

「へへ……ざまあみろ」

思わず笑みが零れた。

やったのだ。ノーフェイスを倒し、走太を守った。

自分の手の平を見て、ぎゅっと握り拳を作る。

ようやく。

ようやく強さを手に入れられた気がした。

長かった。十一年、ずっと自分を磨いて来た。逃げずに戦って来た。

（これで……走太も認めてくれるよね？）

現実世界に戻ったらすぐ、走太に謝ろう。

自分はもう、守って貰わなくても大丈夫だよって、そう伝えよう。きつと仲直りして貰える。自分は今度こそ強くなったのだから。

走太にはもう、負担を掛けたりしない。

二人は、幼馴染みに戻れる。

黒煙が全て晴れた。

麗央奈は顔を上げる。

半円形に抉れた地面、中間世界の端の壁際に、ノーフェイスが立っていた。キャノン砲も、翼も、残っていた。身体から蒸気を上げているだけで、一切の損傷が見られなかった。

「そん……な……」

ノーフェイスの腹部装甲が開く。そこから覗く、レッドラスと同型の銃口が熱を帯び、紅蓮に輝く。

麗央奈は動けない。レッドラスも、全エネルギーを放出した直後で回避が間に合わない。

『紅坂！』

源平の声が聞こえた。

ノーフェイスが腹部に収束させたエネルギーを解放する。

麗央奈の視界が、紅蓮一色に染まった。

少しの間を空けて大きな爆音が二度、中間世界の大気を揺らす。しかし、走太の視線は市街地の方には動かず、屋上に立つ友人の男に、釘付けにされていた。

「どうして……宮治が中間世界にいるんだ……！？」

中間世界には、キーパーマスターか、キーパーアシストしか入れないはずだ。

崎原宮治は、屋上の入り口の方から歩み寄りつつ、事もなげに言う。

「そりゃあ、お前、俺がこっちの関係者だからに決まってるじゃないか」

「関係者って……ロボット部や生徒会メンバーの皆と同じってことか……？」

「そういうこと。学園の情報屋っていう肩書きは、伊達じゃないってことさ。俺は本当に、御門学園内のことなら、何でも知ってるんだぜ？ 例えば、お前がブラックテイラーのパイロットであることだとか」

走太は呆然と、友人のポーカーフェイスを眺める。

「いつからだ……？」

尋ねると、宮治は首を傾げ、

「何がだ？」

「俺がこつちの世界で戦うようになったこと、いつから知ってたんだ？」

「最初から。俺はゲートキーパー関連を知ってから長くてね。三年生の神谷源平や、金剛雅よりも長い」

「だったら、どうして言わなかったんだ？」

「最初から知っていたのなら、打ち明けてくれても良かったのに。」

麗央奈のこと以外にも、相談に乗って欲しいことが、沢山あった。宮治は走太の横まで来ると、手摺りに背をもたれさせる。

「あくまで俺は、走太の友達ポジションで居たかったのさ。普通の友達ポジションにな。けど、状況が状況だし、走太のことを親友だと思ってる俺としては、傍観ばかりもしてられないなと感じたわけだ。……まあ、ひとまず俺のことは脇に置いて——」

中指で黒縁眼鏡の位置を直し、彼は走太の目を見て、

「それよりも今は、他に考えなければならぬ大事なことがある。

そうたる、走太？」

「っ……！」

走太は思わず、口を閉じ、俯いた。

「走太。お前は、戦わないのか？」

「……」

「麗央奈ちゃんを、助けに行かないのか？ 戦ってんだろ、あそこです。お前の大切な幼馴染みが」

「……分かってる」

走太は拳を握り締める。

「だったら、どうしてお前は、こんなところに突っ立ってるんだ？」

「俺だって……助けに行きたいって思う」

「なら、今すぐブラックテイラーに乗って、助けに行けばいい」

「身体が動かないんだ……！」

「動かない？」

「情けないって自分でも思う。だけど、怖くて、どうしても身体が

動かない……！」

「でも、お前は、教室を飛び出して、この屋上まで来たじゃないか」
「あと一歩が踏み出せない！」

走太は、怒鳴っていた。

怒りの対象は、宮治ではなく自分だ。口にしたら、腹の底が熱くなつて、思っていたことが次々と零れ出る。

「いつもそうだ！ 十一年前のあの時も、この間、女の子が不良に絡まれていた時も、俺は目の前にいて、何も出来ない！ 怖さで足が竦んで、動かなくなる！ その癖、自分を正当化して、逃げ出すとする！ 今がそうだ！ 俺は、戦わなくちゃならないのに、目の前で麗央奈や神谷先輩が戦っているのに、ここから動き出せないでいる！ あと一歩なのに！ ブラックテイラーを呼び出せば、助けに行けるのに！ 俺にはそれが出来ない！」

自分で口にして置きながら、酷い言い訳だと思う。

宮治は黙って、それを聞いていた。

走太は俯いたまま、言葉を続ける。

「それが……本当は言い訳だって……分かってるんだよ。身体が動かないんじゃない。本当は……分かってる。動けないんじゃない、怖いから動かないんだ、俺は。救いようの無い臆病者のクソ野郎なんだよ。そんな自分が嫌いで、惨めで、認めたくなくて……だから俺は、いつも言い訳をする。足が動かない、あと一歩がどうしても踏み出せないって……！」

弱音を吐いてどうなるわけでも無いのに、吐いてしまう。

宮治が、口を開いた。

「けど、走太はそんな自分から変わりたいと思ったんだろ？」

走太は顔を上げる。

宮治は、灰色の空を見上げている。

「だから、ブラックテイラーのキーパーマスターとして、ジャガーと戦った」

「変わるかもしれないって……思ったよ。あの時は……でも」

「ノーフェイスと戦って、やっぱり駄目だと思った？」
走太は頷く。

「ノーフェイスの強さを目の前にして、怖くなった。勝てないって思った。絶対に殺されるって思った」

けれど、ノーフェイスが気紛れを起こして、走太は運良く生き残った。

生きていて良かったと、心底思った。

そして、二度とあんな目に合いたくなくとも思った。

「嘘だな」

と宮治が言った。

「え……？」

「お前はまだ、変わりたいと思ってる」

宮治はポーカーフフェイスを走太に向けて、

「変わりたいと思ってなければ、変わることを諦めていたら、お前はここに来なかった。今、ここにはいないはずだ。教室で、罪悪感を抱きながら、自分には無理だと言い聞かせて、死んだ魚の目で、授業を受けていたはずだ。違うか？」

「それは……」

菜美子や、源平に話を聞かされて、母に背中を押されたから。

結論は出ていなかったけど、ノーフェイスが現れて、見て見ぬ振りはどうしても出来なかったから、中間世界に来た。

走太は首を横に振る。

「だけど……結局は、同じだ」

自分は結局、屋上で立ち止まっている。戦場を目の前にして、足を竦ませている。教室で見て見ぬ振りをしていると、何も変わらない。

しかし、宮治もまた首を横に振る。

「違うさ。もしもお前がここに来なかったら、俺もお前の背中を押しには来なかった」

「背中を……押す？」

「そうだ。俺は、お前の背中を押しに来た。頑張って、戦って来いってさ」

「どうして……？　今まで、そんなこと一度も……」

宮治はいつも、走太に対して、決断を迫って来たりはしなかった。あくまで、「走太がそれでいいなら、いいんじゃないか」と言っただけで、自分の意見を述べたりはしなかった。

走太が驚いていると、彼は笑って、

「俺はあくまで走太の意見を尊重するさ。今回だってそう。お前の答えは、ここに来た時点で、もう決まってる」

「決まっ……てる？」

「足りないのは、最後の一步だ。要するに、決断する勇気が無いんだろ？」

「勇気……」

そうだ。自分には、勇気が無い。

あと一步踏み出す為の、勇気が欠けている。

「俺がそれを、走太、お前に与えてやる」

宮治は手摺りから背中を離すと、走太に向き直る。

拳を握り、振り被って言った。

「歯を食いしばれ、走太」

反応する暇も無く、思いつき顔面をぶん殴られる。

吹っ飛んで、背中と後頭部を屋上の床に強打した。

「がはっ……！？」

「これで終わりじゃねえぞ」

宮治が近付いて来て、腹を蹴っ飛ばされる。

走太は屋上を転がる。

「げほっ……げほげほっ！」

腹が苦しくて、蒸せる。

更に宮治は、追い討ちを掛ける。何度も蹴って、踏み付けて来る。やがて、攻撃を止めた彼は、床にうずくまる走太を見下ろしながら、口を開いた。

「どうだ、走太。痛いかな？」

痛いに決まってるじゃないか。

走太は苦しくて出せない声の代わりに、視線で応える。

宮治はいつものポーカーフェイスで、

「これが、お前が今まで散々恐怖を抱いて、逃げて来た、暴力……物理的痛みってやつだ」

中腰になって、言葉を続ける。

「暴力は怖いよな。俺もそう思うよ。何せ、痛いもんな。痛いから、怖い。けどさ——」

落ち着いた口調で、彼は言った。

「お前はもつと、辛い痛みを知ってるんじゃないの？ 十一年間ずっと、胸に抱えて来た痛み。実際、暴力の痛みを味わってみて、どうだ？ どっちが痛い？ どっちが怖い？」

「俺……は……」

走太は両手の拳を握り締める。

「お前は今日まで、暴力から逃げ続けて来て、一度でも味わったことが無かっただろ？ 実際味わってみると、分かったんじゃないの？ それが、どんな程度のもんかさ」

「俺は——」

走太は拳を支えにして、上半身を起き上がらせる。

ぼたぼたと雫が落ちて、屋上の床を赤く染める。鼻血だった。

それを手の甲で拭って、走太は顔を上げる。

宮治と目が合った。すると彼は、今までに見せたことの無いような、満面の笑みを浮かべる。

「良い顔になったじゃねえか」

そう言って、宮治は屋上の端まで歩くと、大きく跳躍し、柵の上に立つ。

「宮治……？」

一度振り向いた彼は、右手でサムズアップをしてみせて、「よつと」

柵から校庭の方へ、何の躊躇も無く飛んだ。

「宮治!？」

驚き、声を上げたのも束の間、宙に舞った彼の身体が眩い光を帯びる。

光は一瞬で膨らみ、校庭側を覆い尽くす。余りの眩しさに、目を細める。

やがて、光が消え去り、細めていた目を開くと――

そこに、全長二十メートルの黒い機体が立っていた。

全身の装甲を染める漆黒、黄金に輝くアイカメラ、銀色のマスク、細く鋭いラインを描く手足、そして、背後には特徴的な黒い尻尾。

その機体を、走太が見間違うはずがない。

「ブラック……ティラー……!」

屋上の端に近付きながら、走太は恐る恐る問う。

「まさか……宮治……なのか？」

ブラックティラーが振り向く。

黒い尻尾を左右に揺らしながら、走太の前に大きな手の平を差し出し、

『行こうぜ、相棒』

漆黒のゲートキーパーは、答えた。

要するに、紅坂麗央奈は、小林走太に、傍に居て欲しかったのだ。走太と一緒に居て、話がしたかった。昔みたいに仲良くしたかった。

それだけだった。

誰にも負けない強さだとか、走太に頼ってはいけないとか、本当はそんなこと、どうでもよかった。

強さが欲しかったわけじゃない。走太の傍に居ることを認めて貰える、資格が欲しかった。

昔の弱かった自分を捨てて、強くなれば、走太はきっと、自分を認めて、傍に戻って来てくれると思った。

昔みたいに、二人一緒に居られるようになるって、信じていた。

だからなのかもしれない。この結果は。

レッドラスのボディーは、今にも碎けそうな程にボロボロになって、後ろ半身を、ビルの壁面に埋めていた。

ノーフェイスの放ったクリムゾンノヴァの直撃は、かろうじて両腕のビームシールドを展開することで、避けることが出来た。

しかし、レッドラスの切り札をコピーしたそれは、決して受け止め切れるものではなく、結果的に防御に使った両腕は粉々に吹き飛び、そのまま攻撃が身体に当たって押し出され、背中からビルに激突することとなった。

パイロットの麗央奈こそ、生きてはいるものの、ボディーの至る所が破損し、内部機械が露出したレッドラスは、戦闘不能と言ってよかった。

事実、どんなに麗央奈が操縦桿を動かしても、レッドラスはビルに埋まった身体を引き抜こうとしない。そんな余力は、どこにも残っていないかった。

（いや、違うか……）

麗央奈は操縦桿を握った両手から、力を抜く。

多分、自分がもう、強くイメージを抱けないからだ。

心はもう、何もかも諦めてしまっている。

麗央奈には、立ち上がる気力が残っていない。

故に、キーパーマスターの心を動力源とし、キーパーマスターのイメージで動くゲートキーパーも、立ち上がるうとしないのだ。

『紅坂！　そこから逃げろ！　このままじゃ、殺されるぞ！』

源平が麗央奈を守る為に、ノーフェイスと空中戦を繰り広げているが、それも長くは続かない。

『ぐあつ！？』

圧倒的物量を誇るパール色のダンシングフェザーの攻撃を避け切れず、背中に一発、ビーム砲を喰らったのをきっかけに、連続して被弾し、浮力を失って、遠くの地面に落ちる。

「神谷先輩……！」

麗央奈がコクピットの全天周モニターの天井を見上げると、翼を広げたパール色の天使が、ゆっくりと降りて来るところだった。

その天使のごとき次元獣——ノーフェイスは、目の前に降り立つと、しばらくレッドラスを見つめていた。

ノーフェイスの顔に目のパーツなんて存在していないから、見つめているのかどうか定かではないが、とにかくしばらくの間、全身パール色の次元獣は、その場に突っ立っていた。

やがて、ノーフェイスは、右掌を天に掲げる。二の腕から触手が伸びて、掌の中にシラシオンと同型のブレードを作り出す。

それを、ぐるんと回し、切っ先の向きを反転させ、逆手の両手持ちで構える。そのままブレードをレッドラスに振り降ろして、ボデイーを貫こうというのだろう。

（殺……される……）

そのことを自覚した途端、麗央奈は、ぶるっと身体が震えた。両手で、自らの肩を抱く。

「おか……しいな……」

『恐怖』の感情は、一ヶ月前の戦闘で捨て去って、克服したはずなのに。

今、この瞬間、麗央奈は死ぬことがとても怖かった。

怖くて、怖くて、寒かった。身体が震えていた。

（本当は、分かってた……）

自分は強くなかないって、知っていた。

逃げていないように、逃げていた。

強くなろうと努力している振りをして、現実から目を逸らしていただけだ。

走太と仲良くしたいのなら、直接、言えば良かったのだ。
気まずい関係で居たくない、走太に傍に居て欲しい。何故なら、
自分は――

走太のことが好きだから。

素直にそう気持ちを伝えれば良かったのだ。
しかし、麗央奈には、それが出来なかった。そんな勇氣は無かつた。

十一年前、走太に「お前を見捨てたんだ」と言われたあの時みたいに、拒絶されるのが怖かった。
彼に再び冷たい目を向けられることが、怖くて仕方が無かった。
怖くて、勇氣が無くて、だから麗央奈は、強くなるしかなかった。
強くなつて、走太に振り向いて貰うしか無かった。

麗央奈は今、この瞬間、思う。
自分は、弱い。

迫り来る死の恐怖に身体が震える。コクピット席に体育座りになつて、膝を抱えて、縮こまる。

ノーフェイスがブレードをゆっくりと振り上げる。

「走太……」

一ヶ月前の戦闘でも味わつた、死の恐怖。

こういう時にいつも頭を過ぎるのは、愛する少年の顔。

「ソウちゃん……」

麗央奈は声を震わせながら、瞳に涙を溢れされる。
怖い。怖いよ。

「助けて……」

ブレードが振り降ろされて、麗央奈は瞳を固く閉じた。

『麗央奈あああああああああああああああ――つ
つ――』

耳に届いた声に、はっとなる。

瞳を大きく開いて、顔を上げる。

次の瞬間、横から飛び込んで来た黒い影が、ノーフェイスの顔面に拳を叩き込んでいた。

ドゴオッ！ とパール色の左顔面に亀裂が走って、粉碎。
勢い良く、右側に飛ばされる次元獣。

が、一瞬で左顔を修復。ウイングのブースターを使って、殴られた勢いを殺し、ズザザザザッとスライディングして、数十メートル離れた地上で静止する。

だがしかし。

『うおらあああ——つつつ！』

ノーフェイスが襲撃者を視界に捉える前に、黒い影はその懷に飛び込んでいた。

右拳をぐつと握り締め、下方から思いっきり振り上げる。

強烈なアッパーがノーフェイスの顎を打ち砕き、今度こそ、錐揉み回転で吹っ飛ばした。

近くのビルに落下して、突っ込み、轟音を上げるノーフェイス。

襲撃者——黒い影は、背面に長く伸びた漆黒の尾を、ゆらゆらと揺らす。

麗央奈はそれを見て、身体が震えた。

先程までの震えとは違う。全身が熱くなって、胸が一杯になって、身体が震えるのだ。

やがて、崩れたビルから起き上がったノーフェイスと、黒い影が対峙する。

黒い影——ブラックテイラーは、身体の前で、ぐつと拳を握り締め、

『俺の幼馴染みに、手を出すな……！』

込み上げて来る感情が涙となって、麗央奈の瞳から溢れて、零れ落ちた。

第五章 灰色の空に吼える

『ギリギリ間に合ったな』

コクピットモニターのウィンドウに表示されている宮治が、言った。

「宮治、麗央奈と通信を繋げられるか!？」

漆黒のパイロットスーツを着込んだ走太は、彼に――ブラックテイラーに尋ねる。

宮治は頷いて、

『ああ、任せろ』

走太は、背後のビルに埋まったレッドラスを見やる。

赤色のゲートキーパーは、外部から見て一目で分かる程に、深刻なダメージを受けていた。両腕の肘から先は、破壊されて無くなっており、胴体は酷く焼け焦げて、所々装甲が失われ、内部フレームが露出してしまっている。肩のキャノン砲二門の先端はひしゃげてしまつて、使い物にならないだろうと思われた。

操縦桿を握る走太の手に、ぐつと力が籠もる。

と、麗央奈との通信が繋がつて、モニターに新たなウィンドウが出現した。

「麗央奈! 無事か!？」

すぐさま走太は、彼女に呼び掛けた。

『うん……!』

モニターのウィンドウに映し出された麗央奈は、瞳に涙を溢れさせながら、頷く。

「怪我は無いか!？」

彼女はもう一度頷く。

それを見て、走太は、ほっと胸を撫で下ろす。

「そっか、良かった」

安堵すると同時に、彼女に謝らなくてはと思った。

十一年前のことは勿論、一週間前に保健室から逃げ出したことだったり、今回のことだったり。

謝らなくてはならないことが、沢山あった。

しかし今、走太の目の前には、倒さなければならぬ敵が立っている。

全身パール色の次元獣——ノーフェイス。

崩壊したビルの瓦礫を押し退けて立ち上がった敵は、パーツ無き顔を走太に向け、ブラックテイラーと対峙していた。

「麗央奈」

「なに、走太？」

「遅れて、ごめん」

「え？」

「俺さ……お前に謝らなきゃいけないことが沢山ある。話したいことが一杯ある。でも、今はノーフェイスと戦わなくちゃならない。だから——」

その時、宮治が声を上げた。

「走太、来るぞ！」

直後、ノーフェイスが走り出す。拳を振り被り、突撃して来る。

走太は、イメージする。ゲートキーパーを自分の手足として動かすのではなく、この状況における最善の、『敵の攻撃をかわして、こちらの攻撃を当てる』という理想のイメージ。

ブラックテイラーが、それに応える。最小限の身体の捻りで、ノーフェイスの放った右ストレートを回避し、カウンターで自らの左拳を敵の顔面に叩き込む。

そのまま吹っ飛ばし、ノーフェイスを地面に転がす。

走太はウィンドウの麗央奈に視線を向けて、言った。

「少しだけ、待っててくれ」

ノーフェイスが地面から起き上がる。何度も殴り、本来なら粉々に破壊されているであろう頭部は、再生されて傷の一つも無い。

走太は前を見据えて、悪友に呼び掛ける。

「宮治……行くぞ！」

『おうよ。俺はいつでもいいぜ、相棒。ただ、俺がさっき言ったことを忘れるんじゃないぞ』

「ゲートキーパーを強さを決めるのは、キーパーマスターの心の強さ……だったよな？」

『そうだ。常に理想のイメージを頭の中に作り上げる。そして、どんなことがあっても、それを崩すな。自分の心を強く保て。自分を強く信じろ。そうすれば俺は——ゲートキーパーは、お前の追い求める理想の強さを具現化することが出来る。お前の好きなロボットアニメでも、そうだろ？ スーパーロボットなのは、パイロットの想いを力に変える！』

「俺は——」

両手で、ぴしゃりと頬を叩き、気合いを入れる。操縦桿を握り締めた。

足はまだ震えている。操縦桿を握る手もそうだった。けれど、走太は大きく息を吸って、

「怖さがなんぼのもんじゃないやコラアアア——ツツッ！」

腹の底から叫び、ノーフェイス目がけて、突進を開始した。

イメージするのは、敵と同じ武装。『創造開始』という文字がモニターに表示されて、ブラックテイラーのボディーが変形を開始する。

漆黒の装甲がスライドし、その中から新たな漆黒の装甲が現れ、これを繰り返す。本来の質量は無視して、両肩にレッドラスのキャノン砲と、背中にシラシオンのウィングを作り出す。

「飛べ、ブラックテイラー！」

『おっしゃあ！』

宮治の掛け声と共に、ウィングが展開され、ブースターを起動。ブラックテイラーは更なるスピードと浮力を得て、低空飛行でパール色のボディーに肉薄する。

ノーフェイスは上段から、ブレードを振り下ろそうとする。

走太は怯まず、先程のカウンター時と同じように、理想の行動を脳内にイメージ。

『任せろ！』

ブラックテイラーがそれに応え、握った右拳でアッパーを放つ。狙ったのは、ブレードの柄を握った、ノーフェイスの右手。アッパーの衝撃で、ブレードを灰色の空に弾き飛ばす。

そのまま、片足を軸にして、ブラックテイラーは反時計回りに回転、肘打ちをノーフェイスの鳩尾に叩き込む。

パール色のボディーに亀裂が走るが、またしても、即再生されてしまう。

「くっ！？」

ノーフェイスが左拳で、反撃のストレートを繰り出す。

イメージが間に合わず、両腕の甲を前に構えて、ガードする。

凄まじい威力で腕がミシミシと軋み、後方に吹っ飛ばされる。ウイングのブースターで勢いを殺し、体勢を立て直す。

「再生が、以前よりも速い……！」

『麗央奈ちゃんや、神谷先輩達の戦闘をリアルタイムで観測して得た情報だが、どうやら、超速再生ってやつらしい』

「超速再生……！？ 攻撃した直後に即修復って、反則級じゃないか」

『実際に戦ってみると、いかに速いかが分かるな。確かに、こいつはやばい』

一体、どうやってたら、超速再生を持つノーフェイスを倒すことが出来るのか。

考えている間に、ノーフェイスが次の動きを見せる。両肩のキヤノンの砲頭をブラックテイラーに向けて、エネルギー弾を放ってきた。

ウイングで飛翔し、これを回避する。

と、砲弾が続いて、無数のビームが襲い来る。

何とか、冷静に全弾回避をイメージして、成功。

しかし、

『厄介なのに囲まれたな』

宮治の言葉に、辺りを見回すと、いつの間にかノーフェイスの遠隔誘導端末——ダンシングフェザーに、取り囲まれていた。

前後左右、それから上空を合わせて、数十の銃口が、ブラックテイラーを捉えている。

走太の心に焦りが生まれる。一週間前は、運良く攻撃対象にされなかった為、受けることは無かったが、果たして遠隔誘導端末によるオールレンジ攻撃とは実際、どれ程苛烈なものなのか、想像が付かない。

ただ、このままでは非常にまずいということは分かる。

『焦るな、走太！』

そんな走太のイメージを読み取ったのか、宮治が言った。

『安心しろ。俺の装甲はそこまで柔じゃないし、黙って全弾喰らってやるつもりも無い。それに、こっちには向こうと同じ、再生能力があるんだ。そう簡単に落ちやしない』

「けど、この状況、どうやって突破すれば……！」

『こっちにもウイングにも、ダンシングフェザーが装備されてる。

後は、銃だ！』

「銃？」

『そう、何でもいい。お前のイメージで、両手に連射出来る飛び道具を作り出してくれ。出来るか？』

「……分かった！」

走太は頷き、脳内にイメージを作り上げる。

なるべく取り回し易い、拳銃を考える。マグナムが良い。装填弾数は無限。発射するものはエネルギー弾。手の平を通して、銃身へのエネルギー供給を行う。

創造の途中で、敵のダンシングフェザーが、一斉に砲撃を開始する。

「っ……！」

一瞬、動揺してイメージが乱れるが、宮治が『武器の創造に集中しろ!』と叫ぶ。

ブラックティラーが走太のイメージとは関係なく、勝手に動き、ビーム砲を避け、拳や蹴り、尻尾で遠隔誘導端末を叩き落として行く。

(落ち着け……!)

再度、脳内に二丁拳銃を思い描く。

モニターに映る創造開始の文字と共に、両腕に光の線が駆け巡る。瞬時に装甲が形を変え、両掌の中に、漆黒のマグナムが生み出される。

『よし! 走太、強くイメージしろ! 何をイメージするかは分かるな?』

「ああ!」

『なら、ぶちかませ!』

「うおおおお!」

イメージのままに、ブラックティラーを動かす。

二丁拳銃を左右に構える。同時にウィングを開き、ダンシングフエザーを射出する。

敵の遠隔誘導端末が降らせるビームの雨を避けながら、ブラックティラーは舞った。

自らの遠隔誘導端末と両腕を無駄無く動かし、踊るように攻撃を行う。二丁拳銃が高速のリズムでビーム弾を撃ち出し、敵のダンシングフエザーを破壊して行く。あくまで敵の遠隔誘導端末だけ。

味方のダンシングフエザーは、ブラックティラーの手足の延長であるかのように、敵の背後に回り込み、的確に撃ち抜いて行く。ブラックティラーの邪魔をせず、死角をカバーするように、飛び回る。小刻みなステップを刻み、それに合わせるように二丁拳銃を撃ち続ける。

戦闘時間にして、わずか数十秒。

取り囲んでいた敵の遠隔誘導端末を全て撃破し、走太は危機から

脱することに成功した。

『上出来だ』

二丁拳銃を下ろしながら、宮治は微笑んだ。

「何とか急場は凌いだけど……」

『走太のイメージは伝わって来てる。どうやって、ノーフェイスを倒すかだろ？』

「再生速度が尋常じゃない。普通に攻撃してるだけじゃ、おそらく倒せない」

『だろうな。だが、おそらく、そこら辺の算段は——』
『出来てます』

コクピットのモニターに新たなウィンドウが開き、アンテナを思わせるアホ毛が特徴的な、やや茶色掛かったショートボブヘアの少女が現れる。

「菜美子ちゃん！」

『やっと出撃して来ましたね、ヘタレ先輩』
「うぐ……！」

もはや苗字ですら呼んで貰えない。

菜美子は眉根に皺を寄せ、むすっとした表情で、

『ぶつちやけ、駆け付けるのが遅いです』

「ごめん……」

『すぐにでもぶん殴ってやりたいところですけど、今は私情を挟む状況ではないので、用件だけ伝えます。狙うべきは、ノーフェイスのコアです』

「コア？」

『はい。金剛生徒会長は、ノーフェイスには身体の情報構成を統括する、中心点のようなものが存在すると考えています。ノーフェイスと同じ能力を持つブラックテイラーで言うならば、小林先輩のような存在です』

「創造や再生のイメージを作り上げている箇所ってこと？」

『そうなります。敵の身体のどこかにあるそれを破壊することが出

来れば、ノーフェイスは情報構成を維持出来ずに、崩壊するはずだ」

「でも、それは……確かな情報なのか？」

コアなど無く、不定形な存在が、目の前の人型を形成している可能性も否定出来ない。

と、菜美子の背後で女性の声がした。

『蓬萊、小林と通信を繋いで貰えるか？』

『え？ あつ、はい！』

そう言つて、菜美子は数秒間目を閉じる。

モニターにまた、新しいウィンドウが開いて、そこに現れたのは

「せ、生徒会長！？」

御門学園の生徒会長——金剛雅であつた。

金縁の眼鏡とヘアバンドを付け、額を出した彼女は、走太を見て口を開く。

『会つのはこれで二度目になるかな、小林走太』

「は、はい」

神谷源平の紹介で、過去に一度だけ生徒会室に足を運び、挨拶を交わしたことがあつた。

『ノーフェイスは今、お前の目の前に居るな？』

走太は視線をモニター正面に移し、頷く。

全身パール色の次元獣は今、ウィングを静かに広げ、ダンシングフェザーを創造しては射出し、次の攻撃への準備を行っている。

『ということは、あまり長く話している時間は無いな。結論から言おう。ノーフェイスにコアは存在する。その理由が、これだ』

雅は人差し指で、とんとんと額を叩く。

すると、そこに金色の紋章が浮かび上がって、目映い輝きを放つた。

「紋章……！」

『君達キーパーマスターと同じように、キーパーアシストにも紋章

が存在している。キーパーマスターが紋章を持つことでゲートキーパーを操れるように、キーパーアシストの紋章にも意味がある。それが、「アシストスキル」だ」

「アシストスキル？」

『例えば、蓬菜のアシストスキルは、「通信」^{「コミュニケーション」}といって、生徒会室のパソコンと御門市に設置されたカメラや、ゲートキーパーの通信接続を、理屈を超越した範囲で可能とする能力だ。そして、私のアシストスキルは、「解答」^{「アンサー」}という。これは、本来知らない中間世界やゲートキーパー、次元獣の知識が脳内に存在し、そこから最適な解を導き出す能力だ』

「そんなものが……」

『私にも明確な理屈を説明することは難しいが、とにかく、私のアシストスキルは、ノーフェイスにコアがあるという解答を導き出した。ノーフェイスがブラックテイラーと同じように、イメージすることによって、創造と再生を行っているのだとすれば、奴にもイメージを行っている箇所、人間で言うならば脳のような部分があるはずだ。だから――』

『金剛の言うことだ。信じてもいいと思うよ、僕は聞き慣れた声がして、はっとなる。』

またしてもコクピットのモニターに新たなウィンドウが開く。そこに表示されたのは、明るい髪色のロン毛をゴムバンドで括って右肩に流した、細目の男。

走太は声を上げる。

「神谷先輩！」

『ふん、生きていたか』

雅が鼻を鳴らし、大して驚いた様子もなく言う。

源平は苦笑いをして、

『もうちょつと心配してくれてもいいと思うんだけど……まあ、いや。小林、よく来てくれたね』

「神谷先輩……俺は……」

『色々話したいことはあるだろうけど、それはこの戦いが終わった後にしよう。今は、協力して、ノーフェイスを倒す。それでいいかい？』

「……はい！」

走太が頷くと、少し離れた上空に、シリシオンの姿が確認出来た。白銀のボディだからこそ、余計に分かるが、シリシオンも相当なダメージを受けているように見えた。装甲の一部が歪んでいたり、被弾して決っていたりする。

源平は言う。

『さて、話は戻るけど、金剛が導き出す解答が間違っていたことは、今まで一度も無い。だから、今回も必ず、ノーフェイスのどこかに弱点となるコアが存在しているはずだ。少なくとも僕は、今まで何度も金剛の予測に助けられて来たから、彼女の言葉を信じるよ』

雅が、うおっほんと咳払いをして、どこか恥ずかしそうに、

『後輩に真顔で何を言ってるんだ、お前は』

『けど、小林に信じて貰って、協力して貰わないと、勝てないのも事実じゃない？』

『む……』

走太は二人のやり取りに、とりあえず首を縦に振る。

「分かりました。ノーフェイスにはコアがあるんですね？」

雅は頷いて、

『信じてくれることに感謝する。コアは必ずある。そこさえ見つけ出して破壊すれば、勝てる』

菜美子がそこで、口を開く。

『コアがあると推測される箇所は、頭部、胸部、腹部の何処かです。両腕は神谷先輩と紅坂先輩によって、何度も破壊されていますから、少なくともそこには無いと確認されています』

源平は細い目を開きながら、

『紅坂のレッドラスが動けなくなった以上、厳しいけど、僕と小林でやるしかない。心の準備は出来てる？』

走太に視線を向けて、尋ねて来る。

「はい……大丈夫です！」

「なら、行こう。僕達自身の未来を守る為に」

「未来……」

顔を上げて、ノーフェイスを見やる。数十機のダンシングフェザーを展開し終えたパール色の次元獣は、空中に浮き、走太達の出方を伺っている。

雅が言った。

「小林、神谷、私達生徒会メンバーに出来るのは、ここまでだ。後は、お前達に託す。武運を祈る」

「はい」

「分かったよ、金剛」

彼女との通信は、そこで切れる。

走太は菜美子を見る。その視線に気付いたのか、彼女は再び、むすつとするが、

「私も」

「え？」

「私も、先輩達のご武運をお祈りしています」

そう言つて、彼女もまた、モニターから姿を消す。

たったそれだけのやり取りだったけれど、走太は彼女から少しだけ、勇気を貰えた気がした。

「話は聞いてたか、宮治」

ブラックテイラーに問い掛けると、ウィンドウの黒縁眼鏡を掛けた男は「ああ」と答える。

「要するに、ノーフェイスの頭と胴体を攻撃して、コアを破壊すればいいんだろ？ ……神谷先輩、それでいいんですよね？」

「そういうことだね、崎原」

旧知の間柄らしく、平然と会話を交わす二人。

走太は源平に言う。

「神谷先輩、やっぱり宮治がブラックテイラーだってこと、知って

「たんですね」

『うん。ただ、崎原から、小林にはその時が来るまで言うたって、口止めをされてたんだ。ごめんね』

『その話はひとまず後だ。ノーフェイスが来るぞ！』

宮治の言う通り、痺れを切らしたノーフェイスが、動き出していた。

数十のダンシングフェザーを走太達に向けて、飛ばして来る。加えて、自らも高速で接近して来る。

『よし……行くよ、小林！』

「はい！」

走太は源平と共に、応戦を開始した。

先程と同じイメージで、遠隔誘導端末と両手のマグナムを操作し、敵のダンシングフェザーを撃ち落として行く。

空中から降りて来た源平も、同じように自らのダンシングフェザーとシールドに内蔵されたビーム砲で、戦う。

ノーフェイスが接近して来たのは、ブラックティラーの方だった。右の拳を振り被り、ストレートを放って来る。

『当たるか！』

と口にしたのは宮治。走太はイメージして、攻撃を回避。

『まずは頭あ！』

ブラックティラーが反撃の上段回転蹴りを放つ。

ノーフェイスの顔面を捉え、めり込み、吹っ飛ばす……が、十数メートルノックバックして踏み留まったその顔は、既に再生を終えている。

「くそつ、効かない！」

『勝てるイメージを思い浮かべるんだ！ もっと強い、こいつに勝てるイメージを！』

「だったら、これで——」

走太はイメージする。一発で効かないのなら、二発。それでも効かないのなら、三発、四発、五発。その顔面を打ち砕くまで、何発

でも当て続ける。一点集中の高速連撃。

二丁拳銃でダンシングフェザーを撃ち落としながら、懷に飛び込み、そこで二丁拳銃を放棄。両手の拳を握り締め、後ろに引いて、溜める。

そして、

「どうだああ——つつつ！」

解き放った。ブラックテイラーの両腕が、分身したかと思うくらいの超速で動いた。

顔面に暴風雨のごとき連続パンチを叩き込む。明らかに人型兵器の限界を超越した速度。おそらくは秒間数十発。

一点集中で直撃し、相当なインパクトを与えているはずだが。

「再生が速過ぎる……！」

碎けない。亀裂以上のダメージに到達出来ない。

圧倒的超速再生の壁が、走太の前に立ちちはだかる。それどころか、

「こいつ、なんで……！」

ノーフェイスはここに至って、仰け反りもしない。

さすがの宮治も、焦りの表情を浮かべる。

ノーフェイスの両手が動いた。

超速連撃を繰り出していた両腕を掴まれる。

「なっ……！！」

走太は、咄嗟に振り解こうとするが、敵の握力が凄まじく、びくともしない。

『小林！』

シラシオンが空中から接近して来て、ノーフェイスの頭上からブレードを振り下ろす。

脊椎のある後方から首を斬り落とそうとするが、体表面に接触して火花を散らすだけで、こちらも効いている様子が無い。

ノーフェイスが、ブラックテイラーの両腕を掴んだまま、頭を後方に引く。頭突きを放って来た。

ゴキヤアッ！ と頭部で嫌な音がして、ブラックテイラーの身体が後方に吹っ飛ぶ。その際に拘束されていた腕が解放されたようで、ブラックテイラーは数十メートルの距離を舞い、地面に転がる。

「ぐっ……………」

『がはっ……………！』

走太が肺の息を全て吐き出すと同時に、宮治が呻き声を上げる。

「宮治！ 大丈夫か！？」

『頭部を……………やられた……………！ 走太、再生のイメージ、出来るか……………！？』

はっとなつて、走太は「待つてろ！」と答える。無傷なブラックテイラーをイメージする。モニターに『創造開始』の文字。

数秒して、モニターの宮治が眼鏡の位置を直し、機体を起き上がらせる。

『くっ……………今の頭突きは……………強烈だったぜ……………。一瞬、意識が飛び掛けた』

「ノーフェイスのやつ、前よりも強烈な攻撃を与えてるはずなのに、仰け反りもしなくなった。再生速度がまた上がったってことなのか……………！？」

『それだけじゃない。再生速度が幾ら上がったところで、攻撃の勢いまでは殺せない。効こうが効くまいが、相手は吹っ飛ぶはずだ。それが微動だにしないってことは、理由は一つしかない。奴は、俺達と同じで、イメージを具現化してる』

「それってどういう……………」

『俺がお前の浮かべる理想のイメージを具現化出来るように、あいつも自分で浮かべる理想のイメージを具現化してるってことだ』

「まさか……………本当に……………！？」

『それ以外に考えられない。これで、奴がコアを持っている可能性がいよいよ高くなった。イメージを具現化してる以上、奴にはイメージを行っている場所があるはずだ』

ノーフェイスは、戦いの舞台を空中に移し、源平のシラシオンと

格闘戦を繰り返している。

超速再生と慣性無視により、当然ながら、状況は源平の圧倒的不利。シリシオンのブレードが、敵の攻撃の合間を縫って、何度もパール色の身体を斬り裂くが、それも無意味。

「神谷先輩を援護しないと！」

ウイングを展開し、自らのダンシングフェザーを周囲に呼び戻す。ブースターで飛び上がり、シリシオンに加勢する。

ダンシングフェザーで隙を作り、ノーフェイスに再び超速連撃を叩き込む。

が、わずかに罅を入れるだけ。怯ませることも出来無い。

「くそっ、どうしたら……！」

『走太！ こつちも超速再生と慣性無視のイメージをするんだ！ それで真っ正面から打ち合う！』

宮治がノーフェイスの反撃を回避しながら、言う。

間髪入れず源平が、

『一発一発の威力を高めるイメージも忘れないで！ どうか体を破壊して、こいつのコアを見つけ出さないと、勝ち目が無い！』

「了解！」

走太はノーフェイスに肉薄し、至近距離での格闘戦を開始する。

震える手と足を無視して、超速連撃をイメージ。

「はああああ——っっっ！」

気合い一声、無数の拳を放ち、一際大きな亀裂を走らせる。連撃を止めず、ひたすらに殴り続ける。

ノーフェイスが構わず拳を振り被る。攻撃がブラックテイラーの顔面に直撃。超速再生と慣性無視でそれをカバーし、走太は更に連撃を放つ。が、亀裂以上のダメージを与えられない。

と、ノーフェイスは両手を振り被った。一瞬、両手が分身したように見え、

「まずいっ！」

走太は反射的に、ガード体勢を作り、超速再生をイメージ。

次の瞬間、拳の弾幕がブラックティラーを襲った。それは他ならぬ、走太が行ったのと同じ、超速連撃だった。

慣性無視のイメージを忘れ、ブラックティラーは吹っ飛ばされ、地上の建物を四つ貫通。そこで慣性無視のイメージに成功し、地面への激突を免れる。

「同じ技まで……！」

『気を抜くな！ まだ終わってない！』

宮治が叫ぶ。

上空から、ノーフェイスが高速で迫って来ていた。

「くっ！？」

走太は両手の拳を構える。

ノーフェイスも両腕を振り被る。

「こんのおお——っっっ！」

走太の掛け声と共に、ブラックティラーが、超速連撃を繰り出す。ノーフェイスも超速連撃を放ち、真っ向からぶつけ合う。

無数の拳と拳が激突し、幾つもの衝撃波を巻き起こす。

スピードは互角に見えた。

だがしかし。

甲高く響いた破砕音によって、拳の打ち合いは終焉を迎えた。

ブラックティラーの両腕——拳から肘までが、無惨にも粉々に砕け散ったのだった。

『ぐああああっ！』

宮治が悲痛な叫び声を上げる。ロボットと言えども彼の両腕、破壊されてダメージが伝わったのだろう。

一瞬、それに気を取られて、走太のイメージが乱れる。

我に返り、モニター正面を見ると、ノーフェイスの右ストレートが迫って来ており、

「しまっ……！」

超速再生も、慣性無視も行うことが出来ず、顔面を思いつき殴り飛ばされたブラックティラーは、一直線に飛び、大きなビルに背

中から突っ込んだ。

走太は、ブラックテイラーの両腕と再生を行いながら、機体を起き上がらせる。モニター正面を見つめる。

次元獣ノーフェイス。比類無き情報質量と密度、それと自らのイメージを具現化させる、ブラックテイラーと同じ力を持つ、スペック上、過去最強の次元獣。

今、この瞬間に、感じる。

スペックだけでない最強の力を、自らの肌に、確かな戦慄として。
(このままじゃ……負ける……！)

ブラックテイラーの両腕が破壊され、殴り飛ばされる様子を、麗央奈はコクピットモニターに送られて来る映像で、眺めていた。

菜美子のアシストスキル『通信』の力を借りて、生徒会メンバー達が見ているものと同じ映像を、流して貰っているのだ。

「走太……！」

動けと強くイメージしながら操縦桿を握り締めるが、レッドラスはビルに後ろ半身を埋めたまま、少しも動かない。

なんて自分は無力なのだろう、と思う。

普段強がって、肝心なことからは目を背けて、大事な時には何も出来ない。

走太が助けに来てくれて、本当に嬉しかった。胸が一杯になって、涙が溢れた。

今まで辛かったこととか、悲しかったこととか、そんなものが何もかも全部、どうでもいいと思えるくらい、嬉しくて、幸せな気持ちになった。

もう自分は強がらなくてもいいんだって、そう思えた。
でも、違うのだ。

(それじゃあ、駄目なんだ……)

ただ、走太に頼って、傍観しているだけでは、昔と何も変わらない。

今ここで動かなかつたら、走太の背中に隠れていた昔の自分と、何も変わらない。

だから、強がりだろうが何だろうが、這い上がらなければならぬ。

この無力な状態から、何としてでも抜け出さなくてはならない。

（レッドラス……私のイメージ……伝わってるよね？　なら、聞いて）

麗央奈は瞳を閉じて、レッドラスに呼び掛ける。

（今、私の幼馴染みが、目の前で戦ってる。絶対に失いたくない大切な人が、ピンチになってる）

仲直りしたいとか、彼の傍に居たいとか、そんなことはもう、どうだっていい。

それよりも大きな想いが、麗央奈の胸に今、存在している。

（私はただ、走太の力になりたい）

純粹に、そう思う。

見ているだけなんて嫌だ。無力なのは嫌だ。

（だから、お願い、レッドラス――）

もう一度だけ。

「私に力を貸して……！」

ノーフェイスはまるで、自分の心の写し鏡のようだと走太は思った。

ブラックテイラーと同じ能力を持ち、同じ技を使う。

しかし、その強さは、ブラックテイラーよりも上。

走太には、ノーフェイスという次元獣が、決して乗り越えられない過去の自分のように思えてならない。

どんなに足掻こうとも、突破することが出来ない。今よりも前に進むことが出来ない。

ブラックティラーが拳を振るう度、ノーフェイスも拳を振るい、結局、走太の方が殴り飛ばされる。

機体が地面の上を激しくバウンドしながら転がって、何かの建物に激突する。

「くそっ……！」

手と足が、恐怖でガクガクと震えていた。

少しずつ、精神力が削られて行く。強く保っていた心が揺らぐ。本当は、今すぐにも逃げ出したかった。

それでも、残っている勇気を振り絞って、走太はブラックティラーを起き上がらせる。

創造によって生み出したレッドラスのキヤノン砲を、牽制で放った。

ノーフェイスの付近に着弾し、爆発が起きる。爆炎を隠れ蓑にして、走太はブラックティラーを飛び込ませる。

ノーフェイスが反応して、右拳を振り被る。

走太も左ストレートを放つ。

「うおおお——っっっ！」

激突する拳と拳。超速再生をイメージしているにも関わらず、パワー負けをして、ブラックティラーの左腕が砕け散る。

「っ……！ 構わない！ そのまま攻撃を続ける走太！」

顔を苦痛に歪める宮治の言葉を聞き、左腕を再生しながら、更に一步、敵の懷に踏み込む。

ノーフェイスが、今度は左拳を打ち込んで来る。

走太はブラックティラーの身体を捻らせて、顔面への直撃を避けるが、右側のウィングに当たり、破壊される。

もう一步踏み込み、ノーフェイスのボディーが空になる。超速再生と慣性無視はイメージせず、イメージだけを浮かべ、

「砕けるおおお！」

敵のどてっ腹に超速連撃を叩き込んだ。

大きな亀裂が走り、パール色の小さな破片が空中に舞う。

が、ノーフェイスが膝蹴りを放ち、ブラックテイラーの腹部にめり込ませる。

「がっ……！？」

後方に飛ばされ、再び地面を転がされる。

その際に、コクピットシートに後頭部を強く打ち付けて、思考が鈍くなり、視界が歪む。

そのせいでイメージが遅れる。なかなか立ち上がれない。

「くっ……！」

頭を打ったのだけが原因では無かった。

勝つイメージが出来ず、走太の心は、今にも挫けそうになっているのだった。

『走太！ 立て！ ノーフェイスが来るぞ！』

宮治が言うが、走太は地面に両手を着いたまま立てない。

モニター正面に、パール色の翼を広げて突撃して来るノーフェイスの姿が見える。

操縦桿を握る走太の手が緩み掛けたところで、

『走太！』

その声は、宮治ではなく。

聞いただけで目の醒めるような、少女の声だった。

振り向くと、モニター左方、二百メートル程離れた所にある大通りに、赤色の機体が立っていた。

全身ボロボロで、両腕の肘から先が無く、キャノン砲もひしゃげて使い物にならないというのに、その機体——レッドラスは、二本の足でしっかりと地面を踏み締め、力強く立っていた。腹部装甲を展開して覗く銃口が、エネルギーの収束により、赤く染まっている。

「麗央奈……！」

麗央奈は、レッドラスの中から、膨大なエネルギーが止めどなく湧き上がって来るのを感じていた。

レッドラスが麗央奈のイメージに応え、それをエネルギーに変換してくれているのだ。

麗央奈は、モニター正面、五百メートル程先のノーフェイスに、狙いを定める。

レッドラスの腹部分装甲は既に展開、クリムゾンノヴァを放てるように、エネルギーを収束させ続けている。

麗央奈が思い描くイメージはただ一つ。

（走太を助ける！）

同じように全力をぶつけ、一度は敗北を喫した。それでも今は違う。あの時とは違う。

走太が助けに来てくれて、それがとても嬉しかったから。

涙が出る程、嬉しかったから。

自分も、彼の力になりたいと思ったのだ。

「当たたれえええ——ツツツ！」

湧き上がるエネルギーを紅蓮の輝きに換えて、解き放った。

一体、どれだけの規模があるのか分からない。

視界全てを覆い尽くすような真つ赤な炎の柱が、レッドラスの腹部にある銃口から伸びて、ノーフェイスに直撃した。

柱は遙か彼方まで伸び、進路上にある物を全て焼失させて行く。

「凄い……！」

余りの熱量に、近くにいる走太も、ブラックテイラーと共に吹き飛ばされそうになる。

やがて、炎の柱が消えた時、ノーフェイスは大きく抉れた地面の上に立っていた。

走太は目を見開く。

ノーフェイスがダメージを受けていた。翼とキヤノン砲の一部が砕け散り、ボディの所々が歪み、ひび割れている。

それだけでは無かった。一向に損傷箇所が再生が始まらないのだ。ノーフェイスは身体をよろけさせ、片膝を着いてしまう。

その理由を探して、気付いた。

ノーフェイスの胸部の中央が砕けて、そこからエメラルド色の球体が覗いていた。直径二メートル程の大きさで、よく見ると、球体の表面には、わずかに亀裂が走っている。

宮治が言った。

『走太、あれがノーフェイスのコアだ！ あそこから、強大なエネルギーの流れるを感じる！』

ふと、モニターのウィンドウが切り替わる。

映っていたのは、幼馴染みの鮮やかな赤毛の少女。

『走太——』

麗央奈は大きく息を吸うと、走太に向かって、叫んだ。

『行っけえええ——っっっ！』

その声は、戦いが始まってからずっと続いていた手と足の震えを止め、走太の胸の奥から言い知れない力を湧き上がらせる。

操縦桿を強く握り直し、機体の体勢を立て直す。

走太は駆け出した。ブラックテイラーのキヤノン砲と、右片方を破壊されて、半端に残っていたウィングを切り離して破棄。機体を極限まで軽くし、ノーフェイスへと全力疾走を開始する。

「宮治っ！」

『ああ、お前のイメージは受け取った！ これで決めるぞ、走太！』
モニターには『創造開始』の文字。

と、片膝を着いていたノーフェイスが、突撃して来るブラックテイラーに気付いたらしく、立ち上がって、右手を前に突き出す。

走太の進行方向を塞ぐように、残っていたダンシングフェザー数十機が集合し、ビームを放って来る。

「くっ……！」

別の物を創造中の今、超速再生を行うことは出来ない。

加えて、何の防御手段も無く、数十の遠隔誘導端末からの一斉攻撃を受け続けられる程、ブラックテイラーの装甲は厚くない。

どうする、と一瞬考えたところで、

『僕が居るのを忘れてないかい？』

白銀のダンシングフェザーがブラックテイラーの横を通り抜け、敵の遠隔誘導端末を取り囲み、先端から幾つもの光の線を走らせ、爆炎の花を咲かせる。

モニターのウィンドウに表示されたのは勿論、細目の男。

「神谷先輩！」

『そのまま行け、小林！ 敵の遠隔誘導端末は全部、僕が引き受ける！ 君は、ノーフェイスのコアをぶっ壊せ！』

「はい！」

走太は頷くと、白銀とパール色の遠隔誘導端末が撃ち合う中に突っ込み、潜り抜ける。

ノーフェイスとの距離は、残り百メートルを切っていた。

レッドラスが放った先程のクリムゾンノヴァによって、発射機構に障害が発生したのか、両肩のキャノン砲を撃っては来ない。ウィングも見るからに損傷しており、空中へ浮き上がるうとしない。

ブラックテイラーを阻むものは、もはや何も無かった。

そして、ついに格闘が届く距離に到達する。

ブラックテイラーが右手の拳を固く握り締め、

「うおおお——っっっ！」

走太はノーフェイスに、渾身の右ストレートを放った。

狙うは、剥き出しになっている胸部のコアのみ。

ノーフェイスが鏡のように、左ストレートで反撃をして来る。

ブラックテイラーの右拳と、ノーフェイスの左拳が正面から激突する。しかし、やはりパワーは敵の方が上。

ブラックテイラーの右腕に亀裂が走り、粉々に砕け散る。

「まだ！」

走太はすぐに再生をイメージする。ブラックティラーの右腕が原型を取り戻し、そのままノーフェイスの左拳を掴む。

ブラックティラーの左拳に力を込め、コアに向かって左ストレートを繰り出した。

が、ノーフェイスは素早い反応を見せ、右拳をぶつけて、ブラックティラーの左腕を砕く。

「まだだ！」

走太は左拳も即再生、先程と同じようにノーフェイスの右拳を掴み、取っ組み合いをするような形になる。

「ノーフェイス！」

動かしたのは、ブラックティラーの尻尾。

先端には、ここに到達する間に創造した、巨大なドリルが装備されている。

ギュルルル！ とそれを勢いよく回転させ、

「お前の敗因は——」

右脇から滑り込ませるようにして、

「尻尾を造らなかつたことだああ——ツツツ！」

鋭く尖った先端を、コアの亀裂に突き刺した。

盛大に火花が散り、ノーフェイスが苦しそうにもがく。掴まれた両手を振り解こうと、必死に抵抗する。

走太は強いイメージで、両手に力を籠め続ける。何が何でも離さない。

ドリルの回転を強める。一層派手な火花が咲く。碎ける、と強く念じる。

「グオ……」

と、その時、声のようなものを聞いた。

走太は顔を上げる。

ノーフェイスに異変が起きていた。何のパーツも無く、のっぺらぼうだった顔の口元が、裂けて行く。

そして、

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ——ッ
ッ！」

ノーフェイスは咆哮した。

余りに凄まじい雄叫びに、走太はコクピット内にいるにも関わらず、空気が震えるのを感じた。思わず鳥肌が立つ。

胸部の下、ボロボロに損傷している装甲が、鈍い音を上げて、開いて行く。

「まさか……！」

レッドラスと同型の銃口が姿を現した。

バチバチとスパークが起き、そこに紅蓮のエネルギー球が形成されて行く。

ノーフェイスは、両腕を離さない走太とブラックテイラーに対して、至近距離からクリムゾンノヴァを浴びせるつもりなのだ。

コクピットモニターに『危険！』の表示が出て、宮治が声を上げる。

『走太、ここは一旦離れるんだ！』

確かに、宮治の言う通りだった。

両手でノーフェイスを押さえている今、至近距離からのクリムゾンノヴァを防ぐ術は、超速再生しかない。しかし、ノーフェイスと違って、ブラックテイラーの超速再生は絶対の防御壁ではない。拳の打ち合いの際に腕を破壊されていることから、それは明らかだ。ノーフェイスが放つストレートよりも、確実に威力が上であろうクリムゾンノヴァを防ぎ切れる可能性は、まず無いと考えるのが妥当（このままだと、死ぬ……！）

死の可能性を目の前にして、走太の背筋に寒気が走り、身体が震える。心臓が大きく脈打つ。

つまり、ここで走太が取るべき選択肢は、コアへの攻撃を中止し、

ノーフェイスの両腕を解放して、クリムゾンノヴァを回避すること。
それが正しい選択肢。きっとそうに違いない。
けれど。

「同じじゃないか……死ぬのが怖いのは……」

『走太？』

「ノーフェイスだつて……！」

走太は、ブラックテイラーと取っ組み合いをしている、パール色の次元獣を睨み付ける。

クリムゾンノヴァを放てばブラックテイラーを葬り去れるこの状況下で、ノーフェイスはなおも必死にもがいている。何とかブラックテイラーの拘束から逃れようと、両手に全力を籠め続けている。

「グオオオオ——ツツツ！」

そして、吼える。これまでずっと、冷静さを保って来たノーフェイスが、口のパーツを造り出してまで、声を上げている。

理由なんて、一つしかない。

ノーフェイスも、死ぬのが怖いのだ。

考えてみれば、走太とノーフェイスが直面している状況は、どちらも変わらない。走太がクリムゾンノヴァの銃口を目の前にして、死の危険に晒されているように、ノーフェイスもまた、心臓部とも言うべきコアにドリルを突き立てられ、破壊されそうになっている。つまりは、五分五分。どちらが先に倒れるかの勝負。

だが、走太には選択肢が残されている。ノーフェイスの両手を放して、この勝負から離脱することが出来る。

「俺は……」

この取っ組み合いの状況に導いてくれたのは、麗央奈だ。ボロボロのレッドラスを起き上がらせて、信じられないような一撃を放つて、コアにダメージを与え、超速再生を止めてくれた。

いや、それだけじゃない。菜美子や、源平、宮治が背中を押してくれたからこそ、自分は今、こうしてブラックテイラーに乗ることが出来ている。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ——
ツツツ！」

炎の勢いが強まり、走太の視界が完全な赤に染まる寸前。
ノーフェイスのコアの亀裂が広がり、砕け散るのが見えた。

ブラックテイラーとノーフェイスを中心に、凄まじい爆発が起きた。

衝撃波で、通信が乱れ、指令室のメインモニターがノイズ画面に変わる。

菜美子は、その間もモニターから視線を逸らさないでいた。

「映像、回復します！」

生徒会メンバーの一人である男子生徒がそう言っ、メインモニターに爆心地の映像が表示される。

そこには、半径一キロ以上の巨大なクレーターが出来ており、ノーフェイスとブラックテイラー、どちらの姿も消えて無くなっていた。

「ノーフェイスのエネルギー反応消失！」

「ブラックテイラーは！？」

と、声を上げたのは、菜美子の隣の女子生徒。

「待つて、今探す！」

男子生徒がパソコンのキーボードを弄って、ブラックテイラーのエネルギー反応を搜索する。

やがて、「居た！」とエンターキーを押し、メインモニターに違う場所の光景が映し出される。

菜美子はそれを見て、ため息を吐いた。

「全く……オチがワンパターンですね……」

果たして、ブラックテイラーは、ジャガーと戦った時と同じよう

に、高層ビルの壁面に頭から突き刺ささって上半身を埋め、足と尻尾をジタバタさせて、もがいていた。

わっと、指令室内で歓声が上がった。

生徒会メンバーの男子二人がガッツポーズをし、ハイタッチを交わす。

続いて、先輩と同級生の女子二人が涙目になりながら、菜美子に抱き付いて来る。

「やった！ やったよ、菜美子！」

「小林先輩が、ノーフェイスを倒したよ！」

菜美子はそんな彼女達に呆れながら、

「当たり前です。散々私達に迷惑を掛けて来たんですから、このくらしいの戦果は上げて貰わなくちゃ困ります」

「そんなこと言って、本当は菜美子だつて滅茶苦茶嬉しいくせに！」

「嬉しくなんかありません！」

「ついさっきまで、小林先輩のことが心配で仕方が無かったくせに！」

「誰があんなヘタレ！ ちょっと……二人して頼つぺたをつつかないで下さい！」

頬をぶにぶにされながら、会長席に腰掛けた雅に視線をやると、彼女もまた「やれやれ」と肩を竦めながら、微笑んでいた。

菜美子は、モニターに映る、ビルから上半身を引き抜こうと悪戦苦闘する黒い機体を見て、思う。

（まあ……でも、帰って来たら、今回くらいは褒めてあげてもいいかもしれませんね）

経緯はどうあれ、現実世界を救ったのだ。

それくらいはサービスしてやつてもいいだろう。

ブラックテイラーの無事が確認された時から、溢れんばかりの笑顔を浮かべていることを、菜美子本人だけが気付いていなかった。

こうして、五月三十一日午後一時四分。
生徒会により、ノーフェイスの完全消滅が確認された。

ノーフェイスを倒した後も、走太とブラックテイラーの戦いは続いていた。

『走太！ もつとだ、もつと強いイメージを浮かべるんだ！』

『もう十分に浮かべてるっつーの！』

『だったら、どうして上半身がビルに突っかったまんまなんだ！？』

『俺が知るかつ！』

『ぐおおっ、抜けるおおお！』

戦いの相手は高層ビル。

ノーフェイスの爆発に巻き込まれて、遙か彼方まで吹き飛ばされたブラックテイラーは、頭からビルの壁面に突っ込み、上半身が抜けなくなってしまうていた。

ビルに突き刺さった時、宮治は「そ、走太……ボディーの再生を……！ このままじゃ死ぬ……！」と苦しそうな声を上げた。短い時間とはいえ、至近距離からクリムゾンノヴァを受けたのは事実であり、走太はすぐに再生のイメージを浮かべて、ブラックテイラーのボディーを修復させた。

しかし、これがいけなかった。装甲を再生したことで、突き刺さった時よりもボディーの厚さが若干増したらしく、腰が突っ掛かってしまったのだ。

それから手足と尻尾を動かして、どうにか上半身を引き抜こうとしたが、何故か上手く行かず、約十分が経過し、現在に至るというわけだった。

「あっ、抜けた！」

と、不意に、スポン！ と軽快な音を立てて、上半身がビルから抜ける。

『よっしゃあ！』

宮治が喜びを露わにしたのも束の間、

「つて、宮治、下！ 下！」

『へ？』

走太は気付く。自分達が今まで突き刺さっていたのは、高層ビルの地上五十メートル程の位置であり、そこから抜けたということはつまり、空中に放り出されたのと同じことだった。

「ちよつ、落ちる！」

『ぬおおお！？』

翼を創造する暇も無く、ブラックティラーは地面に落下した。

背中から大通りのコンクリートに激突し、円上に亀裂を走らせる。

仰向けで大の字になりながら、走太はモニター越しに、灰色の空を見上げた。

「痛え……頭打った」

『俺は背中全部が痛え……』

走太は、ウィンドウに表示された黒縁眼鏡の悪友に、言う。

「なあ……宮治」

『ん？』

「今、思い付いたんだけどさ」

『何だよ』

「無理矢理上半身引き抜かなくても、お前、人間状態になれるんだから、それで小さくなれば良かったんじゃない？」

ウィンドウの宮治は目を丸くして、両手で頭を抱える。

『……なんてこった！』

ブラックティラーも連動して、頭を抱えた。

『おい、走太！ どうしてそれをもっと早く言ってくれなかったんだ！』

「だから、今思い付いたんだって！ つーか、どう考えても、俺よ

りも先にお前が気付くべきだろ、お前の身体なんだから！」

『おかげで俺は……こんな醜態を晒す羽目に……！』

「いや、それは割といつものことだから、別に気にしなくてもいいんじゃない？」

『どういう意味！？』

そんな会話をしながら灰色の空を見ている内に、走太はふと、ノーフェイスとの戦いが終わったら、宮治に聞こうと考えていた事柄を思い出す。

「宮治。一つ、訊いてもいいか？」

『今度は何だよ！？ 実はあれもこうしておけば良かったんじゃない？ 内容的な内容か！？』

「いや、それとは別の話でさ」

と前置きした上で、走太は彼に尋ねた。

「宮治は、どうして俺をパイロットに選んだんだ？」

『え？』

「いや、何で俺なんかを、自分のキーパーマスターに選んだりしたのかわかって思ってたさ。俺より勇気があって、優秀な奴なんて、他に幾らでもいただろ？」

『突然何を訊いて来るかと思えば、そのことか』

宮治は黒縁眼鏡の位置を直しながら、答える。

『別に大した理由はねえよ。たまたま去年からの付き合いだったっていうのもあるし、たまたまキーパーマスターである麗央奈ちゃんの幼馴染みだったっていうのもある。でも、結局はただの気紛れだな』

「気紛れ？」

『そう、気紛れ。何となく、お前なら面白いキーパーマスターになりそうだなって思ってた、選んだんだ。突き詰めれば、それだけだよ。特殊な理由とかは何にも無い』

「マジでか……」

つまり走太は、能力とか関係無く、宮治の気分一つで選ばれた末、

ノーフェイスみたいな化け物と戦う羽目になったというわけだ。

『正直、恨まれても仕方ないと思ってるよ。俺のせいで、次元獣との戦いに巻き込んだわけだしな。でも、今回のノーフェイスみたいな、前代未聞の強さの奴とは戦わせるつもりは無かったんだ……すまん』

彼はそう言っ、頭を下げる。

「宮治……」

『お前がこれ以上、俺のキーパーマスターを続けるのが嫌だっ言うなら、それも仕方の無いことだと思う。俺に引き止める権利は無い』

いつまで経っても頭を上げない宮治。

走太は彼のつむじに向かって、言う。

「俺は確かに、お前……っっていうか、ブラックテイラーのこと、ずっと恨んでたよ。何で自分が、こんな怖い思いをしなくちゃならないのかって、腹が立った。けどさ……冷静に考えると、そのおかげで得たものも沢山あったんだよな。キーパーマスターになったおかげで、疎遠だった麗央奈と話すきっかけが出来たし、ヘタレな自分にも向き直ることが出来た。それから、ロボット部に入って、神谷先輩や、生徒会メンバーと知り合えたってのもあるし。……えっと、それにあれだ。俺って、ロボットアニメが好きじゃん？ 実戦はともかく、操縦の練習をしてる分には、巨大ロボットに乗るっていう男のロマンが叶って、結構嬉しかったりもしたんだよ。何より

――」

さっきまで、あんな怖い思いをして、命懸けで戦っていたというのに。

「今さ、何か凄く清々しい気分なんだ、俺」

仰向けで見上げた灰色の空は、決して綺麗とは言い難いのだけけど、胸には爽やかな風が吹き抜けている気がする。

不思議な充実感だった。生まれてこの方、こんなにも充実した気持ちを感じたことは、今まで一度も無かった。

「だから、今の俺は、お前を恨んでいない。むしろ、感謝してる」
『え？』

ようやく顔を上げた宮治に、走太は言った。

「俺を選んでくれてありがとな、ブラックテイラー」

宮治は最初、驚いたように目を丸くしていたが、やがていつもの
ポーカーフェイスに戻り、

『おうよ』

ニヤリと口元を歪めて、ブラックテイラーの右手を動かし、サム
ズアップをしてみせた。

その後、ブラックテイラーのコクピットに菜美子からの通信が入
って、源平と麗央奈が無事に御門学園へと帰還したことを知った。

走太も宮治と共に、御門学園の敷地内に戻ると、源平が目を細く
して待っていた。

「お疲れ様、二人とも」

ポンポンと肩を叩かれる。

そうして笑い合った後で、走太は尋ねる。

「神谷先輩。麗央奈は今、どうしてます？」

「ああ、紅坂なら、現実世界の方の保健室に居るよ」

「えっ！？ まさか、何処か怪我でもしたんですか！？」

「うん、ちよつとね……」

走太は損傷したレッドラスの姿を思い出し、背筋に寒気が走った。

「俺、保健室に行つて来ます！」

居ても立っても居られず、校舎の方へと駆け出す。

「あつ、小林！」

源平が何か言おうとしたが、今はとにかく、麗央奈のことが心配
で、立ち止まらずに保健室へと向かった。

慌てて駆けて行ってしまった走太の後ろ姿を眺めながら、源平は「あちゃー」と後ろ頭を掻いた。

「どうしよう、あの様子だと、絶対深刻だと思ってるよね……」

実際はそこまで大したことでは無く、本当に『ちよつと』した怪我なのだが、走太はどうやらその『ちよつと』を、悪いニュアンスで受け取ってしまったらしい。

「うーん、追い駆けて訂正した方がいいのかなあ……」

「放って置いても大丈夫だと思いますよ」

と隣に立っている宮治が言った。

「保健室で麗央奈ちゃんと会えば、大した怪我じゃないって、すぐに分かるでしょうし。それに、幼馴染み同士、水入らずで話すこともあるかと」

「それもそうか。じゃあ、今のは結果的にグッジョブだったってことかな？」

「ええ。こうでもしないと、あいつの場合、麗央奈ちゃんとうやうや顔を合わせたらいいかで、数日くらい悩みそうですしね」

「なるほど」

源平は校舎の方を見つつ、もしも仲直りが上手く行ったなら、後で走太に何か飯でも奢ってやろうと思った。

「大丈夫か、麗央奈ああ——つつつ！」

「ばあん！　と大きな音を立てて、走太は保健室の扉を開け放った。へ？」

麗央奈は走太の姿を見て、黒い瞳をぱちくりさせる。

保険室の先生（女性・二十代前半）の前で、椅子に腰掛た彼女は、右腕の甲に湿布を貼って貰っていた。

「ど、どうしたの走太？ そんなに慌てて」

「神谷先輩から、麗央奈が怪我したって聞いて……！」

「怪我って言う程、大したものじゃないけど……」

麗央奈は右腕の湿布を指し示す。

彼女曰く、ノーフェイスとの戦闘で、クリムゾンノヴァによって弾き飛ばされ、ビルに激突した際に、衝撃でコクピット内の計器に腕をぶつけてしまったのだという。

若干赤く腫れて、触ると痛んだので、とりあえず保健室で診て貰うことにしたらしい。

腰まで伸ばした長い黒髪が綺麗な保健室の先生は、くすくすと鈴を転がすような声で笑った。

「一日くらい湿布を貼っておけば、すぐに直るから、心配しなくても大丈夫よ」

「そ、そうですか……」

走太は全身から、どつと力が抜けて行くのを感じた。

湿布を貼り終えた先生は「さてと」と立ち上がり、

「麗央奈ちゃんも、小林くんも、ノーフェイスとの戦闘で疲れたんじゃない？ 私は席を外すから、二人ともここで少し、休んで行きたら？」

「え？」

走太は目を丸くする。

どうしてこの人が、ノーフェイスのことを知っているのか。

訊こうと思ったが、先生は走太の肩を叩き、「頑張ってね」とウインクをして、廊下へと出て行ってしまふ。

呆然としていると、麗央奈が言った。

「あの先生ね、御門学園の卒業生で、昔、レッドラスのキーパーマスターをやってたんだって」

「そうだったのか……」

「だから、私がレッドラスのパイロットになったばかりの頃に、結構相談に乗って貰ったりしてたんだよ」

ふと、走太はそこで気付く。

保健室の先生が居なくなっただけで、部屋の中には今、走太と麗央奈の二人だけだった。

（ど、どうしよう……）

走太は困ってしまった。

麗央奈が怪我をしたと聞いて、慌てて飛んで来たので、すっかり忘れていたが、走太には彼女に謝らなければいけないことが沢山あったのだ。

ちらと麗央奈を見ると、目が合う。思わず視線を逸らす。

凄く気まずかった。

何せ、自分は一度ならず、二度までも、彼女を目の前にして逃げ出したのだ。

最後には、何とか助けに行くことが出来たが、それで過去に逃げ出したという事実が消えるわけではない。

「えっと、その……」

ただ、それでも。

走太はぎゅっと拳を握り締める。

「ご、ごめん！」

頭を下げて、言った。ただし、言ったのは走太だけでは無かった。

「え？」

次に発した言葉も被った。顔を上げると、幼馴染みの少女も顔を上げたところであり、赤毛のポニーテールが合わせて揺れる。

お互いに目を瞬かせた。

「ど、どうして麗央奈が俺に謝るんだ？」

「だって私……この前、保健室で走太を怒らせちゃったし……」

「そ、それは違う！　麗央奈は何も悪くない！　あの時はただ、俺が臆病で、ノーフェイスと戦うのが怖くて仕方が無かったから……。だから、麗央奈が謝る必要なんて、どこにもない。謝らなくちゃいけないのは、俺の方だ」

走太はもう一度、頭を下げる。

「ごめん、麗央奈！　十一年前、お前を見捨てて逃げ出したりして！」

「え？」

「本当はずっと、謝りたかった。謝らなくちゃいけないって思ってた。だけど俺、今更どんな顔してお前に会って謝ったらいいか、分からなくて。俺がキーパーマスターになって、いざ話せるようになって、謝ることで関係が気まずくなって、また話せなくなってしまうんじゃないかって、怖くて。結局、謝るのにここまで掛かった。本当にごめん！」

「走太……」

「それだけじゃない。今回のこともそうだ。ノーフェイスと戦うのが怖くて、逃げ出して、またお前を見捨てようとした。俺は十一年前と同じことを繰り返すところだった。見捨てるどころか、今度は危うく見殺しにするところだった。ごめん……！」

「顔を上げて、走太」

走太は麗央奈を見る。彼女は、柔らかな表情を浮かべていた。

「私もね」

と麗央奈は言った。

「私も、走太と同じで、色々なことから逃げてたんだ」

「俺と同じ……？」

「うん。昔の私はさ、走太も知っての通り、気が弱くて、人見知りで、赤い髪にコンプレックスを持ってて、走太に頼ってばかりで、いつも逃げてた。その結果、呆れられて、走太は私から離れて行っちゃって」

「ち、ちよつと待て！　俺はお前に呆れたわけじゃない！　俺が逃げ出したのは、俺自身が臆病者だったからで……！」

「そう……なの？」

「そうだよ！　俺が麗央奈に呆れたりするはずがない！　俺が逃げ出したのは、ただ単に、自分が痛い目を見るのが怖かったからだ！」
「そうだったんだ……。私、勘違いしてたんだね……。でも、やつ

ぱり、走太に見捨てられても、仕方が無かったと思う」

「そんなこと……」

ない、と走太は言おうとしたが、麗央奈は首を横に振る。

「私、弱かったから。私があの時、イジメを跳ね除けるくらいに強かったなら、走太と離れずに済んだはずだよ」

「それは……！」

「私は、走太が離れて行ってしまった後、もっと強くなろうと思った。強くなれば、走太が私を認めて、戻って来てくれると思ったから。でも、実はそれも、現実から目を背けて、逃げてただけだったんだ。本当は走太と直接話して、仲直りすればいいだけの話だったのに、もしも走太に拒絶されたらどうしようって思うと、凄く怖くて、私は自分を磨くことでしか、気持ちを表現出来なかった」

麗央奈がそんな風に考えてたなんて、思いもしなかった。

走太は、凄く情けない気持ちになる。

彼女は言葉を続ける。

「でも、私ね、今回のノーフェイスとの戦いを通して、決めたことがあるんだ」

「決めたこと？」

「うん。走太が怖いって気持ちを抱えながらも、逃げずにノーフェイスと戦ったように、私も逃げずに、走太にちゃんと気持ちを伝えようって思ったんだ。今だってこうして、勇気を出して、私に謝ってくれたでしょ？ だから、私も」

そう言って、麗央奈は椅子から立ち上がる。

保健室の入り口辺りに立っている走太のところへやって来て、彼女は走太の目を、真っ直ぐに見つめる。

長身の麗央奈とは、ほとんど目線の高さが変わらない。

「走太」

「う、うん」

「私は、走太に、傍に居て欲しい」

そう言われた瞬間、心臓がドキッと高鳴った。

「昔みたいに、っていう風には行かないかもしれないけど、私はもつと、走太と仲良くしたい。走太もつと沢山話したい」

彼女の黒い瞳が、走太の視線を捉えて離さない。

「私、これからもつと、ちゃんと強くなるうと思う。走太にまた頼ったりすることはあるかもしれない。でも、その代わり、走太が困っていたら、ちゃんと助けられるようにになりたい。そうやって、お互いが困っていたら、助け合えるような関係を築けて行けたらいいと思う。だから、上手く言えないけど――」

彼女は走太の前に、手を差し伸べて、言った。

「今日からまた、私の幼馴染みになつてくれませんか？」

走太は、ボツと自分の顔が熱くなるのを感じた。

「あつ……えつと……」

「駄目……かな？」

麗央奈が不安そうな表情を浮かべて、伏し目がちに尋ねて来る。

走太は、ぶんぶんと激しく首を横に振った。

「そ、そんなわけない！」

断る理由なんてあるはずが無い。

走太は、麗央奈の手を取った。

「お、俺でよければ、よろしくお願いします！」

すると、彼女は本当に嬉しそうに、

「うん！」

走太の大好きな、満面の笑顔を見せてくれた。

しかし、同時に、走太の胸にはどうしようもなく恥ずかしい気持ち がせり上がって来る。

熱くて仕方が無い顔を、両手で押さえて隠す。

さすがに麗央奈も気付いたらしく、首を傾げる。

「どうしたの？ ひよつとして私の口上、かなり恥ずかしかった？」

「いや……麗央奈は凄く格好良かった。恥ずかしいのは、俺の方で……！」

「どういうこと？」

「本当は……俺の方から言おうと思ってたんだ……」

「え？」

「俺と仲直りしてくれませんかっ」

本来、自分の方から言わなくてはならなかったのだ。

だって、そもそも十一年前、最初に逃げ出したのは自分の方で。

幼馴染みの関係を壊したのは、間違いなく自分なのだ。

だから、また幼馴染みになってくれませんかっと言わなくちゃならないのは、麗央奈じゃなく、自分の方なわけで。

そう思うと、無性に情けないやら、恥ずかしいやらで。

「女の子の麗央奈に大事なこと言わせて、何だか俺……凄く格好悪いなと……」

赤面せずにはいられない。

と、その時だった。

「そんなことないよ」

麗央奈の頭の後ろで結ったルビー色の髪が揺らめいて、走太の身体は、温かな感触に包まれた。

「な……」

心臓が止まるかと思った。

状況を理解するのに、およそ十秒を要した。

「れ、麗央奈……！？」

走太は、彼女に抱き締められていた。

背中に手を回されて、彼女の小さな頭が、走太の左肩のところにあって。仄かな甘い匂いが鼻孔をくすぐる。胸には柔らかな感触が当たっていた。

一瞬止まりかけた心臓は、早鐘のように、ばっくんばっくんと脈打つ。

先程までとは違う意味で、顔が熱くなる。顔どころか、麗央奈に触れられた部分、全てが熱い。

耳元で、彼女は言う。

「走太、ブラックティラーに乗って私を助けに来てくれた時、凄く

格好良かったよ?」

走太は言葉を返せない。

「私、あの時、本当に嬉しかったんだ」

彼女は走太をぎゅっと抱き締めながら、とても優しい口調で、告げる。

「だから、格好悪いなんて、そんなことないよ」

「う、うん」

ようやく走太が返せたのは、そんな相槌だけだった。

麗央奈は抱き付いたまま、甘えるような声で「ね、走太」と訊いて来る。

「もう少しだけ、このままで居てもいい?」

「ええっ!? あっ……その……麗央奈がそうしたいなら……」

「ん……ありがとう」

走太の左肩に顎を乗せて、彼女はしばらく、そのままだった。

彼女の背中に手を回そうかどうか、少し考えもしたが、何だか不純な気がして、結局何も出来なかった。

やがて、身体を離れた麗央奈は「えへへ」と照れ臭そうに笑う。

「これで仲直りだね」

「あ、あのさ、麗央奈」

「うん?」

走太は彼女に言った。

「今までのお詫びってわけじゃないけど、俺に何か、出来ることないか?」

「え?」

「迷惑じゃなければ……だけど。やっぱり、何か一つくらい男らしいことしないと、俺の気が済まないっていうか……」

ただのちっぽけなプライドだけだ。

彼女はしばらく思案していたが、やがて恥ずかしそうに、もじもじと人差し指を突き合わせる。

頬を赤く染めながら、

「じ、じゃあ、あのね――」

エピソード

走太と二人でどこかへ遊びに行きたい、というのが、麗央奈の要望であった。

「せっかく仲直り出来たわけでしょ？ だから、幼馴染み同士、親交を深める為にも、走太とどこか一緒に遊びに行きたいなあって、思うんだけど……」

もともと走太から、自分に何か出来ることはないかと言い出したのであり、加えて麗央奈のような可愛い女の子と出掛けるのが嫌であるはずもなく、その週の日曜日に、御門市へと遊びに行くことになった。

目的地は、ノーフェイスが繭を作っていたショッピングセンター。その中には映画館もあって、ちょうど話題の映画をやっていたので、それを一緒に観た後に、ショッピングセンターの中をぶらぶら出来たらいいな、と思ったのだ。

本当はもっと、女の子と二人で出掛けるのに適した場所があるのかもしれないが、書店の雑誌コーナーに足を運び、『デートスポット』を調べている内に、自分が麗央奈と出掛けることを、『デート』と強く意識していることに気付く。

（いやいやいやいや、俺はあくまで、幼馴染みの麗央奈と遊びに行くのであって、決してデートに行くというわけでは……！ しかし、男女が二人で出掛けるっただけで、それはもうデートなのか……？ いや、でも——）

悩み続けた結果、頭がパンクしそうになったので、これはデートではない、と思うことにする。

というか、そもそも走太は生まれてこの方、女の子と二人で遊びに出掛けたことなど、一度も無いのだ。

変に格好付けて、雑誌に乗ってるようなデートスポットに出掛けたところで、ボロが出て失敗するのがオチだ。

だったら、男友達と行くような、肩の力を抜いて楽しめる場所の方がいい。幸い、麗央奈も走太の提案に頷いてくれた。

そんなわけで、六月五日、日曜日。走太は朝七時には起きて、出掛ける準備を始めていた。

朝食を食べて、いつもは大して意識をしない身だしなみを整え、朝の九時前には玄関でスニーカーを履き、靴紐を結ぶ。

「おうおう、気合いが入ってるじゃねえか、クソガキ」

年甲斐も無く露出度の高いタンクトップと短パン姿の母が、見送りに来る。

「まあ、一応、女の子と出掛けるわけだし。身嗜みくらいは整えないと、相手に失礼っていうか……」

「ヘタレの teme にしては、いい心掛けだ。後は、デートの中で、どうやって上手く麗央奈ちゃんを口説き落とすかな！」

「いや、口説かねえよ！ 別にデートに行くわけじゃないし！」

「馬鹿野郎！ そんな気概でどうする！ 麗央奈ちゃんを我が家の嫁に迎える計画は、もう既に始まっているんだぞ！」

「何その計画！？ 俺、全く聞いてないんだけど……」

始まっているかどうか以前に、計画の存在すらも初耳だった。

「四の五の言つてないで、お前は麗央奈ちゃんに告白すりゃあいなんだよ！ そんなんだから、お前はヘタレだってんだ！」

「いや、それ以前に、麗央奈はあくまで俺の幼馴染みなのであって、告白するとかしないとか、そういうんじゃない……」

「あのなあ」

首に腕を回され、グイッと引き寄せられる。

ひそひそ話をするように、耳元で言われた。

「幼馴染みなんて適当な言葉で濁してると、その内誰かに取られちゃうぞ？」

「うぐ……！ れ、麗央奈は！」

走太は母の腕を払い退ける。

バッグを持って立ち上がり、玄関のドアノブに手を掛ける。

振り返って、言った。

「俺の幼馴染なんだよ！」

外に飛び出し、ボタン！ と勢い良く扉を閉める。

家の中から「麗央奈ちゃんに変なことしなかったら承知しねえかな〜！」という母の声が聞こえて来る。普通は逆だろ、こういう母親だよ、と思わざるを得ない。間違っても麗央奈の両親には聞かせられない台詞である。

とにかく、走太は肩にバッグを掛けてから、駅に向けて一人歩き出した。

麗央奈を待たないのは、彼女との待ち合わせ場所が、御門駅前だからである。

家が隣同士なのにも関わらず、何故そうなったのかというと、これまた麗央奈の要望によるものだった。

「出来たら、御門駅前での待ち合わせにしたいんだけど……駄目かな？」

「え？ どうしてだ？ 家が隣なんだから、普通に一緒に出掛ければいいんじゃない……」

「そ、それはそうんだけど、せっかく二人で遊びに行くわけだし、何というか、その……待ち合わせにした方が……っぽいって言うか……」

「ん？ ごめん、よく聞き取れなかった。待ち合わせにした方が何っぽいって？」

すると、彼女は慌てて、首を横に振り、

「い、いや、何でもない！とにかくちょっと、女の子の事情っていうか！出来るなら、駅前集合にして貰えると、凄く有り難いんだけど……」

「まあ、麗央奈がそうしたいって言うのなら、別に俺はそれで構わないよ」

「う、うん！じゃあ、日曜日の午前十時に、御門駅前で待ち合わせね！」

何故か妙に嬉しそうな顔で言う麗央奈だった。

走太は十分程歩いて、地元の駅に行き、電車に乗って御門駅へと向かう。

御門駅構内に着くと、日曜日とあって、御門学園の制服姿は全く見えなかった。日曜日に御門市に来るのは稀なので、何だか新鮮な気分だ。

携帯を開いて時刻を確認すると、待ち合わせの午前十時には、まだいささかの余裕があった。

「そういえば……」

ふと気付いたのだが、麗央奈の住所は走太の家の隣であり、そこから御門駅に向かうには、走太と同じように、地元の駅から電車を利用すると考えるのが普通だ。

しかしそれでは、午前十時くらいを目指して家を出て、御門駅へと向かった場合、途中で走太とブッキングする可能性が高くなる。

ということは、だ。

（もしかして、麗央奈の奴、もう待ち合わせ場所に来てるんじゃないか……？）

走太は早足で、待ち合わせ場所である南口の駅前広場へと向かった。

広場の中を歩き、目立つであろう、赤色の髪を探す。

果たして、麗央奈は既に、駅前広場の片隅で待っていた。そして、予想通り、注目を集めていた。

通り掛かる男性は勿論、女性も、カップルでさえ、彼女へと視線を向けている。おかげで、メールも電話もする必要無く、見つけることが出来た。

珍しい上に、宝石のルビーのように綺麗な赤色の髪をしているので、通行人の人達が振り向いてしまうのは、当然のことだろう。

走太は彼女の所へと歩いて行く。

彼女の名前を呼ぼうとして、

「れ……」

走太は絶句し、途中で立ち止まってしまった。近付いてみて、彼女がどのような恰好をしているのかを、改めて知ったからだった。

麗央奈は、白いワンピースを着ていた。袖とスカートにフリルが付いており、スカートは短めで、そこから伸びた白く長い脚が眩しい。胸の下の方にピンクのリボンが付いており、そこで胴回りをきゅっと締めつけて、彼女の胸の大きさが強調され、スタイルの良さが際立っている。履いている茶色の靴は、自身が長身であることを意識してか、靴底の低いものをセレクトしている。手には白のミニバッグ。

加えて、いつもはポニーテールにしている髪を、今日は下ろしていた。麗央奈は特に癖毛のいうわけでは無いので、髪を下ろすと腰まで伸びたストレートロングヘアになる。前髪の左側を白い花のヘアピンで留めており、赤色の髪と、純白のワンピースとヘアピンのコントラストが、非常に美しい。

走太個人の明け透けな感想を言うならば、今日の麗央奈は、滅茶苦茶可愛かった。雑誌のモデルなんて目じゃない。自分がアイドルのスカウトマンだったら、間違いなく声を掛ける。それくらいの可愛さだった。

そりゃあ、通行人の注目も集めるはずである。

(参ったな……)

走太は足を止めたまま、動けなくなってしまった。

別に麗央奈との間にはもう、何の溝も、わだかまりも無いのだから、気軽に「おはよう」と挨拶すればいいだけの話なのだが、何故だか凄く緊張してしまう。

気温が高いわけではないのに、握った手の平が汗ばむ。

麗央奈はまだ、走太の存在に気が付いていない。

そうやって、躊躇している内に、

「ねえねえ、その彼女」

走太よりも先に、彼女に声を掛ける輩が現れた。

「ひよっとして一人？ もし良かったら、これから俺達と一緒に遊

ばない？」

人数は三人で、いずれも髪を真つ金々に染め、服をだらしなく着こなし、耳やら口やら鼻やらにピアスを付けた、お世辞にも柄が良いたとは言えない男達であつた。

麗央奈は首を横に振る。

「いえ、申し訳ないですけど、待ち合わせをしてる人が居るので」「えー、そうなのー？ 誰それ、ひよつとして彼氏？」

見るからにあしらう気満々の麗央奈は、笑顔を浮かべる。

「はい、そうなんです。彼氏を――」

が、そこで何故か、彼女は言葉を詰まらせる。

笑顔を曇らせ、俯き、言う。

「……いえ、幼馴染みを待ってるんです」

「はあ？ 幼馴染みい？ 何だよそれ、あははははは！」

金髪の男達は笑う。

それから麗央奈に詰め寄り、

「幼馴染みだったら、いいじゃん別に。放って置いて、後でメールでも何でもすればさ。今日一日、俺らと遊ぼうぜ！ な？」

「お断りします」

「俺達さあ、君を一目見た時、凄え可愛いつて思っちゃったんだよね。だから、彼氏がいないってんなら、そう簡単には諦め切れないっていうかさ」

話し続けていた金髪の男が、いきなり麗央奈の腕を掴んだ。

彼女は険しい表情になって、すぐにそれを振り解く。

「何をするんですか！ 触らないで下さい！」

「おおっ、びつくりした。清楚系かと思つてたら、以外と気が強いんだね。まあ、俺は、そういう子嫌いじゃないけど」

周りの二人と合わせて、下卑た笑い声を漏らす金髪。

身の危険を感じてか、黙つてその場を離れようとする麗央奈。が、金髪は彼女の肩を掴んで、それを制する。

「なんだよ彼女ー。別に逃げなくたっていいじゃん？」

「離して下さい！」

麗央奈が大きな声を上げる。
その瞬間。

「麗央奈っ！」

走太は、彼女の名前を呼んでいた。

「あ？」

「走太……！」

金髪の男達三人と、麗央奈が、それぞれ走太の方を向く。

走太は足を、前へと踏み出す。歩いて行って、麗央奈の肩を掴んでいる金髪の前に立った。

「彼女から手を離して貰えますか？」

金髪は眉根に皺を寄せ、麗央奈を離すと、走太に顔を近づけ、至近距離から睨み付けて来る。

「誰だお前？ ひょっとして、この子が言ってた幼馴染みって奴か？」

彼は、ふんと鼻を鳴らし、

「悪いんだけどさ、俺達今、彼女と大事な話してんだよね。幼馴染みだか何だか知らないけど、引っ込んでくれる？」

「違います」

「は？」

「俺は――」

走太は目を逸らさず、金髪と視線をぶつけたまま、言った。

「その子の彼氏です」

「彼氏だあ？」

「はい」

「嘘吐いてんじゃないぞ、テメエ」

「彼氏ですつつっ！」

出せる限りの大声で、叫んだ。

金髪が驚いたように、近づけていた顔を離す。

そのまましばらくお互いに睨み続けていたが、やがて「ちっ」と

舌打ちをして、金髪の方が視線を逸らす。

「何だよ、結局、彼氏持ちなんじゃねえかクソッ！ 行こうぜ！」
吐き捨てるように言って、他の男二人と共に、その場を去って行く。

金髪達の姿が完全に人混みの中に消えたのを確認したところで、走太の全身から、どっと冷や汗が吹き出した。

肺に溜まっていた空気を全て吐き出し、それから目一杯吸う。

「し、心臓が止まるかと思った……！」

今更になって、膝がガクガクと震えていた。

場合によっては、殴り合いに発展する可能性もあったわけで、金髪の男達が退いてくれて、心底良かったと思う。

いや、そんなことよりも今は、麗央奈の無事を確認することが先決だ。

「大丈夫だったか、麗央奈？」

走太が振り返ると、彼女は――

顔がゆでだこのように、真っ赤になっていた。

「あ……」

麗央奈が赤面する理由なんて一つしかなく、走太自身も顔が熱くなる。

彼女は両手でミニバッグの取っ手を握り締め、俯き、黙り込んでしまう。

先の金髪男達とのいざこざもあったが、周囲からの注目が更に集まっている。

なので走太は、麗央奈に近付き、彼女の手を取った。

「え……！？」

顔を上げて、熱っぽく潤んだ瞳を見開く麗央奈。

「と、とりあえず、行こう」

「う、うん」

彼女がこくこくと頷いたのを確認してから、手を引いて、その場を離れる。

駅前の通りを、ショッピングセンターの方へと歩いて行く。繋いだ手が、焼けるように熱かった。全力疾走でもしたかのように、しかしいつまで経っても落ち着くことなく、心臓は大きく速く、鼓動を繰り返していた。

「あの……走太」

ふと、麗央奈が口を開いた。

「ど、どうした？」

後ろを見やると、そこには麗央奈のはにかんだ顔があつて。

「助けてくれて……ありがとう」

「っ!？」

一際ドキッと心臓が脈打って、走太は進行方向へ顔を背けた。動揺したのと、もともと汗ばんでいたのとで、繋いでいた手が滑ってすっぱ抜け、離れる。

しかし、すぐに麗央奈が走太の手を取り、握り直して来る。

「……お、おう」

走太はそれだけ答えて、彼女の手をそつと握り返した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8727t/>

学園戦機ゲートキーパー

2011年7月16日03時18分発行